

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

昭和三十五年七月二十日印刷 第一巻第九号
昭和三十五年八月一日発行 (毎月一回一日発行)

風俗奇譚

幻妖異虐特集

風俗奇譚

昭和三十五年七月二十日印刷 第一巻第九号
昭和三十五年八月一日発行 (毎月一回一日発行)



レスビアン
戦慄・猟奇の妖怪実話集

8

幻妖異虐特集

8

定価 140 円



物干しのむつごと——喜多川歌麿筆の“会本都功密那倍”より



青楼十二時

女の共寝——喜多川歌麿筆の“青楼十二時・辰の刻”より



風俗奇譚 八月号 目次

(多色刷口絵) 緊縛二重奏

(折込み)

グラビア

スタンダードの美女		(一一)
柔肌しほり		(一四)
竹責め		(一六)
落花の閨縛		(一八)
浴衣の受縛		(二〇)
亀甲しほり		(二二)
地獄に落ちた男		(二四)
男性に緊縛		(二六)
両手づり		(二七)
悦虐の白肌		(二八)
こぼれる妖美		(三〇)
うしろ手の姿		(三二)
二つ折り		(三四)

口絵・荒れ小屋の残虐・お針子の愛難・ウインチづり・つるべ責め

江馬美久(三五)

特集 レスビアン生態

(四〇)

レスビアンの実体		大達欣治(四〇)
東西レスビアンの愛の技法		かびや・かずひこ(四四)
レスビエンヌ		ビエル・ロビス(五四)
レスボスへの誘い		川島勇人(五六)

サディストとマゾヒストの往復書簡

谷貫太(六四)

あたしの悦虐プレイ		本郷みゆき(七三)
“男”に加えられる責め		芦立鋭吉(七八)
あたしのパンティーへの興味		星山碧生(九一)
ひまわりー死体を肥料にー		南原繁(八二)

妖怪変化とセックス		三崎光男(九六)
若い女についた死霊		岩村準吉(九九)
殺した女の怨霊に招かれた男		古川高志(一〇四)
亡霊に復讐された男女		志乃田藤美(一〇六)
妖異変化諸国ばなし		千石仙太郎(一一〇)

化粧室談義		雨妙院一太(一二七)
-------	-------	------------

真珠とり海女奇談		檜原祥三(一三三)
----------	-------	-----------

明治性的珍聞史(7)		(八六)
------------	-------	------

少年の腎肉切り・野口男三郎		新海米太郎(一三六)
---------------	-------	------------

★読者サロン		(一四八)
--------	-------	-------

“美少年の家”探訪記

佐東英策(五八)





男乳をみられる



緊縛二重奏

白い肌を情しげもなくむきだした股体
で若い女が二人 床柱にゆわえられ
ている その緊縛の姿でる夢幻の境地
に 彼女らは遊び 見るものの官能に
点火する あわれ 静かなる部屋に片
隅の ひそかなる悦のひとときよ！

《鏡の中のあたし》

鏡に写った自分の肌は生々しく、つやつやと白く輝き、
 肌は惹きつけられ、なめらかに光っている。
 鏡に写したあたしの肌は、惹きつけられ、
 肌は惹きつけられ、なめらかに光っている。
 鏡の中のあたしの肌は、惹きつけられ、
 鏡の中のあたしの肌は、惹きつけられ、
 いつも見えないあたしの肌は、惹きつけられ、
 いともたに、あたしの肌は、惹きつけられ、
 そして、あたしは、あたしの肌は、惹きつけられ、
 うつろりと、あたしの肌は、惹きつけられ、
 陶酔させる、あたしの肌は、惹きつけられ、

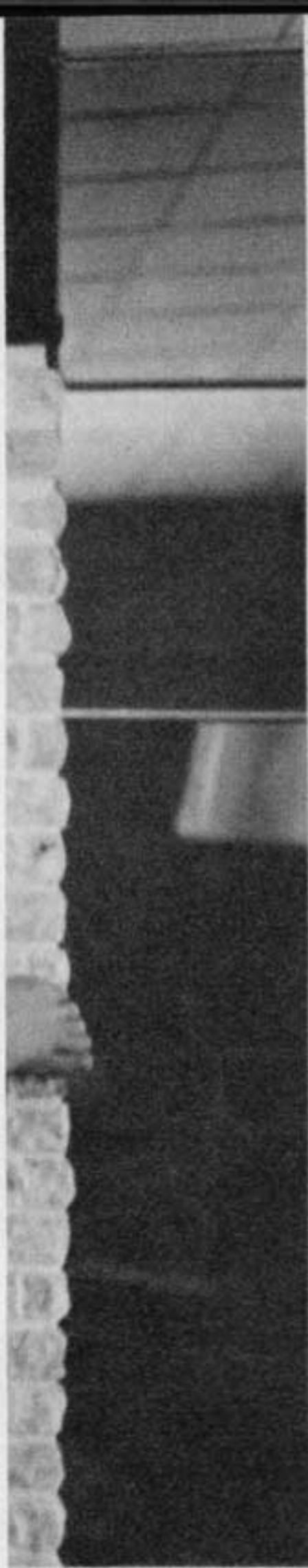


オルデンブルムをテーマにしたパイロス嬢の鏡

スタンドの裸女



スタンドの棚には洋酒のビンがズラリ 熱帯魚のケ―
スが 落ち着いた雰囲気をかもしだすホーム・バー
サカナは縄でしばった ピチピチとした若い裸女一人

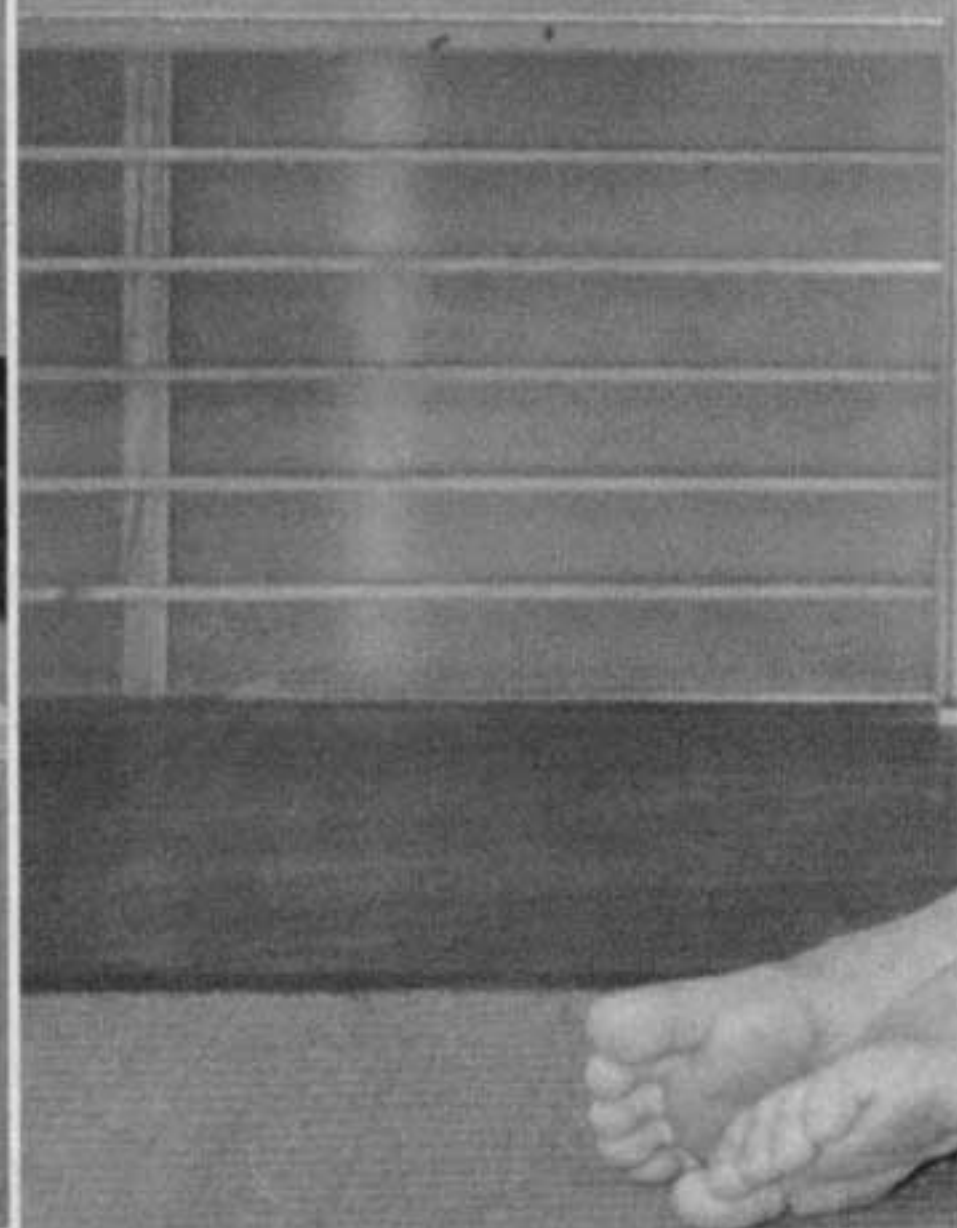






柔肌しばり

シュミーズ一枚をわずかに腰にまとった
姿で うしろ手にくくりあげられた床の
間の隅 なよなよとたわむれる掛け軸の
日本調の美女との対照が鮮烈 裸身にく
い入る縄の感覚に陶醉して 現代の美女
は あやしい官能の世界に 遊んでいる

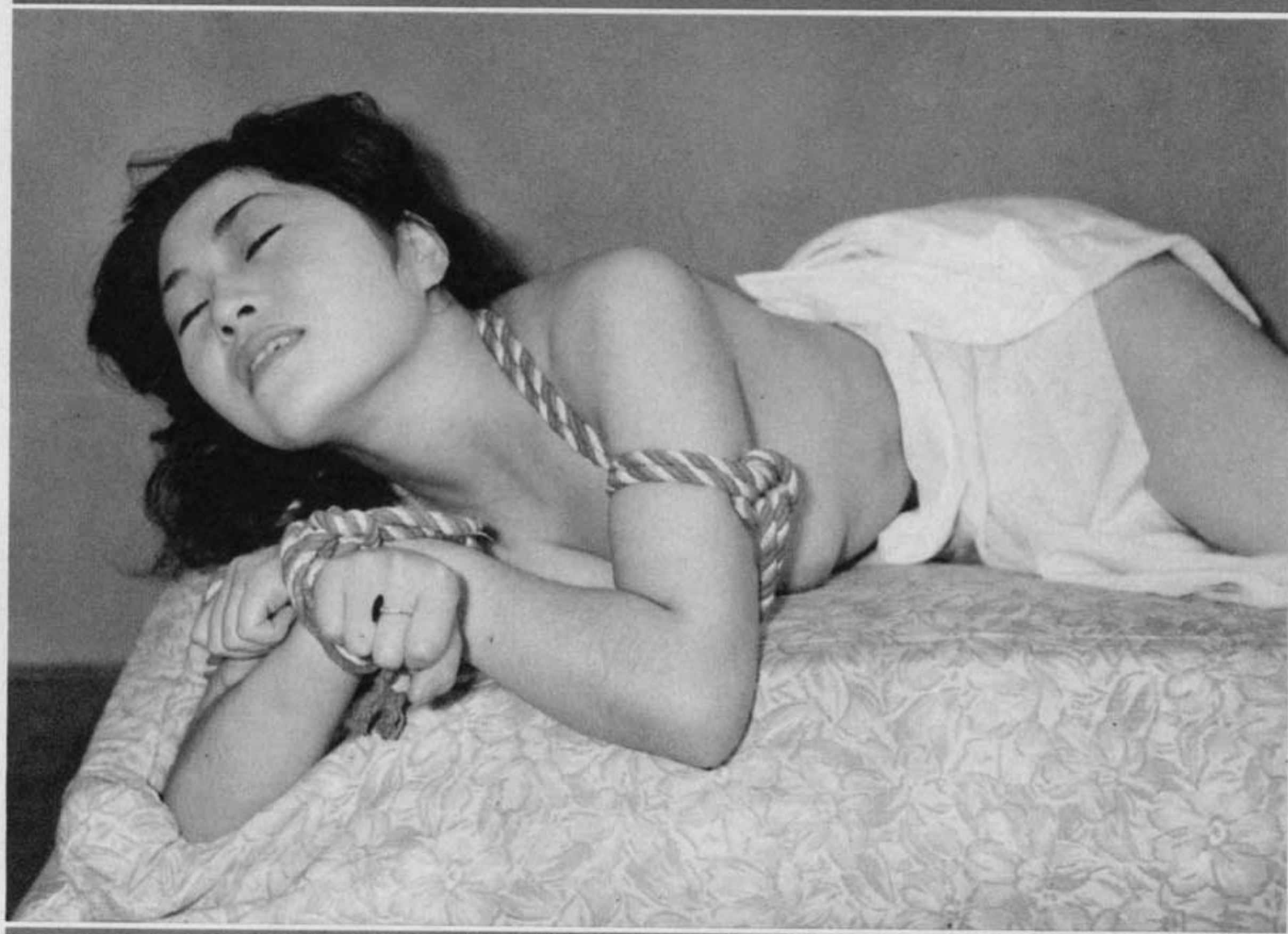




竹責め

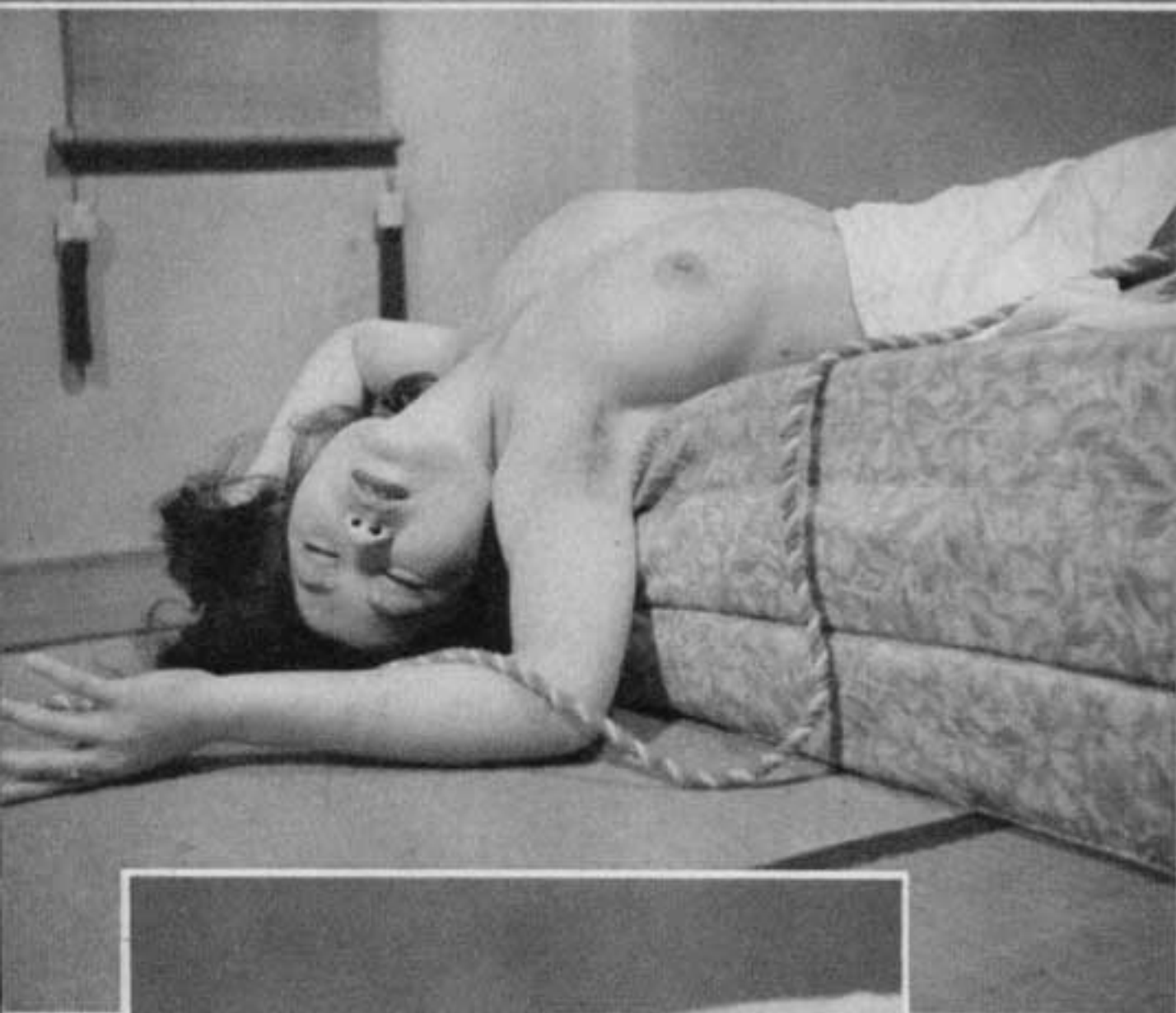
竹は 肌を打っただけでなく 四本合わせ
て棒をつくると それがまた 責めの道
具につかわれる その棒のなかで両手を
しばられ 足をゆわえられると ワナに
掛かったケモノのように 女は 身動き
も不自由に もがいたとて せんない
だが この境地にもまた 法悦の生き甲
斐を感じるといふのだから 女という生
き物は まったく不思議微妙なものだ





落花の閨

縛られて 痛められて 失心寸前でほうり出された裸身は
グッタリとデヴァンの上に身を投げ出して ひとときの愉
悦にひたっている 責めぬかれ 痛めつけられたあとにく
る えもいわれぬ境地は 桃源境か 天国か それとも百
花咲き乱れる花のしとねか とにかく 女体の奥ふかく眠
っていた官能に 強烈このうえない火をともし燃えさかる





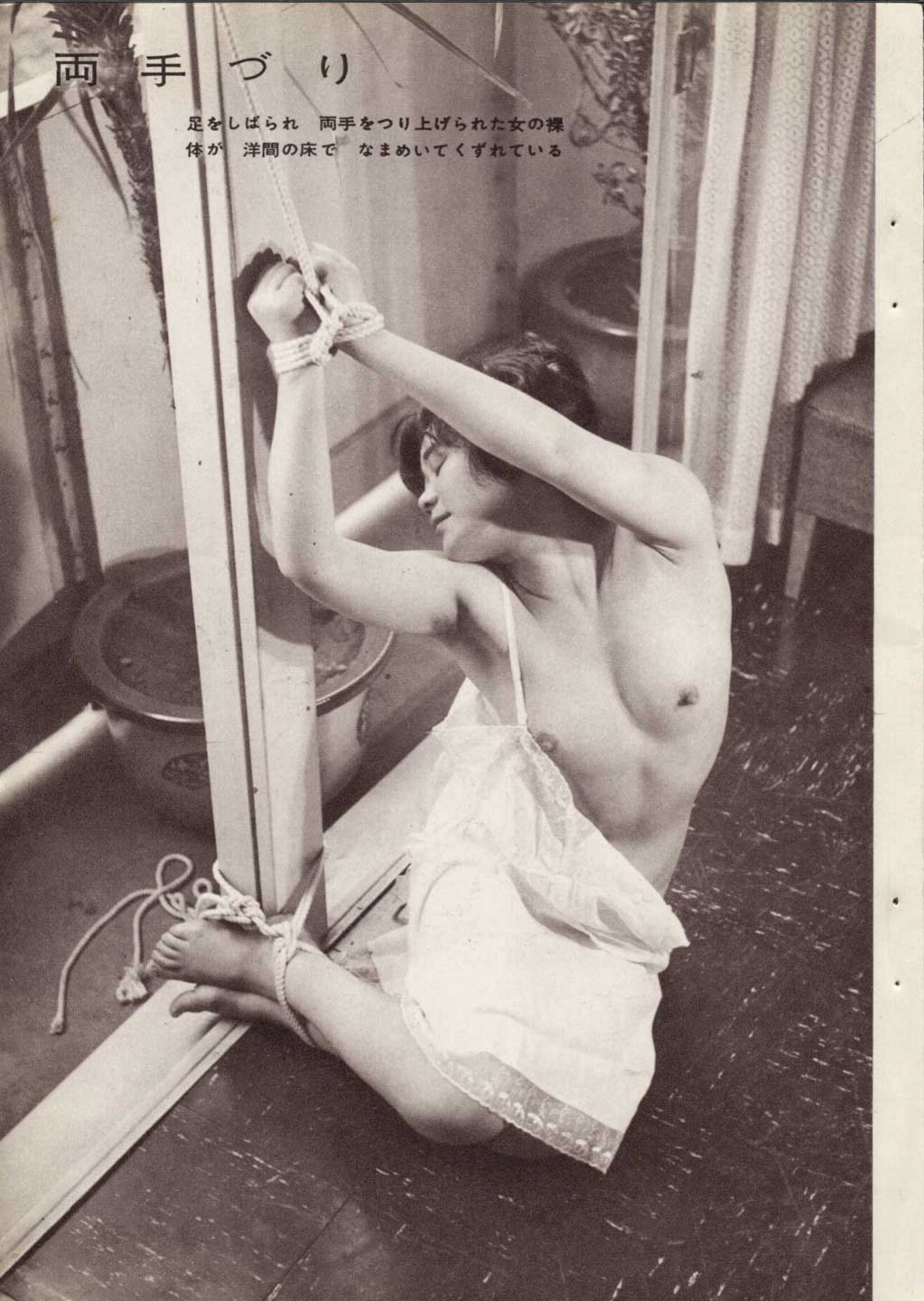
浴衣の受縛

浴衣の裾が乱れて 太ももの肌が
白い 胸もとからは 乳房がこぼ
れて ああ 大きく息づいている



両手づり

足をしばられ 両手をつり上げられた女の裸
体が 洋間の床で なまめいてくずれている





悦虐の白肌

縄のあいだから ふっくらした乳房
がこぼれ 首に巻かれた縄が 息を
苦しくする その残虐な行為のなか
に 女は 独特の感覚で 陶酔する
術を知っている 甘い官能にしびれ
る方法を からだで じかに感じと
る 冷たい床も気にならないほど
白い肌は カッカッと 燃えている





こぼれる妖美

苦痛の表情のかげに 喜悅の思
があふれ もだえるからだは 甘
美ななまめかしさに くねる 女
の受縛の姿態が 奇妙なハーモニ
ーをかなで リズムを 高鳴らす





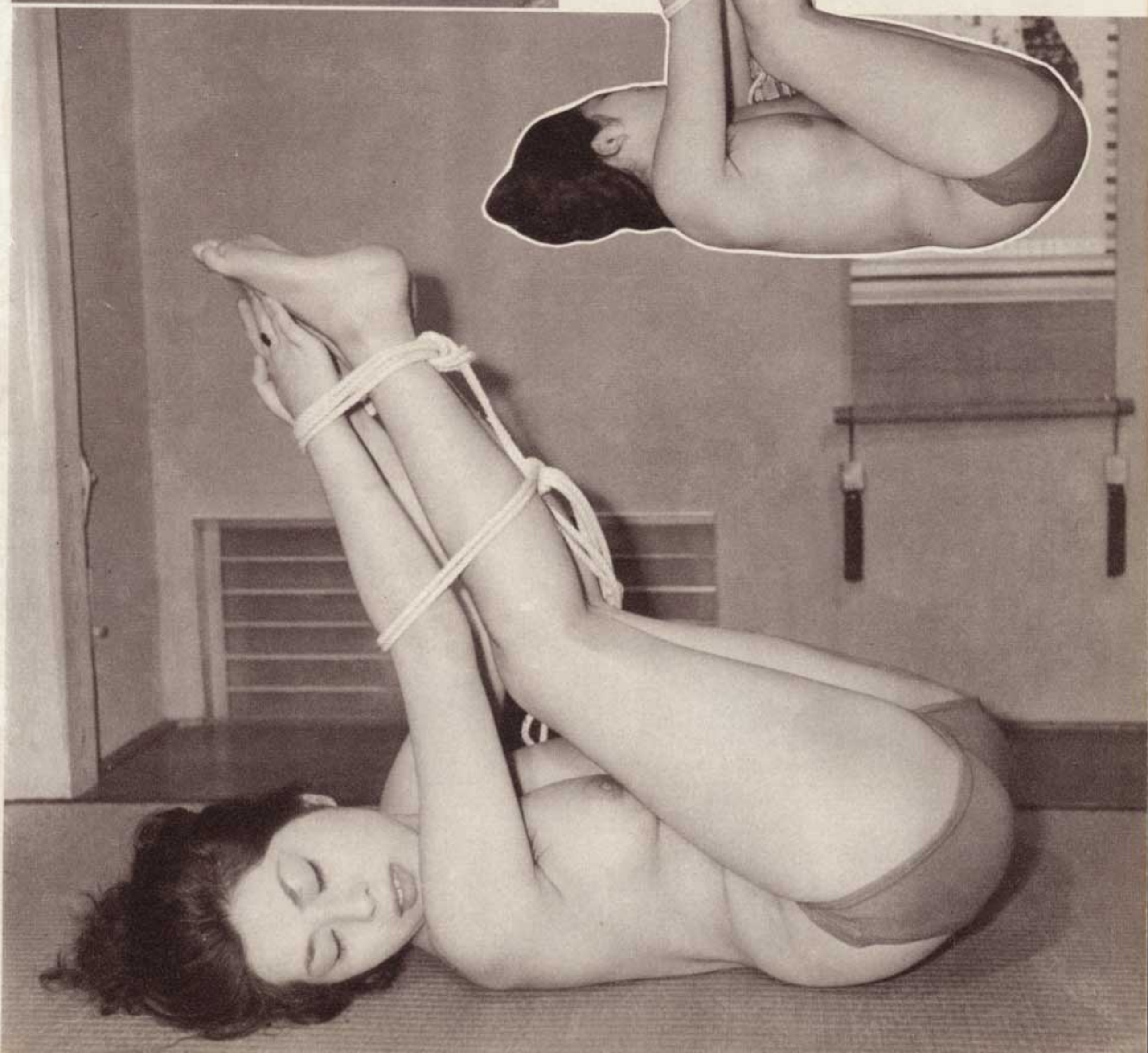
うしろ手の姿態

緊縛の窮屈な形で 女は トロリと 嗜虐を噛みしめる 二の腕がくびれ 首がしめられ そして両手は背中にグイとあげられて 見るも無残な痛められようだが それでも 女の生理は そのなかから ころよい感覚の 限りなく湧き出す 魔法の泉をもっている



二つ折り

姦夫姦婦は四つにたたんでたたっ切つてよいことになっていたが 今では そんなことは許されない それでも 女を二つ折りにして 手と足をしばり 転がして いじめることは 愛情の一つの方法だという人もある 女も そんな愛され方をされると 満足を得る という説さえ と なえられている





荒れ小屋の残虐

下着はアラメのようにひき裂かれ、荒廃した小屋の柱に後ろ手にくぐられた女。縄が乳房を噛み、ムチが白い肌をさいなむ時、残虐の空気がグッと濃度を増す。(江馬美久え)



お針子の受難

人気のない裁縫室。ボディを背負わされた若いお針子は、ブラウスをはだけて乳房をむき出しにされ、サルグツワをかまされている。とらわれの魚のように。(江馬美久え)



ウィンチづり 二つに折りたたまれた裸体をクサリでしばり、
ウィンチでつりあげる。大きなカマはふつつ
と煮えたぎり、白い裸体を溶かそうと、悪魔のような炎をあげる。(江馬美久え)



つるべ責め

洗い髪をツルべの綱に縛られた女。ツルべが下りていくと髪がひきつれるが、からだは杭にくられて、二つに裂かれる苦痛に、悲鳴が、夜の空気をつんざく。(江馬美久え)

風俗奇譚

幻妖異虐特集・8月号



男女性風俗の粒
より話題の探求

特集 レスビアン生態



現在のミティレーン島(ギリシャ領)を、昔はレスボス島といていた。情熱の作家サッフォーの生地である。サッフォーは、男に負けまいと常に男装し、しかも、才能の点でも「サロメ」のように男と同列の傑作を生んでいる。そして、レスボスの女たちは、男による快楽を得られないままに、同性のあいだで愛の行為に耽った。サッフォーの男装というレスボス女の同性耽溺といい、南国の太陽のもたらした情熱の所産なのだろうが、かくてレスビアン・ラブつまり同性愛の形態を生み出したのである。その生態を探ってみよう。

レスビアンの実体

大 達 欣 治

どんな形式の技法があるか

レスボスの愛とか、トリバディズムとかよばれるのは、女子同性愛でも、肉体的な交渉をもつものをいう。もちろん、男性と女性と

いう組み合わせでないのだから、その愛の技法も、違っているのである。では、どんな形式をとるのだろうか。
マシユカは、次のように記載している。

① オナニー

片一方が相手に行なったり、相互的な形式をとる場合もある。

ある若い女性は、夜ひるを問わず、性器とか直腸に指を挿入し、それが時として一時間にも及んだという例と、数人の女中が、七つになる女の子をつかまえて、手や舌でみだらな真似をしたことを、タルジューは報告している。

そして、女囚のあいだに見られるのは、おもに相互オナニーのものであるという。

② 肥大したクリトリスを利用するもの

十九世紀のころ、フランスのある一女性は、ふつうに、男性と接しながら、一方、その肥大したクリトリスによって、同性をも相手にしていたという。

③ 人工のメンブルム・ヴィリレを用いる場合

これについては、ギリシャの、いわゆるオスリボスが有名である。なかには、実物にまちがうほど精巧にできたものもあり、それを用いて、女性同士でありながら、男性間におけると同様な行為にふけるわけである。最後の瞬間に放出する仕掛けをもったものさえあるくらいである。

そのほか、ただ性器その他の情感帯に触れたり、愛撫したりするだけの場合もあり、墮陰といわれる方法も見られる。

だが、この場合、暴力が加えられると、肉体的な損傷——つまりキズができたり、赤くはれたり、あるいは処女膜が破れたりする——ことなどがあり、時によっては法医学の対象にさえなることもある。

どんな女が、どのくらい

レスボスの愛——つまり女の同性愛は、男のそれと比較すると、

はるかに少ない。だが、ギリシャの昔から、案外に広く行なわれていて、現在でも、一般に考えられているよりも、ずっと多いものである。

キツシュは、このような女性は、育ちのいい人のあいだに多いといっている。彼女らは、年ごろになっても結婚したがない。いや、あるいは結婚できないのかも知れない。彼女たちは、異性に少しも興味を持たないのである。

とにかく、彼女らの性欲の方向は、同性に向けられている。だから、同じ年ごろ、あるいはちょっと年下の女の子を連れて旅行したりすることを好む。

思春期を迎える前に、すでに、彼女らは、男の着物を着たがり、女向きの手仕事を嫌ったり、または、同じ仲間の性器を見たり、それに触れたりすることを喜ぶ傾向がある。

しかも彼女らは、大人になっても、とかく、男らしく見られたいと思って、好んで男向きの着物を着、髪を短く切り、タバコをふかし、男のような口調で話したりする。同性にあてた手紙なども、情熱に満ちたものを書いたりする。

こういった傾向は、生まれつきの素質をもったもの——たとえばヒステリーとか、テンカンとかを持病とするもののあいだに、多く見られる。

だが、若いときから、たくさんの男性と接してきた享楽主義の老婦人のなかには、もう男性に対して大した意味を感じないで、同性愛に陥るものもないではない。

そして、この女の同性愛は、どのくらいのあいだ続くかという点、数年に及ぶ人もある。しかし、たいていは線香花火のように消

え去るもので、消えたかと思うと、また、ほかの同性に向かって燃えるといったタイプのものが多い。

レスボスで妊娠した女

愛情が異性に向かない場合に、同性愛は見られるのであるが、彼女らは、男性との交渉になんの興味ももたないわけである。そればかりか、男性と接触するチャンスのないために、同性愛に陥る場合だってある。

だが彼女らは、肉体的に——生理的に、別に変ったことはない場合が多い。だから彼女たちも、ふつうの女性の関係を持っていると思っていにくいのである。

ただ彼女らは、女性らしく見えることを嫌い、なにもかも男性に見られたいと思うのである。

実例について、キッシュは、次のような事例を報告している。

ある貴婦人がいた。十六歳で結婚して六年間、夫婦生活をおくっているが、まだ子供ができない。

いたってノンキな性質で、タバコもよくすうし、よくしゃべり、よく遊び、よく酒を飲むので、男性に近いところがある。好んで男装をし、同性と遊ぶことに興味をもっていた。

月経はちゃんとあり、ただ軽い膣カタルが認められるだけで、別に肉体的な異常はない。口ヒゲがいくらかはえている以外は、女性らしい優しさを少しも失っていない。

となると、彼女の場合、肉体的な素因が、彼女を同性愛に追いやったとは思にくい。

これに対して、デューホーセットの報告は、レスボスの愛の結果、妊娠した女のことを伝えている。

ある女性がいて、彼女は結婚していた。だから立派に人妻である。その彼女が、人妻であると同時に、同性愛に陥っていた。そして、その相手を妊娠させたというのである。

彼女は、その相手と抱きあった。ところがたまたま、彼女の肉体には、夫との愛の行為の名残りとして、まだ精子が残っていた。それが相手に移り、相手は、そのために妊娠したというのである。

ほとんど信じられないような例だが、デューホーセットは、実際に彼女を診察したのだから、「事実小説よりも奇なり」を、地でいったような実例である。

とにかく、タキシールもいっているように、パリでは、人妻でありながら同性愛にふけるものが、かなり多いのである。しかも、相当有名な貴婦人たちのあいだに、かなりひろくこの現象が見られるという。

売春婦には同性愛者が多い

同性愛が、売春婦のあいだにひろがっていることは、多くの学者の認めているところである。パレント・デューハテレーは、かなり長いあいだ売春生活をおくったものが、二十五歳から三十歳のあいだに、よく同性愛に陥るといっている。また、モルは、ベルリンの売春婦の二五パーセントは同性愛者だと報告している。

同性愛は生まれつきかどうか、については、いろいろの説があり、ロンブローゾなどは、先天性のものがあるという立場をとって

いるが、もちろん、後天的な影響も無視しているわけではない。

だから、売春婦や、女子刑務所などにおける同性愛を、それによって理由づけているわけだ。

売春婦たちは、男を憎んでいる。それが、はからずも、遊郭や刑務所などで、集団生活をしいられる。しかも、そこで、お互いの裸体を見合っている。そんなところから、同性愛が導き出されるようである。

はじめは、ひどく嫌がっていても、一年半から二十カ月もたつと、同性愛の享樂のなかに身をゆだねるようになるものであるという。女子刑務所でも、同居生活から同性愛がকাশし出されるのは当然考えられるところであろう。

ときには、女性の監守までが、この渦のなかに巻きこまれることがあるということだ。彼女たちは、よく裸体で寝る。それも、二人、三人とかたまってベッドにはいることが多い。

だから、肉感的な売春婦が入所すると、これに拍車をかけることになるわけだ。

女子学校の寮にも、同じことが見られる。ことに謝肉祭では、ハメをはずした、こういったしきたりがある。

精神病院でさえ、同性愛の患者がはいると全部の患者が、まるで伝染病にでもかかったように、この「熱病」に身をさらすことがあるという。

売春婦のあいだには、パパとか、おじさんとか呼ばれているものがある。男性的な役割を演ずる側で、これに対して、ママとよばれるほうは受け身で、女の役割を演ずるわけである。ただし、この場合、男性側の役割を演ずる側は、性的な面で制約はないが、女性役

は、きまった相手——つまり一人のパパ以外には、性的なパートナーを求めてはいけないうことになっている。

また、売春婦には不感症が多く、この人たちのなかには、クリトリス・オナニーによって欲望を充足しているものが多い。

娼家に入出入りする貴婦人

最後に、幾人かの性科学者の報告から、レスビアンの例を、いくつか拾ってみよう。

ロンブローゾーによる例——三十五歳の人妻。ふつうの方法では性的な満足が得られず、マゾヒスチックな傾向があつて、同性のムチでひっぱたかれたい願望に燃えていた。

モラグリアによる報告——十八歳の処女であるが、変わった女性である。ふつうの性行為よりも、男性の尿の刺激的なおいをかぎながらオナニーを行なうのが好きであつた。それも度を越して人前で行なうので、たびたび官憲につかまつた。

カルリエールによる例——パリの娼家には、身分の高い婦人が、よく顔を出す。そこで、売春婦と同性愛を楽しむためにである。ところが売春婦は、自分たちの世界以外の女性には好感をもっていないから、こういう貴婦人からは、報酬としてかなり高い金を受けるといふ。

ロンブローゾーによる例——女の同性愛は、男のそれに比べて、数も少ないし、程度も軽いものが多い。それは、女性のほうが、男性よりも性的な欲望が弱いことと、同性愛の原因となりやすいテンカシなどの病気が、男性に比べて少ないせいであろう。

東西レスビアン of 愛の技法

— 女子同性愛者はどんな風に愛しあうか —

かびや・かずひこ

ある女子高校生の手紙

女学生のあいだには、昔から、
“S” “オメさん” “ご親友”

“お熱” などの名でよばれている同性愛がおこなわれていることは、周知の事実であるが、これは大半が、きわめてプラトニックなものであり、異性愛に移る一時的な代償恋愛にすぎないことも、多くの人の肯定していることである。

ところが、その場合、男性的な役割を演じる———という語弊があるが、他の一方よりは、男性的な容貌をもち、男性的なスタイルをし、男性的な能動的な態度をとる者のほうには、時として真正の女性同性愛者がある。

私のもとにたびたび手紙を寄せ、また訪ねても来る、R子という作家志望の十八歳の少女がいるが、その少女が、そうした一人だ。

最初の手紙で彼女は、こう言っている。

「どうしても男の人に可愛がられるということは身震いするほど厭です。だから、強い男の人に貞淑につかえている女の人を、映画や文学や、じかにこの目でみると、たまらないいきどおりを感じます。自然と、高慢な男や自信たっぷりな男に嫌悪を感じます。毛頭結婚する気はありません。男のわがままにつきあえないと思うからです。

私はやはり男性型だと思います。私はなんだか、今の女の人たちは、みんな男性に媚びているようでいやです。私の希望をいいますと、ズボンのよく似合う人になりたい。よい体格、筋肉質の男性的な体格になりたいと思っています。そしてそのために、毎日腕たてふせをやって、それからよく野球部などでやる、両手でバネをのばす道具がありますね、あれをやっています。このごろでは、肩と腕に筋肉がついて、ちょっとすごくなりました」

また、その同性愛については、

「ふりかえって、いままでは、いわゆる女学生的な友情でした。とても美しい。結果はいつも美しい友情で終わっているのです。私が途中でどんなに現実的な体験を望んでいても、それは、試したことはないのですから——」。

好きな人と映画館に行って、手を握るくらいが、具体化された経験です。だけど、それだけでも、私の心臓はつぶれるくらいどきどきしました。私の最も大きな経験としては、高校二年のときの修学旅行でのさいごの夜のことでした。

その夜、宿で就床のとき、私とHさん（筆者注——R子さんの好きな人の「ご親友」）は、おたがいに寝る場所を、視線のうちに戦わしました。とうとう私はHさんに負けました。それは、Hさんが



Oさん（筆者注——R子の好きな人）の横に陣どったのです。でもOさんは、Hさんを窓側にやり、自分がその横、そして次が私でした。だから、Oさんをかこんで二人がねたわけです。

ところが、その夜は、最後でうるさかったので、身体の弱いOさんは、看護婦さんの部屋にいていました。私は、期待をうらぎられたような気持ちでした。夜明け、部屋のなか白々と明るくなりはじめたころ、私はふいに目がさめました。そのとき、Oさんが入って来たのです。私の両側はあいていましたが、Oさんは窓側のほうでない空いているふとんに入ってしまった。だから、Oさん、私、空いて、次にHさんとなるのです。

私は、次第に動気が激しくなるのを覚えました。Oさんは、私がおきているとも知らずに、私の左肩に頭を寄せました。彼女の呼吸が私の耳をくすぐりました。私はがまんできなくなりました。私は、彼女の手をしっかりと握りました。意外にも、彼女はそれをまぢかまえていたごとく、強く握りかえました。私はその手に頬をおしつけました。彼女が私の顔をやさしくつつむようにして、愛撫するのをおぼえました。ですが、私たちは、それ以外のなにもしませんでした」

云々と述べている。

男型の酒場マダムの場合

以上のように、女学生間の同性愛の交歓は、手を握りあうとか、せいぜい接吻、抱擁の程度らしいが、これが、同じとしごろの女学生同士でなく、一方が成人の女性の場合とか、あるいは、成人の女

性同士の同性愛となると、プラトニックな愛情だけではすまなくなり、往々にして、肉体的な交流にまで進展することがある。

私が、かつて葛飾区金町の非行少女教護施設取材のために訪れたとき、その収容少女のなかに、次のような例があった。

それは、窃盗容疑で警察に捕えられたF子という十七歳の「夜の女」であるが、彼女がまだ中学に入ってまもなくの十四歳のとき、受持ちの女教師から愛され、彼女のほうもまたその女教師に親愛を覚えて、レスビアンの仲となった。

二人の関係は、初めの頃は口と口との接吻、抱きしめくらいにとどまっていたが、ある日、女教師の下宿で、F子はその女教師から、ある強烈な愛撫行為を教えられてしまった。

F子にとって、生まれてはじめてのその行為のエクスタシーは忘れがたく、彼女はその後も、女教師から求められるままに、性行為をつづけていたが、その女教師は異性関係もあったものとみえ、性病をもっている、F子はいよいよ女教師から梅毒を感染させられてしまったのである。

F子のその後のことについては、主題との関係はないから省くが、女性同士の性行為でも、性病が感染されるということを知っていただきたい。

また、私の知っている酒場のマダムに、自他ともに許しているレスビアンがいる。彼女の同性愛の体験を、私はかなりつぶさに聞くことを得たが、それを要約すると、次のとおりである。

彼女は、小学生のころから、男の児には関心はなく、同じとしごろの女の児——好きなタイプの女の児に淡い恋心のようなものを覚えていた。

父親はすこぶる道楽者で、女遊びはする、バクチは打つ、酒は飲むで、手がつけれなかった。しかも乱暴者で、つねに母親を虐待していた。そんなことから、彼女は父親を憎むようになり、ひいては、男というものにますます魅力を感じなくなってしまう。

その父親もやがて死亡し、彼女は十七歳のとき、母親の世話で、いとこに当たる男と結婚した。夫は温和な性質で、酒は飲まず、女遊びはしない。つまり、父親とは逆のタイプの男だった。

ところが、男のような性格の彼女には、それがまた、くいたりない。いかにしても愛情がもてない。二人の子を生んだが、そんなわけで、数年ほどの後に離婚してしまった。

彼女が同性の愛人をもとめはじめたのは、それからである。あるときは、郷里の信州へ帰ったとき知った芸者に熱をあげ、あるときは自分の店の女の一人を愛して、メカケのように近くへ囲った。そのほか幾人かの愛人を得たが、そのいずれも肉体交渉を結んだ。

頭髪を短く刈り上げ、いつもズボンを着用し、男装に近い格好をしている彼女は、同性愛においても、もちろん男型で、好きなタイプの同性は、体つきのなよなよした、瘦せ形の年若い女である。

今年三十九歳、見るからにエネルギーな彼女であれば、その愛撫行為がいかに濃度であっても、無理はないところだろう。

レスビアンの恋ぶみ

相手と肉体的な喜びを結びあったレスビアンの恋文を一、二紹介してみよう。

まず初めに、ある裕福な中年の独身婦人から、その被保護者であ

り、最愛のペットである二十三歳の娘に書き送った、たくさんの手紙のなかの一つ――

「じっとしていても所在がないから、お前に手紙を書きます。が、別になんというつもりもないのです。ああ、どんなに私はお前を愛していることでしょう。メッサリーナとナナ（後段に説明）だけが、お前の二人きりの友達で、何もかもみんな私のもの。絶対的に私のものであってくれればいい……。

が、それはむろん、私たちの失われた幻にたいしていうことで、いま残っているものは、一切台なしです。どうしてお前は、私がきれいな愛嬌のある女だったことを、ちっとものみこんでくれようとしなかったのでしょうか。そしてまた、私の最大の手管は、私の崇高な単純さなのであるのを……。

（中略）



女子同性愛ニもっと愛してニF・シモン筆

お前はほんとうにならず者ですけれども、私はお前が可愛い。私の書いている字も書いている字も、出てくる考えも出てくる考えも、みんなこの愛という言葉で占領してしまう。きっと私は、お前を殺してしまうかもしれない。当分、私はお前を愛の殉教者としてしまいかもしれない。憤怒の発作にかられて、きっと、私はお前への遺産を目茶苦茶に破りすてちゃうでしょう。それでも私は、お前を愛しているの」

殺す殺すとおだやかならぬ言葉を用いているが、じっさいに、この中年婦人は、のちに、この娘の命を断とうとした事件を起こしたのであった。この二人の女がとりかわした恋文のなかで、彼女らは、自分たちでつくりだした一種の陰語を用いており、この文中にある「メッサリーナとナナ」もその一つで、それは二本の足をさした言葉である。

また次は、**圜圖**の身になっている、ある「町の女」の、獄中からの手紙で、相手の女はやはり街娼である。

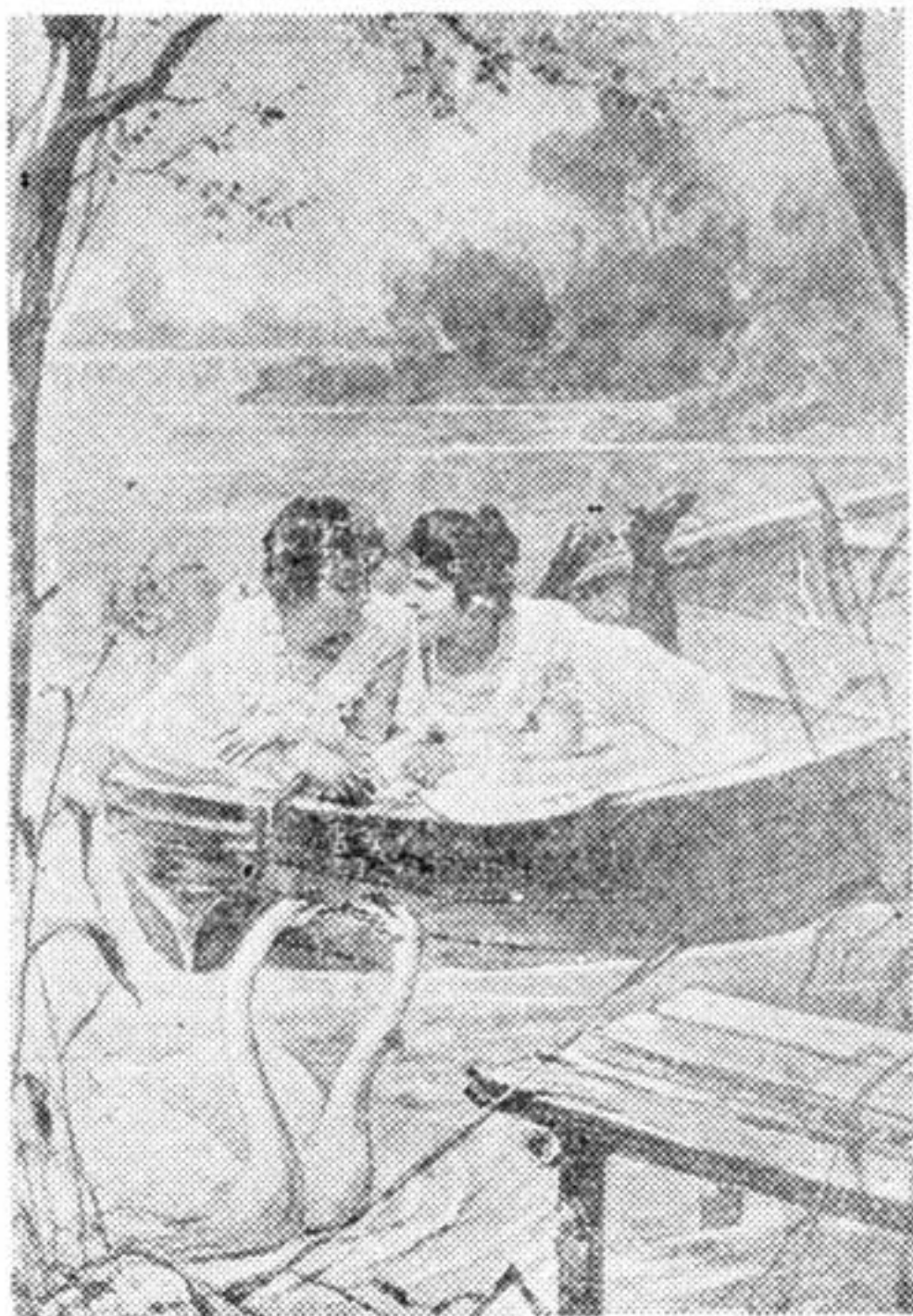
「もうあんたに会うことができないとは、なんて私は不仕合わせなんでしょう。私の可愛い可愛いクミちゃん、あんたがひとりぼっちになって、生きていくために、私の大嫌いな男たちをさがしとめて、いやな取り引きをしに出かけなけりゃならないってことを考えると、私は血を吐くようなつらい思いをしていることよ。いつもいつも、私は、たえまなくあんたのことを思いつづけているの。そして夜になると、夢を見るんだわ。……私は、あんたの胸にだかれ、私は、あんたを私の胸にしめつける。私の唇は、あんたの唇に接合するそして私の手は渴れることのない快樂の泉をさぐりあてる。

……

（中略）

昨日、こんなことも考えたのよ。——当分、あんたは退屈と孤独にたえきれなくなっちゃって、だれかほかの相手をみつけたんではないかってね。いいえ、そりゃ間違いだわ。そんなことのあるはずがないんですもの。そんなこと考えるだけでも気が狂いそうよ。頭がくらくらとして、目の前が暗くなってくる。ちょいと用心なさいよ。もしも私が、あんたをほかの人の抱擁のなかにみつけたら、そりゃ怖いんだから。ごめんなさい。だけど、こうしたことを考えると、頭がポーンとなるほど苦痛なの。でも、さいわいに、よく考えなおして、私は平静になるんですよ。あんたの、私にたいする愛は、とても大きいんだものね。とても、私を裏切るなんて考えだけでも持ちっこないんだわ」

手紙は二つとも外国の例だが、いずれも、その愛人を思う情の



切々たる、異性愛にまさるとも劣るものがないことに、読者はうなずかれるであろう。

愛技のいろいろ

さて、レスビアンにおける肉体的な愛撫行為とは、どのようなものであろうか。

私は、巷間ひそかに行なわれている見世物の「シロシロ」というのは、一見したことがあるが、それ以外のじっさいの行為は、目のあたりにしたことがない。

また、以上挙げた例のなかの、十八歳の高校生R子も、三十九歳の酒場のマダムも、その具体的なことについては、語ってくれなかった。

だが、私は、手もとの、かなり確実な資料によって、それを知ることができる。

その第一は、若い女性にしてはめずらしく、みずからの肉体的欲情を大胆率直に、いささか暴露的と思われるほどに歌った、故湯河真沙子の歌集『秘帖』である。そのなかの同性愛を詠ったものを二、三抜きがきすると――

よりそひて抱けばふるる乳なでて赤らむ顔をなつかしく見る
いくたびいだき口づけ乳ふれてつひにかしこにふれにけるかな
その乙女十七となるその宵の肌と柔毛のさはりよきかな

いずれも、そのものズバリにはっきりと歌い放っているので、説

明の要はあるまい。

次に、学問的な資料では、性科学研究所を主宰した故福岡武男氏の調査で、同氏がある工場的女子従業員を対象として、その性行動を調べたとき、次のような同性愛の例があった。

その一は、十六歳の女子工員で、レスビアンの相手は、寄宿舎で同室の同年の少女である。

彼女は、相手をすこしのまもはなしたくない気もちでいっぱいだ。なによりの楽しみは、二人で寝ること、だきあって、たがいに深い呼吸をしあうことである。

二人は接吻をする。そしてたがいに、決して結婚しないことを誓いあう。

そしてさいごには、たがいの手で相手の下半身にたわむれて、その歡びに耽ける。そのさい、なるべく同時にピークに達するように努力する、というのだ。

その二は、十七歳の女工員で、相手は八歳年長の室長である。

彼女はさいしょ、あくまで受け身だったが、同室ではあるし、求愛の相手が室長なので、ことわることもならず、いつか同性愛関係となってしまうた。

一年ほど前から、抱擁や接吻はしていたが、さいきんは、相手が彼女の下半身にまで唇をあてるようになった。相手はまた、ときどき、針の先を丸くつぶして、それで自分のからだを刺激してくれと彼女に頼む。

彼女は用心しながら、言われるとおりにするが、そのさい、相手のとりみだした叫び声に怖くなることがある、というのである。キンゼー資料なると、さらに詳しくなる。それによると、女子同

性愛の肉体的接触は、単純な口唇による接吻と身体の接触を出ない場合が多く、

① シンプル・キッスと手による乳房と下半身への刺激（九五～九八％）

② 特殊な、口による乳房への刺激（八五％）

③ 口による下半身への刺激（七八％）

④ 深い接吻（七七％）

⑤ たがいに刺激しあうように工夫された下半身の位置（六五％）などの順となっている。

そして、男性のものの代用となるものを用いた事例は、ごくまれだということである。

また、ドクトル・アルベールは、レスビアンの肉体的行為を、サッフィズムとトリバディーの二つに分けている。

サッフィズムとは、相手の肉体にたいするクンニリングス（口愛）をいい、これは古代ギリシャの女詩人で、同性愛の実行者であり、賛美者としても有名なサッフォの名に因んで名づけられたものである。

女性の同性愛をレスビアン・ラブあるいはレスボスと呼ぶのは、同じくサッフォの郷里レスボス島の名から起こったものであることも、ついでながら付記しておこう。

アルベールは、このサッフィズムは、それを行なう女性たちは、その行為に耽溺させやすいと言い、熱烈なレスビアン関係におちいっている女性二人が、毎夜、サッフィズムとオナニーとを六、七回も反覆していた例を挙げている。

また、トリバディーは、日本で昔がらトイチ・ハイチと呼ばれて

いる女性同士の愛撫技法で、いわば相互的なオナニーのようなものである。

風俗研究家の中野榮三氏からきいたところによると、ト一ハ一というのは、一人がうしろ手に手のひらを合わせたト形となって男の役をし、他の一人がハ形となって女役を演じるところから起こった名だともいうことだ。

なおアルペールは、トリバード（トリバディーの習熟者）とサッフイスト（サッフイズム習熟者）とは、性格その他に相違があると

いって、その点を次のように述べている。
トリバディーの習熟者は、だいたい男性的な外見と態度と熱情をもち、また幼少のころから、女性にだけ愛を感じるもので、男性にはすこぶる憎悪感をもっており、いちように結婚をけいべつしている。

ところが、サッフイストのほうは、男性との恋愛の失敗から、レスビアンレズビアンの友だちの風習におちたものとか、あるいは、墮落した同性の友だちのために誘惑された結果、そうなったとかいうものである。

だから、彼女らは、すこしも男性化された性格をもっていず、また別に男性に反感をいだいてもいない。

そのほか、両者の相違点をアルペールは挙げているが、これは省略しておく。

次いで、最近のアメリカでは、レスビアンレズビアンの様相もだいぶ変わって来て、十代の少女のそれでも、相当の性的なテクニクを用いていることが、学者の研究や記録で明らかにされている。

そのうち、ロウ・ティーンロー・ティーンの少女のあいだで、いちばんふつうに

おこなわれているレスビアン・テクニクは、相互オナニーであるが、ハイ・ティーンハイ・ティーンの少女となると、擬態的な男女関係の行為をする。

かの国の法律が、女性の同性愛を、男性の同性愛ほどに重くみなしたのは、女性は、男性のように他人のからだのなかにはいることが解剖学的に不可能であり、だから女性の関係は、男性間で起こるような攻撃性を欠くからだ、と、ある学者は言っている。

これら十代の少女が、同性愛におちいる因子いんしとしては、

- ① 妊娠の心配なしに性的解放を得る利益がある。
- ② ペニス・ナイド（男根羨望）——これは「男性の拒否」でもある。
- ③ 父親の影響が消極的である家庭の背景。
- ④ 恋人としては、少年よりも、もっと思いやりのある年上の経験のある少女の誘惑のほうほうが魅力的である。

などが、おもなものとして挙げられている。

異例のテクニク

おわりに、いささか変わった愛撫行為をおこなったレスビアンレズビアンの例を挙げてみよう。

内科医学の権威であった、故長谷川基博士から、私は、こんな話をきいたことがある。

ある良家の娘で、十五歳の中学生が、その家の二十歳の女中と、いつのまにか同性愛の仲となって、初めのうちは学校の送り迎えぐらいの逢う瀬であったが、やがて娘の部屋で歡を交わすようになった。

た。

ところが、そのころから、娘の身体がしだいに衰弱して来たのである。

二人のレスビアン関係を知らない家人には、娘の衰弱の原因がどうしてもわからないのだが、しきりに娘につきまとう女中の態度を不審に感じて、むりにひきはなして、女中を、その実家へ送りかえた。

すると、娘の原因不明の身体の衰弱がだんだん回復するようになった、というのである。

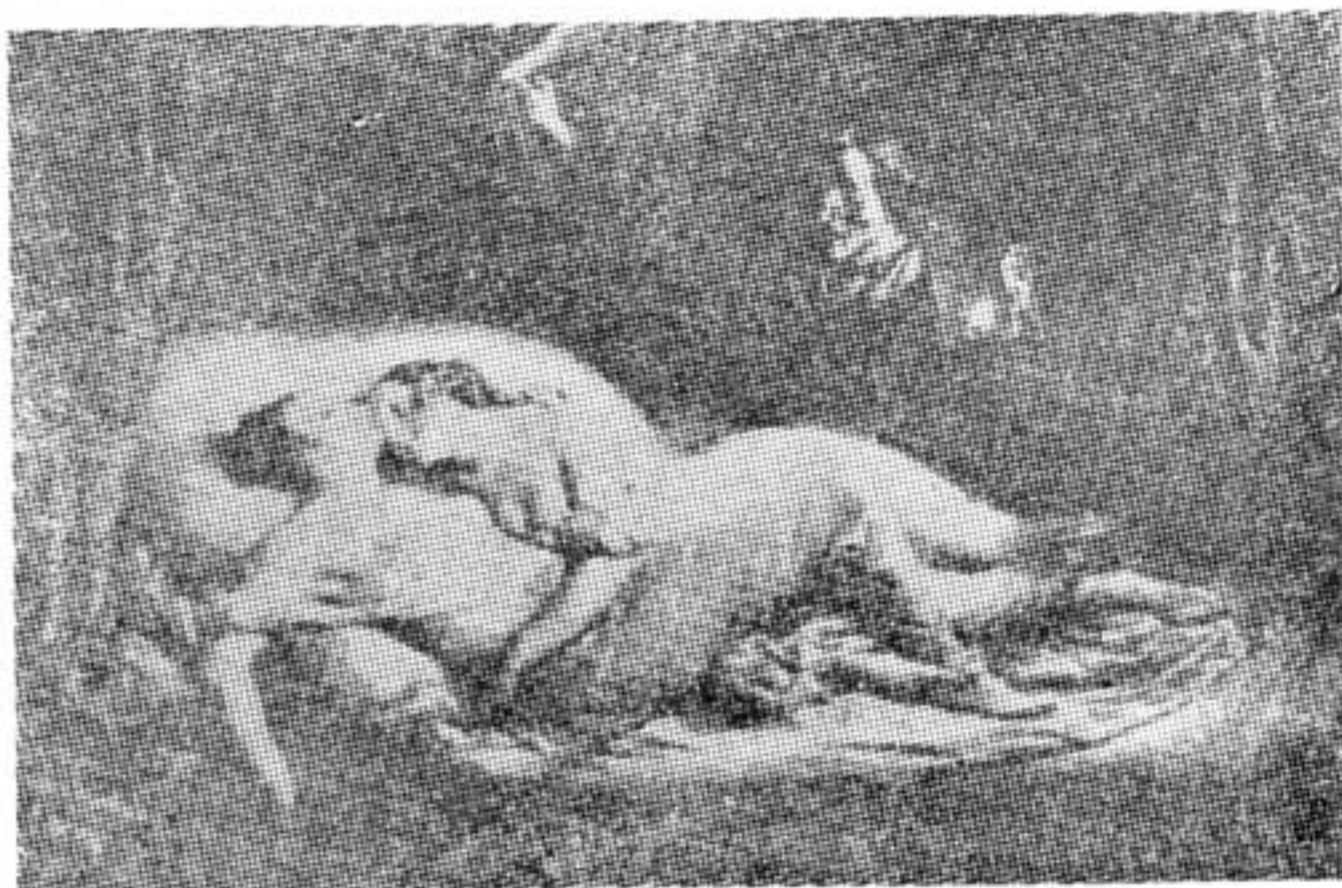
長谷川博士は、家人から頼まれて、この娘の病気を診察したのだが、あとで、娘が博士に語ったところによると、暇をだした女中が娘にたいして、特殊な肉体的行為をおこなっていたということであった。それは、娘のアヌスにたいする、一方的な激しい口愛なのである。

これが、成人の女性同士のあいだに行なわれたものなら、さほどでもなかったろうが、一方がまだ肉体の成熟していない少女のことだから、その強烈な行為がきめんに、少女の身体に衰弱を来たさせたのである。

以上の女中の話とやや似た例が、クラフト・エーピングの報告のなかにも見える。

それは、単なる男型というよりも、心身ともにまったく男性化しているSという女性で、恋仲の娘と結婚するために、その家人に男と偽って、同棲生活をするようになったが、ついに女性であることが家人に発見され、訴えられたというのである。

Sは幼少のころから、父親の希望で、男の児の服装をし、男の児



ニご親友ニデレリア筆

の遊戯を教えられるなど、まったく男として育てられた。

長ずるにおよんで、彼女はますます男性化し、愛情の対象も、男を極端に嫌って、女性にだけひどく心をひかれた。

大学卒業のころから、放埒な生活をはじめめるようになって、男の出入りするカフェーへ通いつめたり、娼婦屋へ入りびたりしては、酒に耽けり、女に戯れた。

かすかすの女性遍歴のうちに、彼女は、十歳も年上のある女と恋におちて、めずらしく三年間も同棲生活を送ったが、結局、これも別れてしまった。

その後、Sは新聞記者となったが、そのころMという娘と知り合い、熱烈な恋愛のうちに、ついにMと結婚した。Mの家族には、伯爵と自称して、その家庭にはいったのだ。

聡明そうな、しっかりした顔立ち、洗練された男らしい身なり、淡泊な、そして自由なふるまい——そうしたSの外見にMの家族の

夫婦和合の秘器

ワコーリング

(新案特許出願中)

本器を使用すればアナタの
悩み即日解消!



性に悩む男性に朗報!

○勃起不全に対して

本器使用数分内に完全隆起し且つ
射精後も萎縮しません

○短小の方に対して

本ワコーリング使用数分内に局所
は驚く程膨大します

○早漏の方に対して

本ワコーリングを(併用)により
絶対に30分以上持続し効果絶大!

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響を呼ぶ新製品! 本器は(取付けたまま使用)するので効くのは当然! 而も長年月常用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。
アナタの性能を即時10倍にする新製品ワコーリングをすぐ御使用下さい。
(定価) 進呈▼送料共二組一、三五〇円 (個人名で急送します)

名産 肥後ずゐき 手芸品

☆好評新発売!
特製品七種組一函...850円で急送!

短小の解決に!

真空ラージ療器

●男性器發育不全、短小のため失望せる方は、最新式真空治療法「ラージ療器」の出現により局所の肥大伸長を図り、大なる喜びを得られよう!
●ラージ療器並に併用局所塗布クリーム(三百円)付送料共
定価一組一、六五〇円

東京都杉並区神戸町128
株式会社 療養の友社
電話(03)4679 振替東京118443
(高田馬場より西武線井荻駅下車徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分 柿木町下車)

者は、だれもSを男性と信じて疑わなかった。

Sは、Mの家庭にはいつてからも、陰囊を模した小さな布の袋をズボンのうちにつるすなど、いろいろの細工をして、男性に見せるよう心を砕いた。

あるとき、Mの父親は、ファルスと似てファルスでないものを、ふとSの身体に見かけて、不審に思った。

また、小間使いの女は、Sの下着に、生理の血の痕がついているのをみつけたことがあった。

家族の者は、ようやくSに疑いの目をもつようになった。

そして、ある日、ついに、家族の一人が、Sの入浴している姿を盗み見てしまった。Sももはや、男性だといいはることはできなかった。

Sを熱愛しているMは、彼女と別れることをしきりに拒んだが、Mの父親は、Sを詐欺罪で告訴してしまったのである。

幾多の女性を魅縛したというSの愛撫行為は、相手の女の肉体を口によってせめるものであった。これは、フェラトールとよばれる一種のアブチック技巧で、身体のある部分に舌をあてるのである。

そしてSの場合、それは自分自身の肉体の上にはすこしも求めることなく、相手のからだをせめればよいのだ。それで彼女は、じゅうぶん満足なのである。

その点が前記の女中の場合とよく似ている。
このような愛の心理は、レスビアンの中なかでも、とくに男型の女

性にはすくなくないらしく、かつて池田みち子も『第三の性』という小説のなかで、そうした女性を描いている。その一節を引用してみよう。

「よし子を自分の寢床へ引きずりこんだ光枝は、片手を枕にして、残った片手でよし子の腰を抱いた。(中略)

されるままに上半身を抱かれ、接吻されていると、よし子は、羞恥心が消えて、少しづつ興奮をおぼえた。人間の肉体は機械的なもので、金だけを目的に男の言いなりになったときでも、ベルを押せば電流が通じると同じように、ひとつの刺激がひとつの快感を呼ぶものである。肉体の機械的な働きが、光枝の愛撫のなかで相手が異性であるのと同じ興奮をおぼえるらしい。光枝は、よし子の興奮を感じると、これ以上はどうしようもない戸迷いを感じた。よし子へむけた日ごろの執念は、恋愛感情と同じものではあるが、光枝の場合、肉体の欲望とは全く別であった、欲望は自分自身で解決するものであり、自分では解決出来ない精神が、よし子を求めたのだ。がいま、よし子の呼吸の乱れを、自分の頭に感じると、ふと、よし子の女性を完全に自分のものに出来る可能性を感じた。よし子が欲しがるものを与えることで自己満足をおぼえるか、あるいは、愛情のなかには元来、奉仕の精神があるのだろうか。光枝は、よし子に満足を与えずにはいられない気分になった行為を、よし子へ行なわずにはいられないのだ。

その翌日から、二人は夫婦のように暮らし始めた。よし子は、満足を与えられたことで、光枝を完全に異性としか感じなくなった。が、光枝は、自分自身の欲望は自分で解決する長い習慣をそのままつづけていた。そのことでよし子に奉仕されたいとは思わないのである。

ここに現われる光枝なる女性は、四十二歳の独身の高校教師である。かつて二度ほど結婚したが、いずれも破婚となり、いまでは男性に魅力を感じない女になっている。女学生のころからおぼえた自慰の習慣を、いまでもつづけているらしい。十七貫の巨大な軀、性格も男のように大まかである。

光枝のような男性化している女性は、その性欲も、男性のように、攻撃的征服的なのだ。相手の肉体を攻撃し征服することで、じゅうぶんに性的快感を覚えていく。与える快感ともいえよう。

また、よし子は、やはり独身の三十五歳の会社事務員、男好きのする容顔の女だ。一年ほど前から光枝の家に間借りしている。この夜、彼女が初めて光枝の愛撫をうけたとき、抵抗しなかったのは、性的な興奮を覚えたからだけでなく、光枝に愛されたいため、愛されてこの家にいつまでもいたいための打算もかくされていたのである。

二人ともに、いままで現われなかった同性愛的のものが、ふとしたチャンスで初めて開眼したというところが、興味深い。私は、これを、単なるフィクションとは思えない。

絵本 誹風末摘花

「蛤は初手赤貝は夜中なり」にはじまる江戸風俗文学の粋「誹風末摘花」全巻に、一〇〇余の雅味あふれるさし絵を添え、さらに巻末に、豊富・正確な句注をつけた。内容、造本ともに豪華な決定版!

文献資料刊行会・編
安 東 延 由・画
定価二五〇円(送共)

東京都千代田区神保町一・星文館へ

レスビエンヌ

ピエル・ロビズ

これは、クロナリオンという若い娘と、ルイナという琴ひきの女との対話である。古代のレスボスの女たちが、張り形を用いる風習のあったことを伝える貴重な古典として、ギリシャ語で書かれたものである。

クロナリオン あんた、お金持ちのレスボス女のムジラを、男の恋人のようにしているんだってね。女同士で、どうして、そんなことができるの？ あたしにはわからないわ。

ルイナ ……………。

クロナリオン なぜ、そんなに真っ赤になるの？ 本当なんでしょ、聞かしてちょうだいな。

ルイナ 本当なのよ、クロナリオン。で

も、あたし、恥ずかしいわ、とっても変わってるんですもの。

クロナリオン でも、あんた、どうして、そんなことをするの？ あの女と、なにをしようとしたの？ いっしょに寝たとき、どんなことをしたの？

ルイナ ……………。

クロナリオン あたしの言うこと、わかる？

ルイナ ……………。

クロナリオン あら、あんたは、あたしを愛していないのね。でなきゃ、あたしに隠すはずないわ。

ルイナ あたしは、誰よりも、あなたを愛してるわ……本当いうと、あの女、とっても恐ろしい男のような……。

クロナリオン レスボスの、あの、男好き

の女たちが、男のように、自分たち同士で楽しむ同性愛の一種とでも言わなきゃ、あんたの話はわからないわ。

ルイナ まあ、そんなものよ。

クロナリオン（熱中して） おおルイナ、みんな話してよ。あの女は、最初に、どんなことをしたの？ あんたも、承知したのね。それから、どうしたの？

ルイナ あのひとたち——あの女と、それからお金持ちのコリント女のデモナッサと、二人で夕ご飯を食べてるところへ、あたし、呼ばれたの。あのひとたちは、あたしの琴を聞きながら、お酒をずいぶん飲んだわ。そして寝るだんになると、「さあ、ルイナ。もうやすむ時間よ。おまえ、あたしたちのなかへはいっておやすみよ」とムジラが言ったの。

クロナリオン それで、あんた、寝たの？

それから、どんなことが起こったの？

ルイナ まず、男がするように、あたしに

接吻したのよ。唇だけですむのじゃなく

て、口を少しあけてするのよ。それか

ら、あたしを腕のあいだへ、グッと抱き

しめるのよ。デモナッサも、あたしに接

吻したり、噛んだりもしたわ。あたし、

どうされたのか、よく覚えてないわ。す

ると、もうすっかり熱くなってるムジラ

が、ふいに、本ものそっくりにできてい

るつけ髪を持ち上げて、男の競技者のよ

うによく剃りこんである肌まで見せたの

で、あたしはびっくりしちゃったわ。で

も、あの女は、あたしに、

「おお、ルイナ。おまえは、あたしのよ

うに美しい若い男を見たことある？」っ

て聞くから、あたしは言っちゃったわ。

「でも、ここには、若い男なんか、いな

いじゃないの」

「あたしを女だと思っちゃダメよ。あた

しはムジロスといって、もう長いこと、

このデモナッサを妻にしてるんだよ」

「そんなら、ムジロス。あなたは、紫の

衣に隠れて娘たちのところにいるアシル

ースのように、あたしたちには見えない

男なのね。それじゃ、あなた、男のシン

ボルを持ってるの。そして、男と同じよ

うにデモナッサを愛してやるの？」

あたしは笑い出して、言っちゃったの。

「おお、ルイナ。そんなものは、たいし

て必要なものじゃないわ。おまえも、す

ぐに、あたしが、特別な、すばらしい、

そして気持ちのいい方法でうまくやるの

が、わかるよ」

「それじゃ、あなたは、おとこ女じゃな

いの、そう、男のモノと女のモノとをも

っている……」

「いえ、あたしは本当の男よ」

「イスメノドーラの笛吹き女ボーイオチェ

ンヌが言ってたわ、男になったテーペの

女はたいへん偉い予言者で、ティレンア

スって呼ぶんだそうよ。それと同じこと

が、あなたにも起こったんじゃないか

て？」

「いいえ、ルイナ。あたしは、おまえさ

んたちと同じように、女としてこの世に

生まれてはきたが、あたしは、男として

の趣味や希望、そのほか全部のものを持

ってるのよ」

「そんなら、じゅうぶんだわ」

「あたしを信じられないのなら、あたし

のするとおりになってごらん。そうすり

ゃ、あたしが、男なんか羨む必要のない

ことがわかるから。あたしには、男のお

道具のようなものを持ってるんだよ。さ

ああたしの言うままになってごらん。き

っとおまえは気持ちよくなるから」

そういうもんだから、あたしはあの女

の言うなりになったわ。だって、あの女

は、一生懸命に頼むのよ。それに、すて

きな首飾りや、とても立派なリンネルの

着物までくれたんだもの。あたしは、男

を抱くように、あの女を両腕のなかへ抱

きこんだの。すると、あの女は、あたし

に接吻して、夢中になって、あたしを自

分の思うとおりにしたわ。そして、とう

とう、あたしを、すっかり有頂天にさせ

てしまったわ。

クロナリオン それじゃ、あの女は、どん

なふうにしたの？ ね、ルイナ。どんな

やり方だったの？ みんな聞かして！

ルイナ ダメよ。そんなに細かいところま

で言えないわ。神様に誓って、あたし、

話せないわ。

レスボスへの誘い

川 島 勇 人

サフィズム——これは女子同性愛の通称として名づけられているが、実はギリシャの女流詩人サッフォーから由来し、彼女は女子同性愛の実践者であった。

このレスビアンヌ・サッフォーの生まれたレスボス島は、エーゲ海に面した風光明媚な島で、女性の同性愛が盛んであった。

女性の同性愛をテーマにした小説は、現在でも多い。『プリジット荘物語』『ニューヨークの鞭打美人』『女教師マギイ』『学園ヴィナス』は古くからの名作として知られているが、なんといっても最高の名作はミュッセの『ガミアニ』であろう。

ボードレールの『悪の華』はなるほど有名ではあるが、彼はその作品の完成する前は、なんと、『レ・レスビアンヌ』という詩集を計画していたのである。

そういえば『悪の華』には、女性の同性愛をうたった詩が多い。そのなかでも、

レスボスよ、暑きものうき夜の国よ
深き眼の乙女らは恋に燃ゆその身を
鏡に映し、あだ花の空しき快樂！
熱れたる果実を撫づ妙齡の女体

レスボスよ、暑きものうき夜の国よ

は、すばらしいものだ。

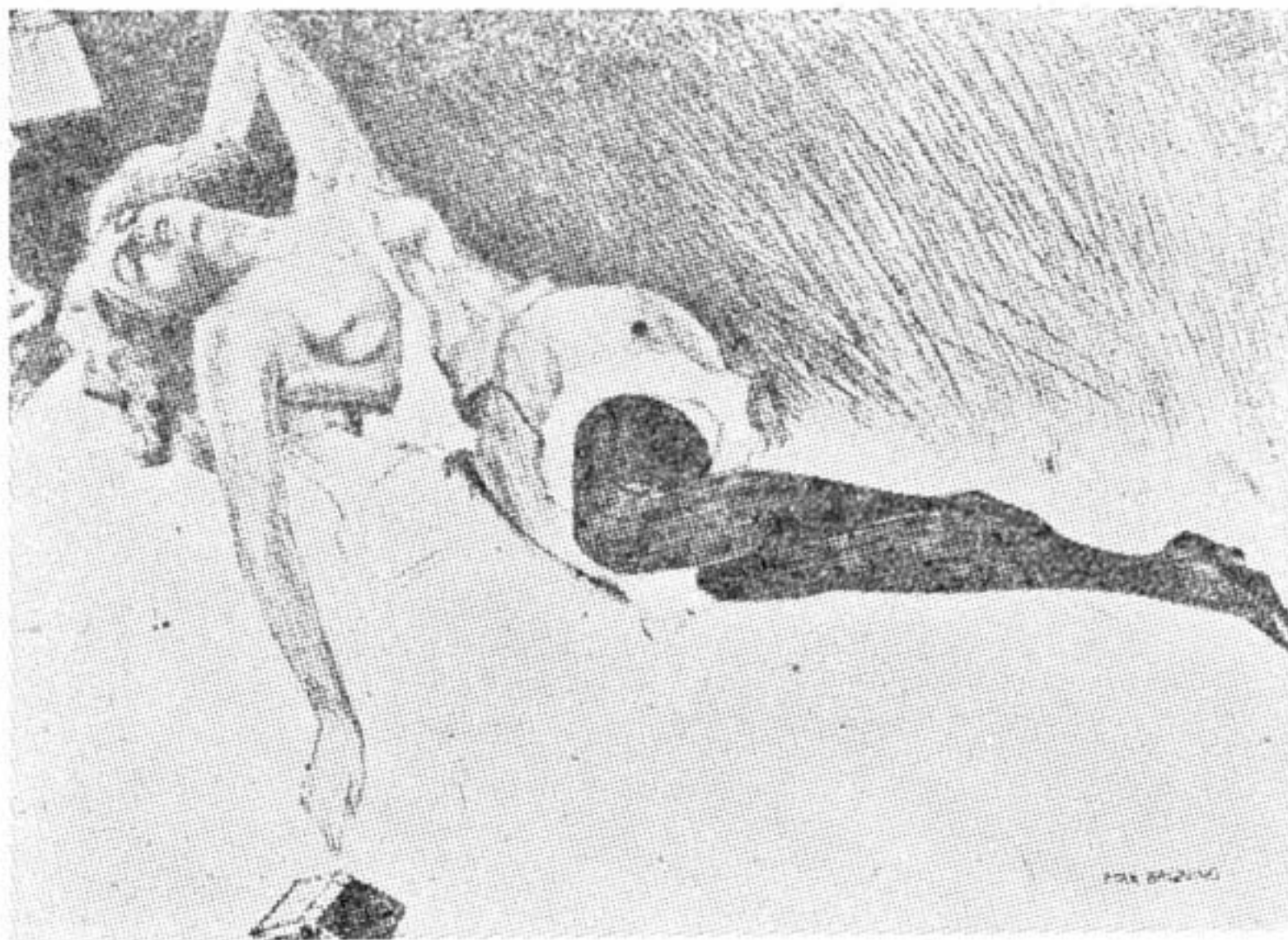
美しく同性愛を描いたもののなかに、ピエール・ルイスの名作『アフロジット』がある。二人の笛吹き娘、ミルトクレイアとロデイスの物語であるが、つぎに引用してみよう。

「あんたは、あたしのさがし出した、たった一つの宝。あんたをながめ、あんたを見つめると、どうして、あたしを愛しかえすのかわからなくなるわ。」

あんたの髪は麦の穂のように茶色、あたしの髪は牛の毛のように黒い。あんたの肌は、羊飼いのチーズのように白い、あたしの肌は浜辺の砂のように焦げている。あんたのやわらかい胸はオレンジの木のようにきれいで、あたしの胸は岩のあいだの松のように痩せている。もし、あたしの顔が美しくなっているとしたら、あんたを愛しているせいだわ。

おお、ロデイス。あたしの妙な処女^{たえ}のものはあんたも知ってるでしょ、天人花を少し食べているパンの神の唇に似ていて、あんたのは、子供の口のようにバラ色でかわいい」

作者ピエール・ルイスは、このミルトクレイアの言葉をかりて、古代ギリシャ時代には女性の同性愛が公けであり、社会的に



危険な読書——マックス・ブリュニング著

も認められていたことを書いている。

それでは、五、六年前に出た、比較的新しい同性愛を扱った小説の中から『女の兵舎』の一節を引用してみよう。これはレスボスのテクニクを刻明に描いている。

「クロードの唇は、ユルスラの唇に火をつ

けたようだった。ユルスラは何もわからなくなり、体全体が燃え上がって、クロードの腕の中で溶けてしまうような気がする。なんとかして意識を失わないようにつとめながら、ずるずるとクロードのベッドのなかへ引きこまれてしまった」

そして、二人がベッドに入ると、
「クロードに抱かれてねると、ユルスラは自分が芥子粒のように小さくなった感じだった。」

彼女は、頬をクロードの乳房に押しつけた。

「心臓ははげしい動気をうっていたが、恐怖は感じなかった。しかし、これからどういふことが起こるか、彼女にはわからない。クロードは男ではないのだ。いったいクロードは、彼女に何をしようとしているのか。なんという不思議な体の動き、それは何を意味しているのか？ クロードは、ユルスラのパジャマのボタンをはずして彼女の小さな乳房をもんだ。」

それから静かに、非常に静かに、彼女の手はユルスラの体——彼女の

のど、彼女の肩、彼女のお腹を愛撫しはじめた。

彼女はどのようにしていいかわからず、目をつむって、体を堅くしていた。クロードはまたユルスラに接吻し、愛撫しつづけてゆくのだった」

いわゆるフィンガー・プレイの序曲であろうか。やがて愛撫はしつようをきわめてゆく。

「クロードにとって、自分のいいなりになってじっとしているこの少女が、どんなにいじらしく思えたことか。ふるえるまぶた、清純な唇、そして子供の体をもったユルスラ！ どんなふうになさわり、よろこばせ、陶醉させてやればよいのだろう。」

クロードは、この子供の体にかくされている秘密を知りつくそうと、なおも愛撫の手をのばしていった。

それから、この小さな子供を驚かせないように、手を止めてささやくのだった。

『ユルスラ、あたしのいい赤ちゃん。あなたはなんてかわいいんだらう』

手はまた動きはじめた……」

以上が大胆なレスボスのテクニクの一節である。

ひまわり

—死体を肥料にして盛夏に咲きほこる大輪の花—

南 原 潔

悪魔への誓い

五分钟前……

サリ—由美が、灰一色の崩れ落ちた壁を縫ってやってくる。次第に、その肢体をはっきりと見せて来た。

(今だ!)

なんとこの悪魔の怒号。

ここは、無気味な、……崩れかけている灰色の壁に囲まれ、濁った水の流れを止めている悪臭放つ泥沼——。

星数馬は、おののく胸を押え、ためらいながら、胸のうちすべてをはだけてうちあけた愛が無残にもぶち折られたため、ならぬ恋のはらいせ——愛が憎しみにとってかわった復讐を計画した。

そのとき、透き通るような、白蠟の白い頬

をピリリと震わせて、なんと言ったか、もう言うまでもない。数馬の心臓が無残にも、胸のなかから引き出され、地面へ叩きつけられたような気がした。そのとき、純情にわななく胸のうちは、一瞬にして深い暗黒の絶望へと突き落とされて——くそッ、覚えていやがれッ、星数馬は、ついに復讐の鬼と化したのだ。

冷たくみつめたあの由美のまなざしや、青白い頬や、赤くチロチロと燃えている唇を思い出すたびに、復讐の熱い血潮がかけめぐるのだった。

頭に二本の角をはやし、蹄のある足をし、黒いマントに黒頭巾をかぶり、黒雲にまたがり、闇から闇を飛んでいく暗黒の王者——悪魔に誓いを立て、以来、由美への復讐を考え続けて、ここにこうして、その手段にとりか

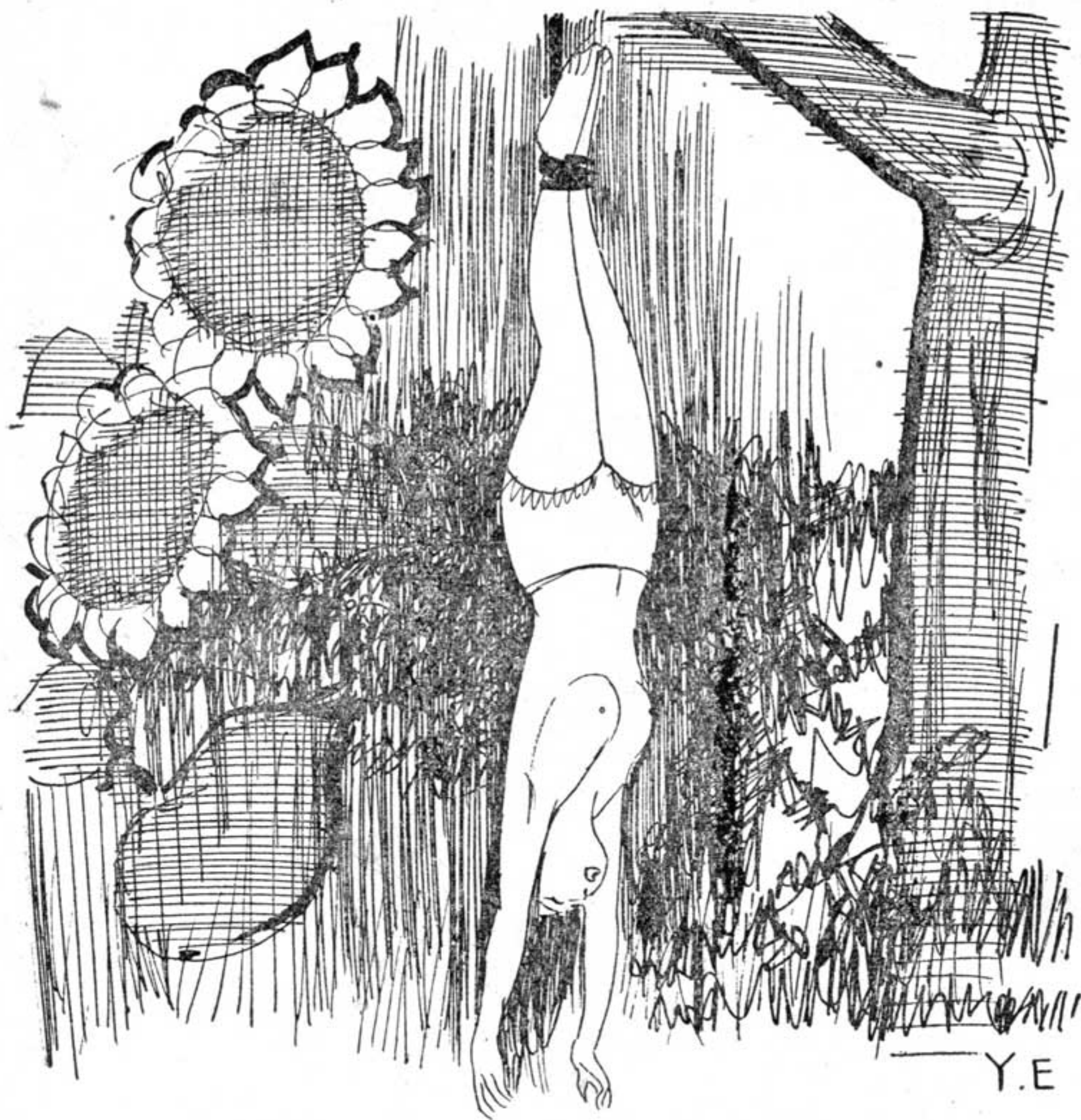
かるため、おののき、ゾクゾクする胸を押えて、待ち伏せていたのである。

五、六分後に迫った数馬の一撃!

手が、じゅうぶんに届くほど近くに来たとき、木陰を飛び出し、数馬の手は由美の首にグイッと食い込んでいた。若い女の脂ののり切った絨のような白い肌。そして首すじは、欲情の炎を掻き立て、数馬の腕に強く絞められていった。

由美は、数馬の腕のなかで、怒りと恐怖が炎となって荒れ狂い、いっそう激しく暴れ、若鮎のような弾力に富んだ肌の水々しい肉体が、ピクッと躍動した。

数馬は、暴虐の極みをつくし、由美は金魚のように口をパクパクやり出し、その目は次第に充血し、もう淫らな目つきどころでない。髪の毛は反抗でパサパサに乱れ、まだ自



由のきく手は、その爪という最後の武器で、数馬の腕を引っ掻き、血潮をふかせ、返り血を浴び、両の足をバタつかせ、最後の力で蹴とばしつづけた。

由美の顔は赤く染まり、タラタラあぶら汗が流れ、鼻から真っ赤な、この世にこんな美しい色があるとは思われないほど奇麗な色の鼻血が、最後の凄艶な色気をとまって、ゆっくりと二筋、流れて落ちた。

しかし数馬は、それっぽっちのことでひるむものかと、グイグイと腕の力をゆるめなかった。由美の目は、もういくらもがいても駄目だと知ると、じっと数馬の心の奥底まで見すかすような、ギリギリの鋭いまなざしで睨みつけた。

数馬も、背中から冷水を浴びたようにブルブルッと背筋を寒くした。が、そこで屈してはならぬと、最後のとどめの腕力を強くした途端に、由美は「ウッ」と呻き声に似たような声を発したかと思うと、グッタリともたれかかってきた。

死体の逆づり

数馬は、由美の肉体の重みのままに地面に寝かし、二、三步ヨロヨロと歩んだ。まだ、

目先にちらつく由美の突き通すような執拗なまなざし。あやしくも美しく流れ散った真っ赤な鼻血――。

それから数馬は用意してきた一本のじょうぶな縄を、ポケットから引っ張り出して、かたわらの大樹にのぼって、太そうな枝にその端を通した。

非常な努力の末、やっと、由美の肉体を逆さに木の枝に吊り上げることができた。由美の肉体を吊り上げるときに、スカートがパツと下へ開いて、白いムッチリとした由美のすそ股と同時に、真っ白な、ズロースが目にも痛いほど鮮やかに映った。数馬は何か嫌なものを見てしまったような気がして目をそらした。

由美の髪は乱れ、両の手はガラリと力なく垂れていた。顔は蒼く、なんだか濁ったような不気味な色を帯びていた。

数馬は、ポケットから一粒のたね――ヒマワリの種を取り出し、吊り下げた由美の頭の下あたりに植えつけた。

真夏に咲くヒマワリ、太陽にこがれて、常に太陽にその花を向けるといふあのヒマワリを、それも大輪のヒマワリ――数馬の復讐の手のひらで育てられる花々。

夏にむかって、由美の肉体は次第に朽ち果てていく。ウジ虫にむしばまれて、この沼の臭気よりも、もっともっと嫌な臭気を発散し、形をとどめず、すっかりこの地球の上から消え去って行くだろう……。

ウジ虫にむしばまれていった由美の肉体から、絶え間なく湧き出てくる腐敗した黄汁が、ポタリポタリと、このヒマワリの種の上に落ち、ヒマワリの良き肥料となっていく。そしてやがては、由美の肉体の最後の汁が尽きたころ、あの美しい黄色の花を咲かせるヒマワリの花が、炎暑の太陽の下に鮮やかに咲き出すのだ。

毎日毎日、数馬は、泥沼の臭気を鼻に打ちながら、そのほとりに来て、由美の腐敗していくのを、いや、ヒマワリの育って行くのを、楽しみにした。目がたつにつれ、美しかった由美の顔全体が陰影に覆われ、黒水晶のような深い憂いと、寂しさを堪えた真黒な瞳が、いつの間にかやたら、死んだ魚の目玉のように、どんよりと白く濁っていた。ピチピチと躍動した若鮎の美は、死によって奪い去られてしまった。

なんたる醜い姿態だ。紫色の陰影が、かすかに身体全体と目の縁を色どっているが、そ

れがなおさら、哀れに寂しく見えた。

また、あるときは、漆黒の黒髪が、一握りばかり地面の上に抜け落ちていた。さらに、ほのかに死体特有の悪臭が漂っていた。

数馬は、そのにおいを嗅ぐと、いうにいわれぬ征服感ともつかぬものが、こみ上げて来た。

――由美、お前の肉体は、いまにその痕跡すらとどめないまでに腐敗して行くのだ。その肉体に、最も忌み嫌ったウジ虫が、ウジャウジャたかって、蠅がブンブン飛び回るんだ。ヒマワリよ。大きくなれ、早く大きくなれ。

肉塊を食う接吻

数馬は幾月と待ったことだろう。

頭上に輝く真夏の太陽の強烈な下に、今を盛りと咲きはこる一輪のヒマワリの花。その上につるされたウラ若き一少女。いや、もはや腐爛した一個の肉塊、それに群がる無数のウジ虫……そこにうごめく何千何百の小動物の小刻みの運動、灰色の使者ども。互いにもつれ合っては、一塊ずつポタリポタリとヒマワリの根元に落ちては、そこでもウジャウジャとうごめいている。

そのヒマワリに飛び交う無数の蠅、真っ黒にかたまり、ブーンブーンという羽音をたてながら、上へ下へと、乱舞のように飛びまわっている。

ジユクジユクと由美の肉体からにじみ出してくる黄色な汁、ブヨブヨの肉塊から、ときおりポタリポタリと落ちる得^{えたい}体の知れない嫌な肉汁。

そればかりでない。この腐爛死体から発散する異様な臭気、これこそ殺人的なおい。魚の腐ったような激しい悪臭。おまけに、それにまじってブーンと鼻を突くムツとする泥沼^{ぬしや}のにおい。緑色に濁った、いろんな塵芥の浮かんた表面からブクブクと底のほうから上がってくる泡の悪臭なのだろうか、なんたる強烈なおい。

この激烈な悪臭と、ジリジリと焼けつく酷暑のために、数馬はクラクラッと眩暈^{めまい}がしたほどだった。

——由美、おれももうすぐ、お前のそばへ行くぞ。

数馬は、由美を縛ったと同じように、ポケットから一筋の丈夫な長い縄を取り出した。

それを、由美が吊り下がっている木の枝へ通し、一方の端を自分の両の足にしっかりと縛

りつけた。残った一方の縄の端をしっかりと握って、ぐいぐい満身の力をしぼって引っ張りはじめた。

そして、非常な努力の末、やっと、由美の頭であつたろうと想像されるところまで引き上げると、ずり落ちないように、手に握っていた縄を、おあむけになったまま足に縛りつけて、手を放した。

数馬の目の前に、由美の唇が触れんばかりである。そこに、無数のウジ虫がいようが、ブーンと激しい悪臭が鼻を打とうが、いまの数馬は幸福の絶頂だった。

——おれの最後のベーズを受けてくれ。

数馬は、由美の唇からジユツとにじみ出してきた黄色な汁を吸いに吸った。ウジ虫ごと吸い続けた。それでもあきたらなく、由美の肉塊をほおばった。

足のずっと上のほうで、真っ紅に燃えている太陽が、ますます激しく燃えている。

やがて数馬は、頭痛に苦しんだ。

鼻から、なま暖かいものが、スーッと目のほうへと流れ落ちて、頭がボーッとしてき

た。赤や、青や、黄色の渦巻き……。

そんななかで数馬は、愛^{いと}しい由美を食い、満足するのだった。

図解 初夜の性技 133 章

——寝室に関する基礎知識——

医学博士 竹下 泰著

定価 二五〇円(送共)

<最新刊>

初夜がうまくのと、いかないのとは、その後の性生活がまるっき

東京都千代田区神保町一丁目 株式会社 星文館
振替・東京四八〇一番

<最新刊>

人生快楽の基本は性生活から人

医学博士 竹下 泰著

定価二五〇円(送共)

図解 性の百科全書

——性愛に関する基礎知識——

明治性的珍聞史 (7)

芝の奇怪事

芝三田四国町二番地宮地赴武(四十八)は、長男総彦(七)、長女おしづ(二〇)の三人暮りであったが、去る九月上旬、同所に転宅した当時は何事もなかったが、翌十月十日ごろから、夜になると種々奇怪な出来事があり、夜中、キセル、煙草盆、火鉢などがゆらゆら動き出して天井へつり上がり、米ビツ、すり鉢、鍋、釜、茶碗などが、生きもののよう躍り出し、戸棚の上へ上がるものもあれば、せっちんの中へ飛び込むものもあり、時としては赴武らの寢床の上から米、灰などふらすこともあってうす気味悪く、子供たちは夜になると、恐ろしがって父の側をはなれない始末。赴武は重なる

奇怪事に心を決め、今度物が動き出したなら斬り捨てくれんものと、枕元にナタ、出刃包丁を置いて寝たところ、夜半に至って、どこともなく生暖かい風が障子をふるわせて吹き入り、ランプの灯を消してしまった。赴武はまず、子供に危険のないようにふとんをかぶせた後、枕元に置いた出刃包丁をさぐって手にしようとしたところ、こはいかに、いつの間にか出刃包丁もナタも飛び出して宙に浮かぶさま、それが生あるもののように呼吸をくりかえしてフワリフワリと家内を打ちめぐってほんろうする。さすがの赴武もゾッとして声も出ず、子供をしっかりと抱いたまま、ふとんにもぐり

込んでしまった。

そのうち障子がガタガタと音を立てて鳴り出した。その音はまるで拍子をとるように陽気なものである。加えて畳の下、つまりエンの下からはアンマの笛がその陽気な障子の音に合わせて面白おかしく吹きまくる。実に百鬼夜行とはこのことか。

その夜の奇怪事は、夜のしらじらとあけ染めるころまでつづいたので、赴武は、早朝から高輪警察署に、この子細を述べて訴え出た。

しかし、警察とて、人間の仕業であれば取り締まることも出来るが、何分にも幽霊か怨霊のたぐいのこととて頭をかかえるだけ。赴武も、それではと、ある祈禱師を招き、現在祈禱中とのことである。

(明治二十三年十一月二日・東京朝日新聞)

淫婦、亭主を毒殺す



深川西六間堀の餅屋渡世の菖蒲与吉という者、久しく病いの床に臥していた。その妻はいとといって、本年二十五歳だが、糸という名にそむかず、染まりやすい水性で、夫の甘さも鼻についていたおりからとて、いつか塩田兼吉と人目忍んで寝の子餅、契る数さえ重ね着る夜の衣のたび重なっていた。

もし、夫の与吉が全快すれば、二人の仲の自在餅のこの快樂はつづけることは、とうていできない。どうせ枯れるのが菖蒲与吉、ままよ、毒害してしまおうと、胆太くも、二人は法をかきつばた、薬ビンに配剤の毒ありとは、この病人あやめも知らず、飲むやいなや、鼻、耳、口、目から血を吐いて、たちまち絶命してしまった。二人は、心の中で喜びつつも、表面は憂いに沈んで野辺送りをし、泣き真似をしていたが、事は露見して、ついに警察へよばれて厳しく取り調べを受けたので、とうとう白状したので、本月九日、東京裁判所へ送致された。

(東京日日新聞第八百七十七号)

実意を見せんと心中芝居



疑う心は情に深き中仙道の深谷という
 駅の娼妓に馴染んで通い、やがて実家へ
 も話をつけて、わが家の妻沼村へ引き取
 って夫婦になろうと約束した。

ところが、この娼妓は、この男のほか
 にも情けを通わせる男がっていると聞いて、
 客は怒って問いつめれば、妓は手管の妙
 術で、死んで誠実を示そうということに
 なった。

そこで、ともに死のうと華美に粧っ
 て、ある蘭若の墓所にいたった。

男は、それでは死出の道案内をしよう
 と、短刀を腹に突き立てると、妓はびっ
 くりあわてて、逃げ出そうとするのを、
 男は笑って呼びとめ、これは、糊紅の細
 工で、お前の本心を確かめたのだという。
 だが、これも一步誤まれば、貴重な命
 を継つこともあろうに。

白露や無分別なるおとこ路

(東京日日新聞第九百十三号)

一杯機嫌のあとさき見ず



飾磨県下井上村の滝井なにがしの長男
 太平が今年の一月もらった花嫁は、同県
 下吉福出屋敷小山の娘で美津江という器
 量よしで、年は二十一歳。

三月二十七日のこと、この美津江が、
 夫とともに芝居見物に行ったところ、運
 の悪いことに、むかし深い仲だった清五
 郎という男とめぐりあった。

その清五郎は、一杯機嫌だったことと
 て、あとさき見ずに、夫の定まる美津江
 に近づいて、しきりに、いやらしいソブ
 リをする。

太平はこれを見とがめて、美津江を叱
 りつけて、そうそうに帰宅したが、なお
 腹がおさまらず、翌朝、仲人をよんで談
 判していると、二階でただならぬ物音が
 する。あわてて二階へ上がってみると、
 美津江が、面目ないと思ったのであろう、
 覚悟を決めて、自害していたという。

(明治八年三月)

つかんでは投げ



大阪の船越町に、骨接を業とする松本あいという婦人があった。年はまだ二十六歳だが、日ごろから柔術に長じていたが、それを現わすことがなかったから、そのことは誰ひとりとして知るものはなかった。

さきごろ、隣家の娘を連れて長柄川の堤を通行中、川風も寒くなった夕暮れどき、四人の荒らくれ男が飛び出して、おあいと隣の娘とを二人ずつで取り押え、強姦しようとした。

そこで、おあいは、大いに怒り、組みついてきた一人を水中に投げこみ、また一人を突きころばし、隣の娘を押え込んでいる一人の髪の毛をつかんでねじ倒し、もう一人は、拳をかためて、目のあたりを打ったので、男たちは恐れをなして逃げ散ったという。

私がパンティーに興味をもつようになったのは

星 山 碧 生

生い立ちの秘密

女性の下着、とくにパンティーに興味を覚えるのは、もちろん男性すべてにある潜在的な性格にもよるのでしょうが、ぼくの場合、ある契機をへて大きく増勢されたように思われます。

ぼくの生い立ちには、ぼく自身そう考えなくとも、世間様が可哀想に思ってくださるような、生誕の秘密があるのです。ぼくが妾腹の子であるということです。

小さなとき、そう、六年生ごろまでは、それが「旦那」とも知らず、母におしえられた通り「パパ」と呼んで不思議にも感じなかったのが、年を経るに従って、その秘密がわかったとき、通り一遍の不快さと忿懣はあったが、これも一つの人生だと思って、母をうら

んだりもせず、ますます、その生活に甘んじていたのです。

ただ、大いに悩まされたのは、旦那が来た日の隣の部屋からきこえる母のうめき声でした。見ず知らずの他人様の行為なら興味も湧こうというものでしょうが、実母であって見れば、ただいやらしさが先走るだけで、出歯亀根性が浮かぶべくもなかったのです。そのような生活が、ぼくの性格を形造っていったのでしょう。

しかし母も、ぼくがはや世間というものを考え、自分の生い立ちに一応悩む年ごろであると気がついたころ、あっさりと旦那と切れて、母子二人だけの生活に入ったのです。生計は、別れるときに旦那が母に作ってくれた小じんまりとしたバーの経営で、結構不自由なく、むしろ余裕のある暮らしを立てること

が出来るようになっていたのです。

母のバー「ルミ」は、六時から二時（といっても表向きは十一時に終わる）までで、われわれ二人は、そのバーからほど遠からぬ「おめかけアパート」と呼ばれるアパートの一室に住んでおりました。

このアパートは、全部といっていいくらい水商売の女性がすんでいて、窓や物干しにぶらさげられた下着類も、色とりどりで、満艦飾よろしく、男性の興味をそそるにじゅうぶんな眺めでした。そして、これを眺めて歩くのが、ぼくの日常の一部となっていたのです。

それはさておき、バーのほうは母の妖艶なまでの美しさも手つだって客足もよく、いつもいっぱいの有様で、うれしい悲鳴を上げる日々を送っていました。男の客の目当てはみ

な母にあり、また、天性の浮気性のためか、そうした空気が好きなのか、おりを見ては、ツマミぐいの快味に酔っているふうでした。

といって男の客ばかりというわけでもなく、母の知り合いのバーのマダムだとか、昔の同窓生で、いまは暇を持て余している不良有閑マダム族や、夫への欲求不満が原因のヨロメキ夫人などが、ワンサと、マン・ハントとおしゃべりをしに店につめかけて来るのでした。

性を享楽する女たち

さて、ぼくのパンティーへの傾斜を促した女性も、やはり、この店の常連の一人でした。その人は、母と同期で、学友のころから非常に親しく、その後もよく連絡を取りあって、映画だの演劇だのを鑑賞しに行く間がらでした。だから二人のあいだの性生活の話題も、じつにザックバランで、ぼくがそばにいても、

「次郎はもう大人だから、聞かれたってかまやしないわ。フン、それで、どうしたの？」

と、いっこう意に介せず、じつにあけすけでした。名前は椎名弓子といって、ある有名な貿易会社の専務の息子と結婚して、裕福な生

活を送っていたのですが、いかんせん、人生万事いいことばかりの連続とはいかず、どんなに弓子おばさんが性知識を仕入れて努力しても、いっこう子宝に恵まれず、このため夫婦のあいだに、ともすれば波が立つ有様でした。そして、その夫は、社内の海外支店派遣のさい、弓子おばさんを置いて、三年の海外生活に飛び出してしまったのです。

それからというものの、弓子おばさんは、足繁く母のところに足を運ぶようになり、いっそう、ぼくとの距離も近くなっていったのです。

ぼくも、母の血を引いたためか、女性受けがよく、バーでの人気も、とくに女性連にあり、母と二分していたくらいです。

ところでこの女性連なるものがまた曲者で、セックスを享楽することだけが人生の花だと考えているような人々の群れでした。ですからぼくをそっと隅の暗いボックスに呼んで強引に接吻しようとしたり、あらぬところにぼくの手を引き入れてペッティングさせようとしたり、また、アルコールで激しているときには、自分からぼくの身に触れて来たりするのです。

若い身であるぼくが、それらの行為を阻止

したり、声を上げたりすると、そのしぐさがおかしいといってケラケラと笑うのです。まったく性の獣と化した夫人たちでした。

そのなかで、弓子おばさんは、ぼくが友人の子供であるということが頭にあるためか、あまり、面と向かって卑猥な言葉をかけた、色目を使ったりはしませんでした。

しかし、ぼく自身は、もうずっと前から、おばさんが好きで、その優美な姿や、切れる頭悩に魅せられていたので、おばさんに少々のことをされても、ほかのマダム連のような阻止の動作は示さないだろうと、自分で内心では思っていたのです。

その爆発のおそれのあった二人が、ついに、情熱を爆発させる日が来てしまったのです。

爆発した情熱

その日は、雲がたれ込めて、青春の発散が無理に押し込められたような、それでいて、きっかけさえあれば、鬱積したそれらの気分をぶっ放しだろうような日でした。

その日も、ぼくは、ふらりと七時ごろに出掛けて行って、カウンターで、不慣れた手つきでシェーカーを振りながら、客の猥談に、聞くともなく相ツチを打ちながら、まだ来て



いない弓子おばさんに思いをめぐらしてしま
した。

九時ごろになって、待望の弓子おばさん
が、相当アルコールを聞こし召して、フラリ
と、それでも足もととはしっかりと入って
来ました。

そしてふつうなら母と話を始めるところ
を、いきなり、ぼくを隅の薄暗いボックスに

引っぱって行きました。

その大きな黒目がちのキラキラ光る目でジ
ッとおぼくを見すえ、形のいい唇から、いつも
よりもずっと甘く、少し語尾のあやしい言葉
でしゃべり始めました。

「次郎、おばさんが嫌い？」

急にいわれたので、ぼくが啞然としている
と、それにはおかまいなく、

「ね、好きでしょう。そうよ、好きよね、絶
対好きだわ」

まるで、好きの押し売りのようです

「おばさん、酔っぱらってるから、こんなこ
と言ったと思っちゃイヤヨ。私ね、前から、
次郎が可愛くて可愛くてたまんなかったの
よ。機会があったら、キッと誘惑してやろ
う、キッと、この手に抱いてみせようと思っ
てたの。」

でも、いつも素面^{しらふ}だったから、なんにもい
えなかったの。だから、きょうは、どうして
も次郎を私のものにしようと思って無理して
強いお酒飲んできちゃったの。お酒くさかっ
たら、カンニンしてちょうだい。でもねえ、
きょうはどうしても次郎を私のものにした
い。ネエ、次郎……」

といって、それはもうなんとも形容しがた
いくらい色っぽい仕草^{しざう}で、ぼくをかき口説く
のです。

それに、顔の近くで熱っぽくしゃべるもの
ですから、アルコールの混じった甘い息^{いき}が、
ぼくの鼻をくすぐって、いっそうやるせない
気持ちに引っぱり込まれていくのです。

「ネエ、次郎。次郎も、わからず屋ではない
し、おばさんが好きなら、なんにも恐がること

ないわ。おばさま、決して乱暴にはしないことよ」

もうすっかり一人決めしたような口ぶりで、ぼくの手を力を入れるのです。ぼくはもう、おばさまのペースに乗せられ、すっかり思慮が乱れてしまつて、

「そりゃ、ぼくだって、ずっと前から、おばさんが好きだったよ。だけど、そんなことしたら、ママに叱られちゃうよ」

「だから、ママに感づかれないようにすればいいわ。私が先に出て待ってるから、次郎はあとから出て来るといいわ。それに、人生は大いに楽しまなくちゃあネエ」

といいざま、おばさんは、ぼくの口に、音の出ないようにキスをするのです。

もうこうなつては、荒くれ男に見込まれた処女のようなもので、いったい、どっちが男かわからないような有様で、すっかり毒氣に当てられたように、弓子おばさんの出て行った少しあと、母には、

「きょう、チョット気分が悪いから、早く帰るよ」

といつて、バーを出て来たのです。

二丁ぐらい歩くと、暗がりから、スツとおばさんが出て来て、いきなり、こんどはぬめ

るような甘い唇をおしつけて来たのです。

甘ずっぱい布切れ

「ネ、次郎。きょうは、思いきり、青春を謳歌しましょう。本当に、次郎と一緒になんて、幸福だわ。さ、早く」

男女の最後に落ち着くところは決まってる。ぼくはとうとう、小じんまりしたホテルに引きずり込まれたのです。

おばさんは、案内された部屋に入ると、すぐに洋服を脱ぎ、白いブラジャーとピンクのパンティーだけになって、誇らしげに、そのすばらしい体を見せながら、

「近ごろ少し肥っちゃつて、このパンティー小さくなっちゃつた。このあいだも、うつ向いたとき破れたので、びっくりしちゃつた」と言いながら、一ぺんの羞恥心もないように全裸になつて、風呂に飛び込んでしまひました。それは、中年女性の特権みたいな図々しさから来るのか、あるいは、良家育ちの、羞恥心のない生活の名残りか、または、アル

コールの勢いか、とにかく、そのふるまいには、少しのいやらしさもない、天衣無縫なところがあつて、見ていて、スッキリするよう

なふるまい方だったのです。そして、せわしげに、

「何をしてるの、次郎。早く入ってらっしゃい。流してあげるわ」と呼ぶのです。

えーい、ままよ、なるようになれ、と思ひ切りよく風呂に飛び込んで、またまた思わすうなつてしまったのです。そうです。なんと、おばさんの体の見事ですばらしいこと。しかも、アルコールのせい、その引きしまった体が、ポツと桜色をして、まるで、肌がおうように色っぽいのです。思わず、その妖艶さに立ち止まっていると、

「さア、早くこっちにいらっしゃい」

といつて引きよせ、ごしごしと、乱暴にぼくの体をこするのです。

しかも、洗ったあとから、そこらじゅうにキスしていくのです。

ぼくはもうすっかり、湯氣とキスのおかげで、のぼせ上がつてしまいました。すると、ザーッと水をぶっかけて、

「まあ、もう上気しちゃつて」

といつて、ぼくより興奮している自分の体に水をかけて、あとの楽しみのために情熱を取っておくかのように、さっさと風呂から上

がっていってしまったのです。

ぼくもあわてて、雑に拭いただけで上がって来てみますと、おばさんは、風呂のせいか、すっかり酔いがまわっているようで、とろんとした目でぼくを見つめて、

「サ、次郎。こっちにいらっしゃい」

と手まねくのです。

ぼくは、暗示にでも掛かったように、ふらふらとおばさんのところに近づいていくと、いきなり引きよせて抱きしめると、首筋にべーぜをして、

「弓子が好きとって、好きだといって」

と口ばしりながら、身もだえるのです。長いあいだの夫婦生活の空白が、いっそう激情に引き込むのか、中年女性の生理がこうさせるのか、波うつ陶酔のなかにひたりきって、ぼくの体を自由にするのでした。

と、いきなり、ぼくの顔にかまされたものがありました。しかも、それを口に押し込もうとするのです。

それは、甘ずっぱい、なんともいえないにおいのする布切れでした。おばさんのパンティーであることがわかったのは、激情がさったあとでした。そして、おばさんの蓄積された三十五歳の情熱で、ぼくは何度か愛されつ

づけたのです。しかも、そのつど、スリッパやブラジャーが使われたことははじめてのパンティーの場合と同じでした。

弓子おばさんには、サディズムの傾向はないらしく、ただ、やたらと、自分の身につけているものを相手の顔にかぶせたり、口の中に入れてたりして、はじめて強烈な感覚を得ることが出来る、一風変わった性癖の持ち主だったのです。

女にもらう下着

帰りぎわに、次の約束をして、しかも、ぼくの手にと押し込められたものがありました。

さきほどのパンティーだったのです。

「これを持ってて、決して、私のこと忘れないうでちょうだい。別な女の人のこと考えたら、承知しないから」

おばさんはこういって、首すじに強いキスをしてくれて、ホテルの前でわかれしました。

ぼくは、星の降るような道を、けだるい体を引きずって、アパートに帰りました。まだ母の帰ってないのをたしかめ、そっとベッドにもぐり込み、パンティーを取り出してしげしげと見てみると、なんだか、それが、おば

さんの体のように思えて来て、思わず抱きしめて、口づけてしまいました。

ぼくがパンティーに興味を持つようになったのは、このような契機があったからなのです。

いまでも、おばさんとは、週に四回ずつ会って、甘美なひとときをホテルで過ごしていますが、そのつど、おばさんは、新しいパンティーをはいて来ては、二人の遊戯に用いているのです。

ときには、二人のパンティーをとりちがえてはいて、喜々としてたわむれることもありました。

いまでは、おばさんの目をかすめた、ぼくの気の向かなかった浮気の相手からもらったパンティーも入れて、相当の数のパンティーや下着類を持っているようなわけなのです。

それでもぼくは、おばさんを深く愛していますので、おばさんのパンティーでうまるくらい数を得られそうな気がします。それでもぼくの場合は、決して、ぬすんできたり、物干しのを失敬したりするマニアとは違って、いますので、自分の性癖を下劣なものだと思っただけではありません。

妖怪^{ようかい}変化^{へんげ}とセックス

三 崎 光 男

妖異の本家は中国

ひと口に妖異といっても、妖怪あり、変化^{へんげ}あり、幽霊あり、化け物^{ばけもの}ありで、まことに多種多様——そればかりか、現代の科学でも説明に苦しむような怪奇さもある。

ところで、妖怪というと鬼氣身に迫る感じの無気味さがあり、変化^{へんげ}といえは、マカ不思議な神通力を自在にあらわす怪物をいう。さらに幽霊というのは、この世に心を残した魂が、その未練を、おもかげをあらわすことによって示すのである。その場合、もっとも多いのは、やはり怨恨であろう。だが、それが化け物となると、以上と変わって、ユーモラスであり、ナンセンスである。一つ目小僧とか、カラカサの化け物とか、どこかピントのぼけたところがあって、ある意味では、ほほ

えましい感じさえ抱かせる。

それはそれとして、わが国では、むかしから、こういった妖異が数多い。これは、人々の恐怖、好奇、怨恨、疑惑など、ふつうでない異常な心理が、ある形態をとって表現されるからである。ということは、いつの時代でも、人が主役で、人あってこそ妖異が存在するということである。

だが、こういった妖異も、その本家は、中国であることは、言をまたない。有名な「雨月物語」も、中国の「西湖佳話」のなかの話「雷墳怪蹟」の翻案であるといわれているくらいだから、なんといっても、こと幽霊や妖怪に関しては、中国は家元である。

火は妖異の源

では、そういった怪異ばなしには、どんな

ものが多いのだろうか。

まず「淫火」がある。妖怪変化には怪火がつきものである。そして、この火は、性のシンボルとされている。だから、火所と書いてホトつまり女陰の意味にしているのだ。

この火には、鬼火、陰火、天狗火、ホタル火、墓の火、しらぬ火、みの火、宗玄火、キツネ火、ふそり火、クモ火、人だま、うばが火、竜灯、キツネの嫁入り、ボタン灯籠、お化け提灯、お化けローソクなど、数限りなくある。

これは、原始時代において、火は生命の神祕であり、神の不可思議であった。だから恐れられ、敬われていた。壮大な山火事の恐怖は、原始人にとって、抵抗できないものであり、生命をおびやかされる強大な力であったことを思えば、火が、つねにナゾをはらみ、

畏怖されていたことは納得がいくところであろう。

さらにまた、犯罪心理学の大家ハンス・グロースによれば、

「性的緊張感による感情の動揺や不満から火

を放つものがある」

として、火とセックスの関係をとしている

が、原始人の行動が、つねに食えることと、セックスだけにつながっていたことを考えるならば、火を妖異とする考え方の根底には、



古井戸から現われたお菊の亡霊（国年筆のミ番町皿屋敷ミ）

セックスが大きな位置を占めているといえるのではないか。

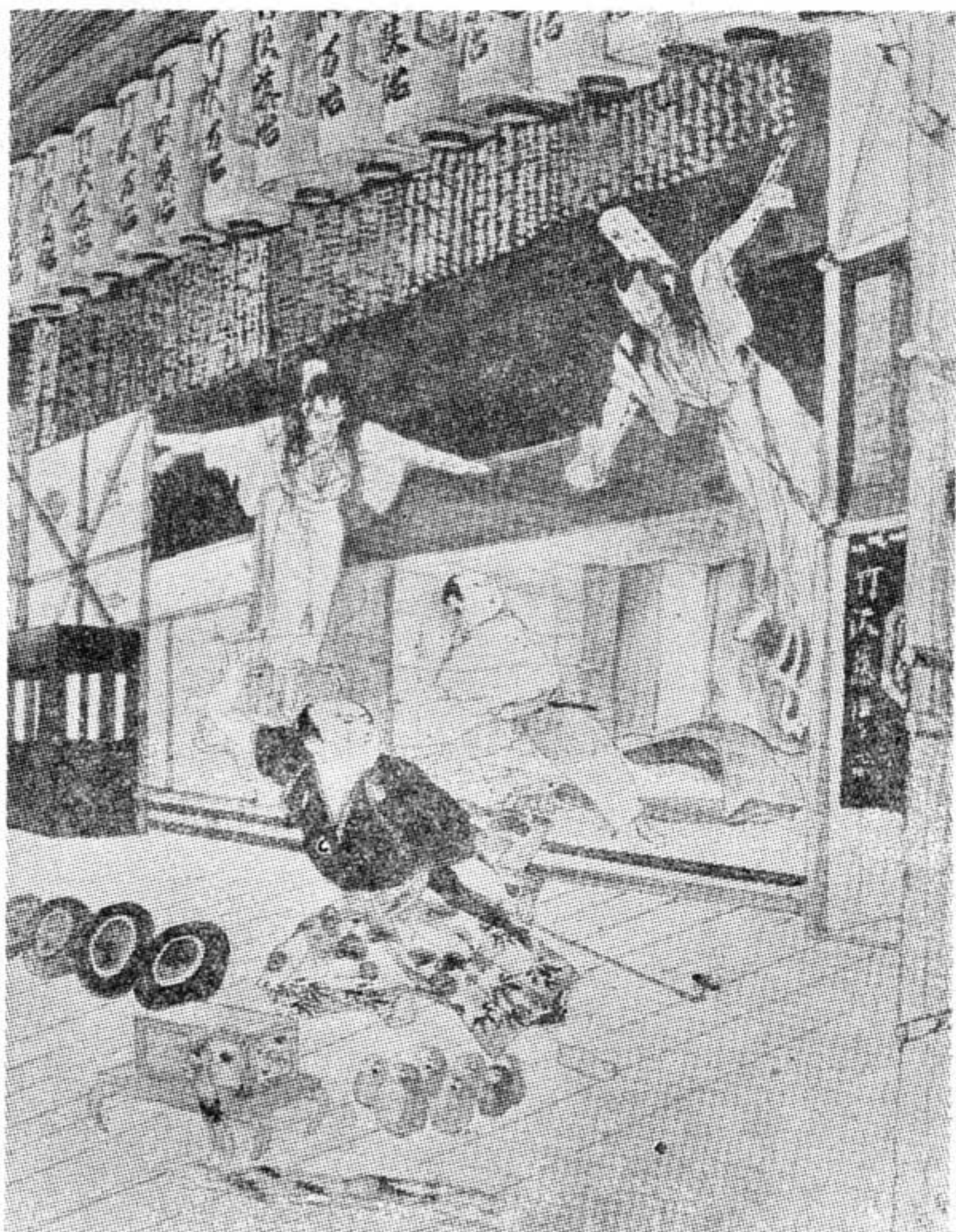
幽霊のふるさと

さて、妖異の根底にセックスがあるという見方からすれば、性器とくに女性のソレを、幽霊ないし妖怪とみるならわしのあることは納得がいく。しかも、この考え方は、案外に根ぶかいのである。

古く、鳥羽僧正の筆と伝えられる一大絵巻に「陽物くらべ」というのがある。時の帝が諸国から荒武者や荒法師をつのり、女官軍と「肉弾戦」を行なうことによって、その力をテストしようというのだが、けっきょくは男子軍が全員討死にするのである。そのときの女官軍は妖怪のごとき女性のヨニで描き表わされていて、それに男子軍が恐れをなし、ひとのみにされてしまうのである。

とにかく江戸時代には、幽霊の原型は、人類の故郷だとされた。つまり、毛をおどろにふり乱して垂れ下げたそれが、もとになっているというのである。

しかも、その場合、男性器よりも、女性器を思わせる幽霊のほうが、より恐いとされている。



芝居に見るニ義民宗吾ミの怨霊

それは、凸出的な男性器と違って、切り取られたような洞窟状の形が、そういう印象を与えるのであろう。

愛すれば死体でも

「恨みを晴らさしておくべきか」

というのが、幽霊の殺し文句であるが、これは、どうやら日本的な心情らしい。西洋の幽霊つまりゴーストは、もっと明るく楽しい雰囲気さえもっている。

かつて「幽霊西へ行く」というイギリス映画があったが、これに出てくる幽霊は、なか

なかにハンサムで、しかもユーモラスであったことを覚えている。

ところが、日本の幽霊とくると、「葵の上」の六条の鬼女は生霊となり、「道成寺」では蛇体となるように、一つのことにしたら、あくまで離れないという、執念ぶかさをもっている。国民性のなせるわざであろうかと思う。

その執念ぶかさは、死んでのちまで、思いを遂げようという話が多い。

「逢夜雁の声」のなかの葬式人夫が、病死した娘を湯灌場^{ゆかんば}で丸裸にして自由にしながら、死体にむかって、

「こうなれば、仏でも幽霊でも、こたえられねえ。おめえにゃ、とうから惚れていたのだヨ。アッ、つめてえ……」

などつぶやく図は悲惨である。

だから、墓場などで、美しい新仏を掘り出す坊主や、女の死体にとりついていてる野良犬などの無残絵が、昔から画材に選ばれているのである。

愛するものなら、腐爛死体であろうと白骨と化そうと、交わりたいというのは、人間のなかにそむネクロフィリー（死姦症）の心情なのだろうか。

若い娘についた死霊

岩 村 準 吉

のしかかる黒い影

科学万能とはいえ、まだまだ、この世の中には、まったく不可解な出来事があるものだ。どう考えてよいか、どうにも不思議なことがあった。

十年ほど前、私の妹が十八、九歳のころである。私たちは、父の仕事の関係で、横浜市の郊外K町に住んでいた。

ところが、そこへ移転して間もなく、妹が得^え体のわからない病氣にかかった。いや、病氣といえはいえないことはないが、本当の病氣ではなく、ただ、毎晩、決まった時間になると、激しくウナされるので、睡眠不足と食欲減退から、病人となったのである。

からだは、見る見る衰弱し、一週間たつたたたないうちに、見るかげもなくやつれて、

長いあいだ臥床していた大病人かと思われるほどであった。

日ごろは、ちょっとしたことに、じき涙を見せるといったふうな、かなり神経質な面もあるにはあったが、どちらかといえば、明るく朗らかな、気の勝った娘であった。だから、妹が、そんなふうになったのは、どうも合^が点^{てん}のいかない話だった。

だから、私たちも、はじめのうちは、年ごろの娘だから、からだの調子の狂いかも知れないと、しごく簡単に考えていた。ところが五、六日たつと、げっそりやつれてしまって、それこそ本ものの病人になってしまった。

そこで、よく聞いてみると、ウナされる時刻は必ず十二時を打って間もなくだという。どんな夢を見るのかと聞くと、いや、夢ではない、時計の音も聞こえるし、障子の棧も襖

の模様もハッキリ見える。それでいて、何者ともなく、黒い、ボーッとした影のようなものが、どこからともなく出て来て、布団の上に大盤石^{だいばんせき}のようにのしかかるのだという。

しかも、それは、どうやら死人に違いないと思えるので、その息苦しさ、恐ろしさに、妹は、大声をあげてわめいているつもりだとも言った。

こんなことは、私たちでも、よく夢にみることがあるが、それが「死人だ」と妹に感じられることが、なんとも薄気味悪く思われたが、私は、気分転換をはかればいいのではないかと考えたので、いつも、おもしろそうな、気の引き立つ話をしていた。

お岩様が来た

ところが妹は、いよいよ気をめいらせて、

「兄さん、世の中に、死霊なんて、本当にあるのでしょうか？」

と、突然、聞くので、

「バカな、そんなものがあるもんか」

と叱りつけると、彼女は、

「いいえ、あたしには、あるように思えてしかたないの。あたしには、きっと死人が憑いているんですから、どうか引き離す工夫をしてください」

と涙ぐむ。

そこで、夜になると、家じゅうのものが妹のところに集まって、にぎやかに雑談するのにした。父などは、酒の勢いで追いつきとばかり、あまり好きでもない酒を飲んで景気をつけたのだが、やっぱりこの時刻になるといけない。

怪物は、その酒の席にまで出てくると見えて、刻限が近づくと、妹は急にあたりを見回して、いきなり母にしがみつき、五分ばかりは、手のつけようもないくらい恐怖する。その揚句に、痛ましいほど疲労する。

私は、時計があるから時刻がわかるんだと、家じゅうの時計をとめてしまったが、それでもダメで、妹は頭のなかで、ちゃんとその時刻を知っている。

そこである日のこと、父は知り合いの神経科の医師のところへ相談に出かけた。母は母で、叔父(母の弟)に相談して、どこかで一度占ってもらいましょうと、女らしい考えで出掛けた。

そこで私は、まだ小さい女中と二人で、妹の看護に家に残った。

春も終わって新緑のころだったので、私は妹の部屋からカギの手になっている居間で、新聞を広げていた。すると、「お湯を」という、病人のか細い、苦しげな声が耳にはいった。

妹の部屋のほうを見ると、痩せ細って、青白い顔になんともいえない不愉快な表情をした妹が、寝床から脱け出て、縁のところからこっちを向いて立っている。

「どうしたんだ？」

と私がきくと、妹はちょっと口もとに微笑を浮かべて、

「お湯をください」

という。

そこで、女中にお湯を持ってこさせると、鏡台を出してくれという。そして、

「兄さん、あたし、もうダメよ」

「なにを、いったい、バカなことを言うな」

「でも、あたし、いま、イヤな夢を見たのよ。昼間からあんな夢を見るようでは、もうとてもダメだわ」

と、しょんぼりしている。いったいどんな夢を見たのかと聞くと、

「いま、うつらうつらしていると、玄関の戸のあく音がして、誰かはいつて来たように思ったの。なんだか叔父さんらしいと思っていると、うしろの襖があいて、やっぱり叔父さんがはいって来たわ。ところが、その叔父さんの格好が、芝居に出るお岩様そっくりじゃないの。つまり、叔父さんが、お岩様の格好をして病氣見舞いに来てくれたのよ。まあイヤな叔父さん、と思っていると、美枝子、病氣はどうだといって枕もとにすわると、いきなり、あたしの口を押えて、長い舌でペロリと口のあたりをなめたんです。ああもうダメなんだ、あたしは、もう死ぬんだとあきらめてじっと目をつむっていると、いつの間にか叔父さんのお岩さんは見えなくなってしまつて、気がつくのと、やっぱり夢だったんです。それでいて、そのあいだじゅう、この鳥の聲が、かすかでしたが、やはり聞こえていたんです」

と妹は、縁先の鳥籠を見上げた。

利



彼女は、話し終わると、すっかりあきらめて
いるふうが見えた。私は、きっと、そのう
ちによくなるから、精神をしっかり持ってい
なければいけないなどと、一生懸命になぐさ
めていた。

そのうち妹は、鏡台に向かって、
「あんまりきたないから、髪でもとかしまし
よう」

といいながら、鏡に写る自分の顔をじーっ
と見ていたが、

「ずいぶん痩せたものね」

「病人だから、そのくらいのことは当たり前
だよ」

「死ぬのは仕方ないけど、きたなくなるのは
イヤね」

「まだ、そんなことを言っている」

「だって……」

「髪をとかすのはいいが、くだらない心配を
するんじゃないよ」

そういつて私は、また居間にひっ返して、
読みかけの新聞を取り上げたときだった。妹
のけたたましい叫び声が突如として耳をつら
ぬいた。なんとも悲痛な声だった。

私はバネ仕掛けのように飛び上がった。見
ると、妹は縁側からのめるように庭先へ転が

り落ちそうに見えた。

私は夢中で駆けよると、妹を抱き起こした。彼女はほとんど人事不省の状態で、グッタリしていた。

そこへ女中も駆けつけたので、寢床へ運んで静かに寝かせたり、水を飲ませたりして、うちには妹は意識を回復した。幸いケガもなかったが、彼女は、死人のように青い顔をして、じっと私の顔を見つめている。私は、これで妹の人生も終わりかと、痛ましい気がしてならなかった。

占い師はいろ

昼すぎて、母が息せききって帰ってきた。

そして、すぐ、

「美枝子は？」

と聞く。

母は、心に何かひっかかっているような表情をしていた。そこで私が、留守中の出来事をくわしく話すと、眉をひそめて考え込んでしまった。

「どうしたんですか？」

「占ってもらったんだがね」

「どこで？」

「叔父さんのところへ行ったら、そんなに気

になるなら、ともかく占ってもらったらよろうといって、普門さんのところへいっしょに行ってくれたんですよ。なんでも、大変よく当たる坊さんだという評判でした」

「で……」

「それがね、そのお坊さんは、死霊のたたりだというんだよ」

「フーム」

一段と声をめそめていう母に、私は考えこんでしまった。すると母は、

「だけど、もうちゃんとお祈りを上げてもらったから、これで大丈夫だといってくださったんですよ」

「……………」

「今夜からは、きっと安眠できるといったたんですがね」

「今夜どころじゃない、昼間からこんなふうじゃ……」

と私は不服だったし、母もせっかく喜んで帰ってきたのに、なんにもならなかったのかと、しよげてしまった。私は、

「死霊のたたりなんてあるもんか。みんながそう考えるから、なおさらいけないんだ」

母には気の毒だったが、私は八つ当たりしたものだから、

「あとから叔父さんも見えるといっていたから、もう一度よく相談してみよう」

と、母は言いわけらしく言っていた。

そんなところへ叔父がやってきた。妹も、一眠りしたので、いくらか元氣を取り戻したようだった。叔父は、

「美枝子、もう大丈夫だよ。今夜からは、ゆっくり眠れるよ」

と、これはキッパリと言った。妹も、はじめは、「もうダメよ」などと言っていたが、叔父のことばが、あんまり真剣で、自信に満ちていたので、つい、「どうして？」と聞き直した。

すると叔父は、きょう占ってもらったことを、すっかり話してきかせた。

「そういうわけで、美枝子、普門さんは、その死霊も、もうこれでお前からは離れた、といっていた。私たちの前ですっかり祈禱してくれたんだし、あの人のいうことは間違いないう。なんでもお前は、どこかで、よいなものを見たに違いない、といっていた。そんな覚えはないかな」

そう聞くと妹も、急に緊張して、目を輝かせて、

「あたしも、なんだかそういう気がしている

んです。兄さんは、むやみに神経だということけれど、決してそんなことはないと思うわ」と言った。

だが、何か見たということについては、知らない、あるいは見たのかもしれないが思い出せないといっていた。

「なんでも死霊のたたりというのは、全然関係のない人にでもたたることがあるといっていましたわ。お前のように、たたられるようなことはしなくとも、その人の口を借りて、世間に知らせてもらいたいときに、よくそういうことがあるんだとさ。思い当たることはないかい？」

と、母もいっしょに言いだした。

「坊さんのいうには、年よりだという話なんだがね」

「そうそう、おじいさんだって、言っていましたね」

叔父と母が口をそろえていうので、妹はよけい恐怖を感じたらしく、

「いやだあ」

と、母にしがみついてしまった。

死霊のことば

「ど、どうしたの、美枝子、しっかりおし」

母は、妹を抱きしめながら言った。

妹は、母に抱かれたまま目を据えてジーンと空間を見つめ、何か言いたそうに、しきりに唇をふるわせている。

叔父も私も、カタズをのんで妹の顔を見守った。いつもの妹とは、まるで顔つきが違っていた。

「ワシは……」

そのとき、妹の口から、別人のようにしわがれた声もれた。

「え、どうしたの？ 何か言いたいことがあったら早くおい」

母は、おろおろして、妹の顔をのぞきこんだ。妹は、ふたたびことばをつづけた。

「ワシは……北海道で漁師をしていました渡辺作蔵と申すもので、この冬、海へ漁に出て死にましたが、縁戚とてない一人者ですから誰一人供養（くよう）をしてくれる者もありません。そればかりが、ただ一つの心残りでございます。で、縁もゆかりもない、こちらのお嬢さんに乗り移ってお願いに上がったわけですが、どうぞ、ワシの先祖代々の墓が横浜市S町の多聞院にございますから、恐れ入りますが、ワシの戒名をつけて、お経の一つなりと上げていただきとうございます。どうぞお願いいた

します。それさえかなえていただけたら、安心して成仏（じやうぶつ）いたします。こちらのお嬢さんに憑（つ）いて大変お苦（くる）しめしたことは、なんとも申しわけございません、お詫（わ）びいたします。では、くれぐれもお願（ねが）いいたします」

と言（い）い終わ（お）ったかと思うと、妹は全身の力が抜（ぬ）けてしまったようにグッタリと母の腕（うで）にもたれた。その顔は、まっさおで、ひたいにビッシヨリ汗（あせ）をかいて、ハアハアとあえいでいる。

あまりに意外なことばと、普門（ふもん）さんの予言（よげん）がピタリと的中（ちゆうちゆう）したことに、みんなは、しばらく顔を見合（あ）わせて、ことばもなかった。

妹は、それから、さも心地（こころ）よさそうにグツスリと熟睡（じくすい）に陥（お）った。一同（いどう）も、これでどうやら不安（ふあん）も一掃（いそう）されたと、やっと明るい顔（かお）にかえたが、たった今（いま）、目の前（まへ）で見（み）せつけられた神秘（しんぴ）を思うと、薄気味悪（うすきみわる）くてならなかった。

すると、翌日（あした）から、妹は、不思議（ふしぎ）にも、ケロリとなおってしまった。

そこで私たちは、S町の多聞院（たもんいん）へ行（い）って、渡辺作蔵（わたりへさくざう）という人の戒名（かいな）をつけてもらい、ねんごろに回向（えんきやう）してもらったことはいまでもない。

殺した女の怨霊に招かれた男

古川 高志

全裸の女の死体

東京都太田区の「大森銀座」のはずれにあるヤマダ薬局では、さっきから、しきりに電話のベルが鳴っていたが、だれもいないのか、いっこうに出る様子がなかった。そこで、二階の下宿人吉田音吉さんが、しぶしぶ梯子段を降りて居間を素通りし、店先の陳列ダナの上に載っている電話器に近づいた。店は、居間から一段さがって板の間になっていた。

ところが、調剤室の脇を通るとき、フト見るともなしに棚に並べられた薬瓶に囲まれた薄暗いその内部を見て、思わず棒立ちになった。店主の山田美津子さん（三六）が、全裸のあられもない姿で、冷たい床の上に殺されていたからである。

そうになると、吉田さんは、電話どころでなかった。真っ青になった吉田さんは、ガタガタ震えながら、早速、隣家の古道具屋に駆け込んだ。

「おかみさんが殺されている！」

古道具屋の主人が一一〇番に電話をかけるのと、すぐパトカーとともに、大森署から係員が急行してきた。

検視の結果、死因は、ネクタイを利用した絞殺と断定され、硬直状態などから推して、死後十時間を経過しているものと思われた。

したがって、犯行は、その前夜とわかり、直ちに同署に設けられた捜査本部では、二階の下宿人で、しかも死体発見者でもある吉田さんや、付近の住人たちからの聞き込みで、犯人は、前夜、美津子さん方を訪れてケンカをしていた以前の同居人佐光弘（二六）と割り

出し、都内各署に、有力容疑者として緊急手配した。

殺された美津子さんは、七年ほど前から、同所に、薬局を開き、夫の邦次氏（当時五六）は、二階で歯科医院を開業、ともに相当繁盛していた。ところが、邦次氏が結核で倒れてからは、美津子さんが、遺児の博之さんを抱え、独力で薬局を経営、二階に三組の下宿人を置いて生活の一助にしていた。

美津子さんと邦次氏が結ばれたのは、戦時中、疎開先でのことで、当時、邦次氏には、某医院の令嬢だった夫人がいた。が、その病死後、美津子さんは、公然と邦次氏と一緒に、先夫人の残した長女の泰子さん（二三）と、邦次氏とのあいだにできた一粒種の博之さんを入れて、四人の家族だった。しかし、長女の泰子さんは、高校を卒業後、付近の運



送店に勤め、同じ職場で働く人と結婚して、別に世帯を持った。

三十三年の十月ごろ、美津子さんは、店が忙しいので、職業安定所に女中の求人申し込みをしたさい、これに應對したのが、有力容疑者の佐光である。佐光は、酒、タバコのもまず、どちらかといえば内攻的な性格の持ち主で、仲間の慰安旅行にも参加しないといった男だったが、仕事上、外来者の面接などは、親切だという評判だった。これは一面からいえば、女性的で、陰気なうえ、気が弱くて、さっぱりしない、という見方をされた。

キツカケの日

ある日の夕方、佐光は退所後、町をぶらぶら歩いているうち、ふと気がつくと、ヤマダ薬局の前にきていた。

「ここだな、いつか女中を頼みにきた家は」と思って店のなかをみると、店には美津子さんだけで、佐光の姿をみて、

「あら！ 先日はどうも。よろしかったら、ちょっとお寄りください」

店先に駆け出してきた。

「はあ……」

「さあ、いいじゃありませんか。どうぞ、お

上がりください。いま、お茶でもいれますわ」

こうしているうちにも、何人かの客が入ってきては、出ていった。

「場所もいいんでしょうが、ずいぶん忙しいですね」

「おかげさまでね。ところで、このあいだお願いした女中さん、いましたか？」

「それが、なかなか適当なのがないので、困ります。必ず捜しますから、もう少し待ってください」

「お願いします。でも、いまどき、女中にもなろうという人がいますかしら？」

「そこなんですけど、大勢のなかにはいないわけではありません。気ながに捜すことですよ」

「そうでしょうねえ。なるべく早くお願いします。店の手伝いもできる、いい人をね」

「承知しました。これは、私のことなんです。この近くに、どこか、下宿か、アパートといったものはないでしょうか。役所の近くに越してきたいので……」

佐光がこういうと、美津子さんは、ちょっと考えていたが、

「うちでも二階を貸しているんですが、こと

によると、近く引っ越すらしいんです。二週間ばかりたったなら、また寄ってみてくださいいな」

相手は堅い公務員だし、真面目そうだから、格好の下宿人だと、美津子さんは考えた。

年上の女の欲情

それから一カ月ぐらいたって、ヤマダ薬局の二階に、佐光が移ってきた。美津子さんは、昼間は店に出て、客や、問屋、売り込みのセールス・マンと、甲斐甲斐しく折衝し、夜は売り上げの計算と記帳で忙しかった。

そして、やっと身体が空いてホッとすると、二階の佐光をよんでお茶を入れ、菓子など出して、遅くまで話し込んだ。佐光は、月末の清算のときなど、ソロバンをはじいてきちょうめんに帳簿をつけてくれたし、独身者には珍しいほど生真面目で、一人っ子の博之ちゃんの面倒も、よく気がついてみてくれたからである。

そんなことから、美津子さんの、佐光を見る目が次第に変わっていた。結婚の対象としてみるようになったのだ。死んだ夫は、十歳も年上だったが、この佐光は、十歳年下である。この節では、年上の女が年下の男と結婚

することが流行っているからでもあった。

こうしたことから急に、美津子さんは目立った化粧するようになり、薬局の休みの日など、佐光と連れ立って歩いている姿を、近所の人がよく見かけた。美津子さんは、小柄な小肥りのタイプだったが、その丸顔には、愛嬌があった。佐光は背が高く、ふつうの顔立ちで、どちらかといえば、暗い感じの男だった。

この二人が、どちらからどう誘いをかけたか、割れない仲となったことは、いうまでもない。一方は、中年の爛熟しきった肉体、他方は二十六歳の男性で、どちらもいまが盛り年のごろ。そのうえ佐光としてみれば、公務員として、安い俸給でしばられているより、収入の多い薬局の主人になれば生活も安定するというわけ。そんなこんなで、この三十女と二十男は、色と欲にからまって、日一日とその愛欲は昂進していった。

こうしたことから、はじめの二、三カ月は、美津子さんも新婚気分にあっただけで、男の身の回りの世話などをし、うれしい夜ごとの愛撫に身を焦がしていた。そのため美津子さんは、男の心をとらえようとして、桃色や赤いパンティーなどをはいて佐光につくしてい

た。それに答えるように、そのころ男のほう
は、甘い読み物を本屋から買い求めて、女の
心理とくに性愛の秘密を知ろうとしていた。

バレた家庭の秘密

三十女の愛欲は、若い娘のロマンチックな
のと違って、多分に狡知が隠されている。美
津子が佐光を信じ切っているあいだは、二人
の仲は円満だったが、いったん愛のキズナに
亀裂が生じると、その破れ口は、加速度的に
どんどん広がっていった。

ある夜のことだった。美津子さんは、いつ
になくけわしい顔をして佐光にいった。

「あんた、奥さんがあるんじゃないの。そう
でしょう。だったら私の立ち場はナニ？ オ
メカケ、二号さんなの？」

これには、さすがの佐光もびっくりして、
やっと言葉を吐いた。

「いろんな事情があるんです」

「いろんな事情がね。あんたは、二十八年の
五月から三十一年の九月まで芝園橋に勤めて
いたわけね。そして、そこで職場結婚して大
森に転勤したんでしょ。それなのに……」

美津子にこういわれると、佐光は、もう二
の句がつけなかった。そこでぐっと黙ってい

ると、美津子はますます激昂して、

「あんたは私をだましたんだわ。ひとり者の
ような顔をして、ずうずうしいったらありや
しない」

美津子は、たとえ年下の男でも、ちゃんと
結婚したら、月給も家に入れてくれるに違
ない、そうしたら、それだけ、家の経済が楽
になると思っていたのは、間違いだった。佐
光は、少しも金を入れようとしないうばかり
か、それを催促すると、なんだかんだとい
のがれる。だが、三十女の打算は、とうてい
そんなものを逃がすはずがない。そのため佐
光は、ノイローゼ気味となり、役所も勢い欠
勤勝ちとなった。

佐光の仕事は、一日に三、四十人からの外
来者を扱うところから、それを休めば、その
負担は当然、同僚のうえにかかっていく。そ
のため、役所での佐光の評判は自然と悪くな
っていった。そこで、責任者である上司は、
佐光を呼んで何度か訓戒したが、いっこうき
きめはなかった。そこへ持ってきて、同僚間
に美津子さんのことが噂にのぼり、佐光は
役所にいづらくなった。

そうした最中の三十三年四月のある日、佐
光は、美津子さんと大喧嘩をして、そこを出

ると、目黒のほうに引っ越していった。それ
とほとんど同時の五月一日付けで、役所のほ
うには退職願いを出した。

殺す気じゃなかった

佐光は、福岡県筑後市に生まれ、二十六年
三月、県立明善高校を卒業、東京銀行久留米
支店に勤めたが、二十八年に上京、その年の
五月一日、芝園橋職安に奉職した。両親を早
く失い、ただ一人の肉身である姉が東京にい
たけれど、あまり寄りつかなかった。

大森職安を退職後は、百万、就職に奔走
し、その間、何度かヤマダ薬局をのぞいて美
津子さんと大声でいい争っていた。就職は、
いくらあせっても覚束なかった。失恋、それ
に加わえての失業に、佐光は、日夜さいなま
れ、いらいらするだけだった。退職金がなく
なるときが、佐光の破滅のときだった。

もちろん、いかに佐光が困ろうが、美津子
さんは、失業男を家に引き入れて食わしてい
くほど寛大ではなかった。

もっとも、近所の噂によると、美津子さん
は、町会費はもとより同業者の出費もどここ
おり勝ちで、おおよそ、つき合いには気をかけ
なかったことからでもわかる。中年女のしっ

かり者のガメツさでもあった。

六月に入ったある夜、毎度のことながら、ヤマダ薬局で大喧嘩があった。その翌朝、隣家の主婦が美津子さんと顔を合わせると、

「ゆうべもあの男がきましてね、しつこくいるんなことをいうんですよ。ほんとに、あきれちゃいますわ。へたすると私、殺されるかも知れないので、警察に保護をお願いしましたの」

と、聞きもしないのに、いった。

凶行の夜も、佐光は、美津子さんの赤いパンティーが忘れられず、ヤマダ薬局を訪れて、美津子さんを口説いた。

「頭を下げる。もう一度、考え直してくれ。」

オレは妻子まで捨てたんだ」

「駄目よ、いくら言っても無駄よ。あんたという人には、愛想がつきているんだから。お帰りなさい。さ、帰ってよ」

美津子さんのその素っ気ない言葉を聞くと、佐光は、これ以上いっても無駄だとさと、すっと立ち上がると、いきなり美津子さんに襲いかかった。

「あっ！ だれか来てえッ」

すでに心のバランスを失った佐光は、悪鬼のように目をひんむいて美津子さんを押し倒

すと、両手で咽喉を力いっぱい絞めつけた。

そのあと、さらに自分のネクタイをほどいて、美津子さんの首に一卷きし、ぐっと強く絞めつけた。女の身体は、動かなかった。

佐光は、それを、しばらくじっとみつめていたが、次の瞬間、女の身体を抱いて調剤室に運んでいった。女はまだ生きているようで、生暖かった。

佐光は、憎いけれど、ほんとには殺したくなかった。そう思うと、急に罪の意識が湧きあがった。それを打ち消すように、

「美津子、オレも死ぬから、堪忍してくれ」というと同時に、狂気のように死体にのしかかって、くるおしく愛撫し続けた。

佐光に、荒々しく服を剥ぎ取られた美津子さんは、シユミーズまでむし取られて、赤いパンティーがずり下げられ、とても死んでいるとは思えなかった。佐光は、それに向かつて、かつて楽しく接触したときと同じように、いつまでも愛撫してやまなかった。だが、この無言の女は、数日前と違って、激しい抵抗をみせなかった。

佐光は、その反応のない女体に突如、恐怖感をおぼえ、反射的に飛びのいた。そうして女の両手を胸の上に組み、顔にタオルをかぶ

せた。それから表のガラス戸を静かにあけ、あたりの様子をうかがい、外に出た。

手招きする亡霊

佐光は、あてもなく町を歩いていった。そして、ちょうど通りかかったタクシーに手をあげて呼びとめると、そのなかに納まった。「代々木にやってくれ」

車は、代々木に向かって走りだした。そのときである。運転手が、突然、

「旦那、奥さん、どこか具合が悪いんじゃないですか」といった。

「ええっ！」

「大丈夫ですか、医者を起こしましょうか」

「ボクはなんでもないよ」

「奥さんですよ」

「じょうだんじゃない。奥さんなんていないよ。ボクだけだよ」

「おからかいになっちゃいけません。旦那の隣に腰を降ろしていらっしゃるのは……」

「おい、変なこというなよ。ボクの隣に誰もいないじゃないか」

「お酒飲んでらっしゃるんですね」

運転手も、それっきりなんともいわなかつ

たし、佐光も口をきかなかった。それにしても佐光は、身体がガクガクして震えがとまらなかった。これは、代々木について旅館に入ってから同じだった。女中が、「おフトンは一つでよろしいですね」と念を押し、着替えも二タ揃い持ってきたほか、「奥さん、もしご用がございましたら、遠慮なくおよびください」といった。

明らかに美津子さんの亡霊が、ついて離れないのだ、と思った佐光は、心のなかで詫びるとともに、口のなかで念仏を唱えた。

このように亡霊につきまとわれた佐光は、それにおびえながらフトンのなかにもぐると、かねてヤマダ薬局を出るとき持ってきた睡眠薬を枕元の水で一気にあおった。

すると、いままで見えなかった美津子さんが、窓ぎわに立っており、

「口惜しい！」

一瞬、すさまじい表情をしたかと思うと、また、いつもの平穏な顔になって、おいでおいでをした。

「ゆるしてくれ、オレもすぐいく」

佐光が叫ぶと、

「待ってるわ。早く、早くおいで……」
かすんで見える美津子さんがいった。

彼女がビックリするプレゼント

セクシー・ドレス

No.1 ベビードール型

生地…ナイロン透き
通り 色…赤・黒
大・中・小パンティ
付 ¥1900 (¥100)

10円切手封入、
その他下着類等
カタログ送呈



No.3 ミステリー型 生
地…ナイロン透き通り
色…赤・黒 大・中・
小 パンティ付
¥2000 (¥100)



No.2 B.B ストリップ型

生地…ナイロン透き
通り 色…赤・黒
大・中・小パンティ
付 ¥1800 (¥100)



No.4 マンハント型

生地…サテン、ナイロ
ンパンティ付
¥2300 (¥100)
(腰廻、背丈お知らせ
下さい)

東京都杉並区大宮前6の412
ニューフォト社洋品部

「わかった。オレが悪かった」
いつまでたっても、美津子さんは、立っている。十分、二十分、そのうち佐光は、美津子さんの姿が次第にぼやけてきた。だが、「早くおいで、早く……」
いつまでも声は聞き取れた。
佐光が自殺を図ったのを、発見されたのは

それから間もなくだった。
病院に収容されて一命を取りとめた佐光は回復をまって、本部に身柄を移され、取り調べののち送検されたが、そのあいだも、美津子さんの亡霊にさいなまれ通しだった。
いま佐光は、懲役八年の刑に服し、美津子さんの冥福を祈りつづけている。

妖^{よう}異^い変^{へん}化^げ諸国ばなし

千石 仙太郎

化け物、恋女となる

ある侍が、奉公の希望を持って、加賀の国へ来て、町家に宿を借りていた。家の主の娘は、みめ美しく優形であったが、侍は隙間からみそめて、もっぱら心に思って、召し使いの男にそのむねを含めて、いろいろと志の浅くない由を伝えさせると、女もいつか心とけて、たがいに睦まじくなった。

もとより、人目をしのお仲であったから、夜ふけて人が寝静まってから、かの侍のもとへ通ったが、ある夜、女は男の床の中にいながら、また、宿の主のあたりにも彼の女の声がしたのを、召し使いの男はけげんに思い、主のあたりをなんとなく訪れてみると、まちがいもない。あまりの不審さに、侍をかげに

呼んで、こうこうしかじかと、事のしさいをささやけば、いかさま、わが心をたぶらかさんとの変化^{へんげ}のしわざであろうと思い、いつもの手で女を引きよせ、一刀をさせば、あっという声とともに、女の姿は見えなくなってし

五つのロクッ首

九州の菊地氏の侍臣・磯貝平太左衛門武連^{たけつら}は、武勇すぐれた侍であったが、主家が内氏に亡ぼされてから、剃髪して回竜と名のり、仏門に帰依^{きえ}して、諸国行脚を志し、野山に伏してついに甲斐の国へ来た。

日も暮れて、山中の岩の上に寝ていると、

まった。

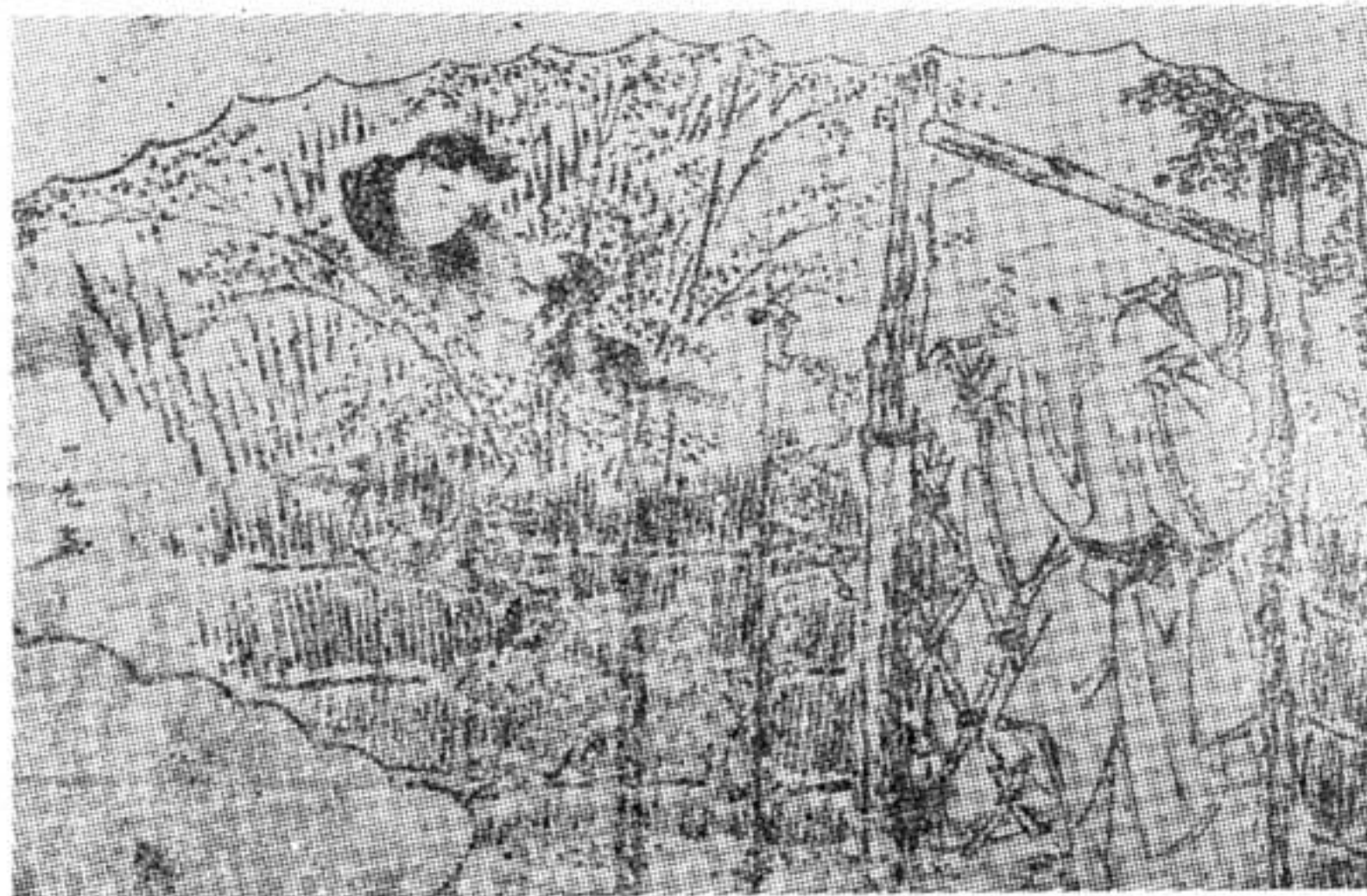
さて、明け方になって血のりをたぐって試してみると、二里ばかりも行って山があり、山また山をわけ入ってみれば、大きな岩穴のなかに、女の姿をした者が死んでいて、日がたつにつれて常の死人のように枯れていった。が、宿の主の娘には、いっこうに、なんの変わったこともなかった。『曾呂利物語』より

通りかかった山樵^{きせり}にさそわれて、オオカミにおそわれるよりはよいだろうと、そのアバラ家に一夜を明かすこととなった。

その山樵の家には、四、五人の男女がいて回竜を見て膝を正す礼儀の厚さを見た彼は、いずれは、もとは名のある人々だったろうと

想像した。

炉の火をつぎながら、話をしているうちに夜もだんだんとふけ、ひとりずつ寢床についていった。回竜は、与えられた部屋に入り、しばらく読経をしていたが、のどの渴きを覚えしたので、茶水を飲もうと、そっと炉辺へ出



てみると、五人の胴体はあるが、いずれも首がない。

回竜はおどろいた。キツネに化かされてい
るのではないかと思ったが、おちついてよく
考えた。

と、思いあたることがあった。唐には、ろ
くろッ首というものがあって、眠ったときに
首が抜けて飛び去るが、胴体を動かして別の
ところにおけば、首はもどって来て、なげき
かなしみ、三度地に落ちて死すとかいうこと
を思い出した。

ために、主人の胴を起こして庭前に投げ
て置き、様子をうかがった。

回竜が、窓からその様子をうかがっている
と、風がはげしくなり、月の光は、きらめい
て、虫の音はさわやかで景色もおもしろく感
じられたので、外に出てみると、垣根の上に
人の声がして、虫を取って食べている五つの
首があった。

やがて、主人の首の言うには、今宵泊まっ
た旅僧は肥ってうまそうだ、もうそろそろ寝
入ったであろう、だれか見とどけて来い。

すると、一個の首が家の中へ飛び込むとす
ぐて出て来て、僧は客間にはいないが、誰が
したのか、主人の体は炉辺にはないとさわぎ

出した。

主人の首はなげき悲しんで、わが身を失っ
た以上、首は胴へは帰戻ない。憎いのはあの
旅僧だと激怒して、おりしも、そこに立って
いた旅僧めがけて、五つの首は、一斉に飛び
かかって来た。

回竜は、すこしもさわがず、手ごろの樹木
を引きぬき、打ちふるって、前後左右をなぎ
回る。

やがて、主人の首が地に落ちると、もはや
主人の命もこれまでと、ほかの者たちは、自
分の胴体にもどり、山の奥に逃げこんでいっ
た。

僧も、もはやここにいるにはおよばない
と、旅姿をととのえて出かけようとすると、
主の首が飛んで来て、貴様のためにオレは本
体にもどることが出来ない、貴様の首を食い
切ってやるぞ、と、とびかかってきた。

回竜は杖で、とびかかってくる首をうちは
らいうちはらいしているうちに、主の首は、
回竜のそでにくいいたままはなれず、その
まま死んでしまった。

回竜は不敵にも、そでに首をつけたまま、
遍路の土産なりと言って、信州の回国につい
た。

『怪物輿論』より

むらさき女

筑前の国袖の湊に、伊織という武士があった。表向きは武士でも、内証は出家心で、松柏の深山のようなところに離室を造って、明け暮れ歌道に凝っていた。時は冬。冷たい風の吹く夜、窓辺にやさしい声で「伊織さま」と名を呼ぶものがあつた。

女の来るところではないので、不思議に思つて様子を見ると、若い女が紫づくめの着物を着、さばき髪を直ン中で金紙で結び、その美しいこと、たとえようがない。

これを見て伊織は、年月の心がけを忘れ、夢のようになつてうつつをぬかした。この女は袖から内裏羽子板を出して、ひとり羽根をついたから、それは嫁突きかと問うと、男もまたぬ女を嫁とは人聞きが悪い、といつて、くぐり戸を押し明けて駆け込んで、だれでもさわつたらつめるからと、しどけない寝姿となり、みるまに自然と後ろ結びの帯とけて、紅の腰巻きがほのかにみえ、にっこりして、枕というものが欲しいこと、それがなければ情け知る人のヒザが借りたいという。

あたりに見る人もないし、いま鳴る鐘は九

つゆえ、夜をおそくだれがたずねる人もないだろうと思ひ、伊織もとうとう我慢ができなくなり、身もだえて、女にいかなる御方かともたずねず若盛りの思い出の限りをつくし、あけ方の別れをおしんで、女は出て行つた。

まぼろしのように悲しく、次の夜を待ちかねて、ひとにも語らず、契りをこめて、まだ二十日もたたないのに、自分ではそれとわからないが、次第にやせていくのを、心やすい医者に見てもつたところ、腎虚とわかり、「平常身堅い御方と思つたに、さては女があつたのですか。ありのままに話してごらんなさい」という。はじめは、そのようなことはありませんといったが、「いやいや、命のほども迫っているのに、別して懇意なわたくしが見殺しにもできないからと思つてゐるのに、面目はないからもう来ません」

といつて医者が出ていこうとするので押し止どめ、ことの始終を話して聞かせた。

医師はしばらく考えていたが、

「これこそ、世に伝えた紫女であろう。これに見込まれるのは因果である。人の血を吸い、一命を取られた例が多い。そうそうにこの女を切つて捨てたまえ。さもなくば、医養もたよりにはなりますまい」

とすすめたので、伊織もおどろき、ああ恐ろしいことであつた、今宵こそは打ち止めようと油断なく待つてゐるところへ、袖を顔にうずめて、

「このほどよりのお情けにかえ、われを切らんとのお志恨めしや」

と近寄るを抜き打ちに切りかかると、そのまま逃げ出したので、追つていくと、立花山の本深き洞穴に入った。

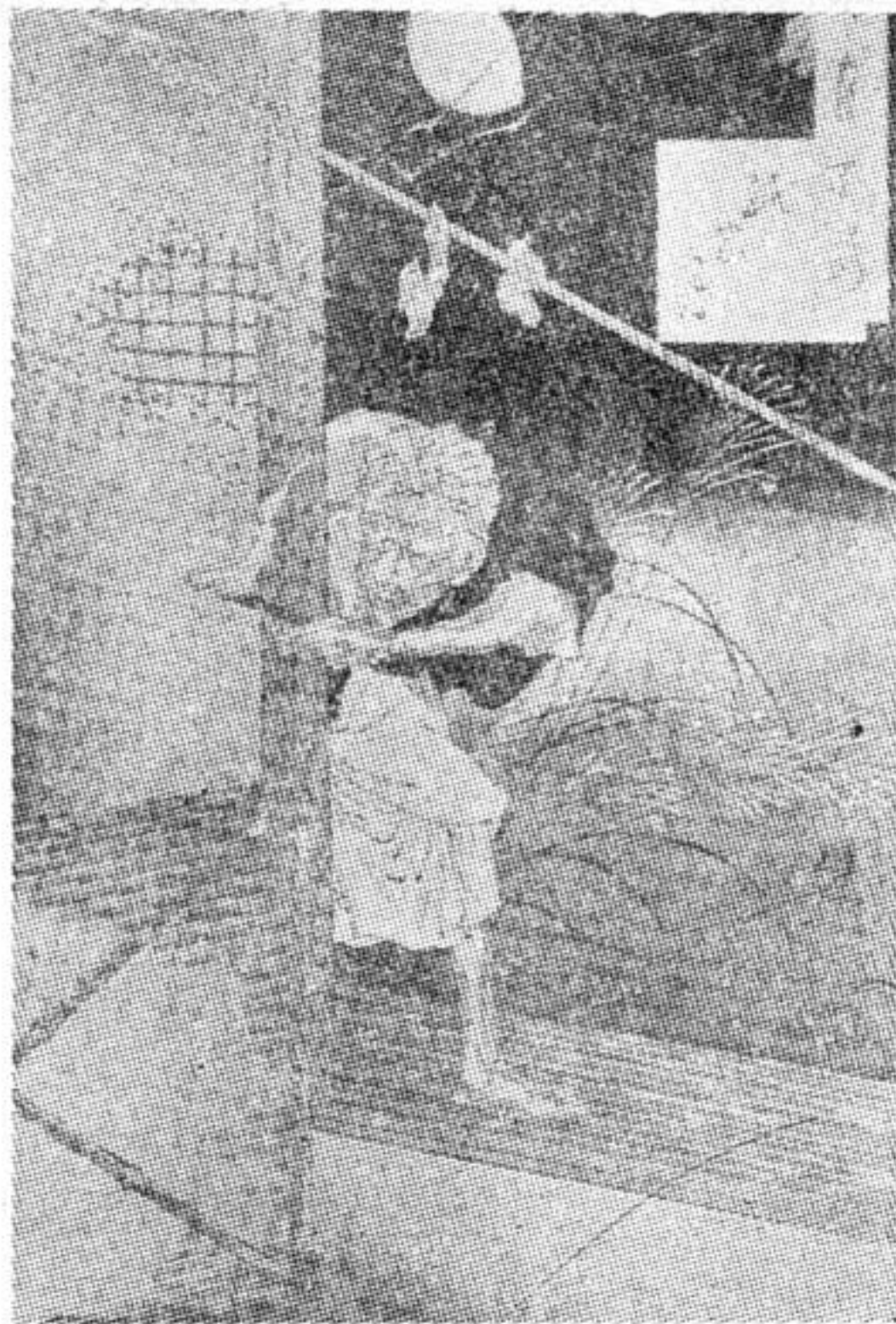
その後も紫女は心を残して、ときどき浅ましい姿を見せたので、道心者を集めて弔つたという。

(『西鶴諸国ばなし』より)

安達が原の鬼婆

平安朝時代の初め、奥州に行く道筋に、岩窟でできた小屋があつた。夜道に迷つた旅人

が、この安達が原の一つ家に泊まると、主である老婆のために、殺害されてしまつたり、



金品を奪われるのはおろか、妊婦は腹をさかれて胎児を取られるなど、言葉では表わせなほどの残酷なめにあったということが伝えられている。

都で、陸奥の安達が原に鬼が住んでいたというウワサがあったのは、ここの老婆のことである。

聖武天皇の御代に、東光坊阿闍利^{あじかり}という名僧が、行きくれてここに泊まり、秋の夜長に、炬の火を囲んで仏道の話をしていると、さすがの鬼婆も仏心を起こして、過去の罪を悔いはじめてきた。

夜のふけるままに、たき火がなくなると、山へ拾いにいってくるから、そのあいだ、そこにじっとしていてくれ、絶対に聞^きはのぞかないでくれとくり返しいい置いて、暗の外へ出ていった。

さすがの名僧も、みるな、みるなといわれると、人並みに、いっそう見たくなるもので、そっとフスマをあけてみると！

人の死骸が数知れぬほどつんであり、膿血流れ、ものすごい悪臭に鼻をさかれ、まさにこの世の地獄である。

阿闍利はおどろいて、これは鬼の住み家であつたのかと、あわてて逃げ出した。

と、後ろから鬼婆がおって来て、あのなかを見たな、ようし逃がすものか、待て待て、と恐ろしい声で、ところ知った暗路を追いかけて来た。

阿闍利もこれまでとかんねんして、持っていた如意輪観音菩薩に向かって、秘密の呪文を三べん唱えて、ついに祈り伏せてしまっ

た。

さすが、ものすごかった鬼婆も、仏縁を得て、浅ましやわが姿と、しおしお夜嵐の音に失せてしまった。

以上が伝説だが、いまでも、東北本線を二本松駅で下りて、阿武隈川の東岸が、昔の安達が原である。

橋を渡ってすぐ左手の大杉を目あてして行くと、その下に塚があつて、これは鬼婆を埋めた黒塚である。

黒塚にはコケむした碑があり、残酷な伝説を生んだ発頭である有名な歌

「みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか」

が刻んである。

黒塚から二、三分で、奇跡を現わして阿闍利が助けられた真弓山観音寺があり、山門をくぐった左側に、鬼婆の住居だったという岩窟があつて、数々の巨岩の累積したのが伝説をもっともらしくしている。

そこには、生肝を入れたといわれる素焼のカメ、妊婦の腹をさいたという出刃包丁、鬼婆が人肉を煮たというナベ、東光坊の大刀、鬼婆を黒塚にうめたクワ先、出刃洗いの池などがある。

縁の下でタヌキと同棲した女中

寛政七年ごろの話である。

小倉侯の神田明神下の中屋敷に、女隠居が住んでいたが、その屋敷の召使いの女中に、卯乃^{うの}というのがいた。その女中がどうしたところか、八月ごろから行方不明となつて、いろいろとさがしてみたが、かくれた場所がわからなかった。

そのうち秋も過ぎて、十一月の初めごろ、屋敷の者が庭を歩いていると、長局^{ながつぼね}の縁の下から手を出して、貝殻で水をすくって飲んで、いる者を見かけたので、

「それ、怪しい奴ッ」

とばかり駆けつけてみると、その怪しい者は、縁の奥深く逃げ込んでしまった。

そこで、すぐさま、その由に係りの役人に知らせたので、さっそく下男^{しもやめ}の者たちを中へ入れてさがさせると、縁の下の奥に怪しい者がいたので、引き出してみると、それは八月ごろから行方不明になっていた女中の卯乃であった。

みるかげもないあわれな姿で、髪は乱れ、やせおとろえているのであった。

「いったい、どうしたのだ？」

と、一同がたずねると、

「若い男三人と一緒に暮らしていましたが、毎日、面白い楽しいことばかりでした。でも、その一人は、少し気むずかしいので困ったこともありました。食べ物は、かわるがわる、いろいろなご馳走を持って来てくれましたね、毎日おいしいものばかりを食べ、なんの不自由もありませんでした」

という意味の話であつたが、ほとんど魂のぬけた白痴のようになっていて、言葉もはっきりとはしゃべれなかった。だから、卯乃の話も、ようやく、その意味を聞きとったくらいであつた。

この中屋敷には、昔からタヌキがたくさん住んでいたもので、以前にも、こうしたことがたびたびあったという。

卯乃も、タヌキに見入られて、いつのまにかバカされ、縁の下に引き込まれて、同棲していたものであったらしい。

その後になつて思い合わせたことであるが、卯乃が行方不明になつた八月以来、屋敷で神仏へ供えた物や、貯えておく食べ物などが、自然に紛失するのを不思議がったが、それは、タヌキが盗んで行つて、卯乃に食べさせていたものであろうということになった。

なお、卯乃の親元というのは、神田辺で小酒屋を営んでいたもので、さっそく実家へ知らせ、当人を引き取らせたが、間もなく死んでしまったという知らせを受けた。

〔梅翁随筆〕より

古ダヌキ、遊女買いの失敗

花の盛りに人の心の浮き立っていた文化十一年^{げんい}弥生のころ、新吉原、さの松屋の通い遊女ナニガシのところへ、そのころ、毎日毎日つづけて通つて来る客があつた。その客がある夜、女の部屋でグスリ寝入っていたとき、

その枕元の屏風の外で、新造^{しんぞう}や禿^{かむろ}たちが寄り合つてムダ話に花を咲かせているうち、なにかおもしろい話があつたか、思わず皆がワツと笑いながら騒ぎ立てた。

不意に起こつた女たちの笑いの声とさわぎ

に、寝入っていた客がおどろいてとまどいしたか、急にふとんをはねのけて飛び起きると、屏風の外へおどり出した。

それを見て、さらにおどいたのは、そのお客より、女たちで、

「キヤーツ」

という悲鳴をあげて逃げ出した。

それもそのはず、屏風の外へ飛び出したのは、人間のお客ではなく、大きな古ダヌキであつたからである。

古ダヌキ先生も、花の春に浮き立って、人間の姿に化けて郭へ遊びに来たのであろうが、寝入ったところを女たちにさわぎおどろかされ、われを忘れて正体を現わしてしまつたわけであらう。

さて、女たちの悲鳴を聞いて駆けつけた男衆たちが、それとばかり追い回して、追いつめ追いつめして捕えようとしたが、連子窓から飛び出して、どこへともなく逃げ去ってしまった。

それを聞いた帳場でもおどろいて、そのタヌキの客が支払った揚げ代金をさっそくしらべて見たが、それはみな真実の金で、木の葉や紙でなかったことを、さらに不思議がったり喜んだりしたという。

人間の顔をした仔犬

文化七年六月七日、神田田所町の紺屋の裏手で、一匹の牝犬が子を生んだ。三四ほどの仔犬のうち、一匹は、その顔が人間にそっくりであるというので、大評判になった。

それをいち早く香見師が聞き込んで、さっそく、その人面の仔犬をつれて行って東両

国で見世物に出したところ、大変な人気で、毎日押すな押すなの大盛況であつた。木戸銭は一人前十二文ずつ取って見せたという。

これは「街談文々集」にある話であるが、この筆者豊芥子氏は、当時、この見世物を親しく見たということだ、

「予も見世物せし時、母犬乳を飲ませいたりしその顔の様子、目より鼻筋の通りしところ人間のように見えたり。この犬、ほどなく死して、三、四日は、線香を燃して見せたり」

——時はちょうど六月十五日にあたり、本所回向院に、京都嵯峨のお釈迦様の開帳があり、参詣の人が多かったさいであるから、わずかばかりのあいだではあつたが、この見世物を出した香具師は、その人面犬のために、少なからぬ利益を得たということである。

当時、この人面犬は、何人かの獣姦による結果と信じられていたらしく、豊芥子氏も、その記事の最後に、
「瘡毒の強い者は、犬を犯し候わば、その犬に瘡毒うつるよし、この人面犬も、かかる業にてなきや」と書いている。

百万人のランジスター

ラジオ・電蓄・テレビ

石川保著

150 円

四つ球からスリー・クッション

撞球入門

柱マサ子著

(増補新版) 150 円

一年中の庭づくり

草花の作り方

秋田実彦著

200 円

お申込は、「東京都千代田区神田神保町1の67
星文館(振替東京4801番)」へ振替か書留めで

亡霊に復讐された男女

志 乃 田 藤 美

行灯あんどんのかげの女

お駒は、ふと目をさました。そんな場合によくある、痴漢に襲われるような不快な気持ちではない。なにか薄気味の悪いものを背すじに感じたのである。むしむしする暑さも、子の刻ねも九ツ半どき（午前一時）に近いだけに、ひんやりとした夜気が蚊帳を通し、お駒の汗ばんだ肌を冷やす。

そばでは林造が、いぎたなく寝入っている。

お駒は薄目をあけて、そっと、あたりを見回した。

と、誰やら、そのへんにいる様子。

黒い影である。男のようでもあり、また女のようにもある。

ハッとしたお駒は、襟を押える、絹夜具の

上に起き直り、

「誰だえ？」

気丈夫なお駒は、その声を掛け、屏風の陰にうずくまっている黒い影を、キッと見据えた。

「……………」

相手は無言である。

が、今度は、はっきり人の気配を感じた。

ス、ススス、音もなく影が屏風の内側に消えるように隠れた。

お駒は、蚊帳の裾をはしよると、絹行燈きんあんどんに

灯を点じた。少し丁字ちやうじが溜ためっているせいか、ぼうーっと薄暗い光を放った。

お駒が再度、二枚折りの屏風に視線を向けた時である。

「あッ、お、お前は……………」

ワナワナと唇を震わせたお駒は、畳を爪で

搔きむしるように後退あとすきりした。それもそのはず、トラの絵を描いた屏風の上には、黒髪を乱した蒼白な女の顔が、お駒の恐怖におののく姿を見詰め、ニタニタと笑っていたのだった。

「ち、畜生、あんた、お、おきてよ。お京が化けて出たンだよ」

お駒は、蚊帳にはい込むと、林造をゆさぶり起こした。

「な、ナンでえ。ちッ、眠いの起こしやがって…………今夜は、もう勘弁してくれよ。いくら、オレが好きだからって、そうそうお前の要求に応じていようもンなら、第一、オレの体が……………」

林造が不服そうに床の上に起き上がり、どっかり胡座あぐらをかいた。

「お前さん、そんなンじゃないンだよ。出た



利

ンだよ、お京が……」

「けッ、お前、寝ぼけているンじゃねえか？ 死ンだ奴が化けて出るんなンて、そんな馬鹿なコトがあるもンか」

林造が舌打ちをした時である。行燈がふッと燃え上がった。

と思うと、風もないのに、ゆらゆらっと燈芯がゆれ、スウーッと吸いこまれるように灯が消えた。

「ほら、あんた、あ、あそこにお京が！」

お駒が、林造の背に嚙りつくようにして、屏風を指さした。

そこには――。

「うむ、迷いおったな！」

がばっと、林造は蚊帳をハネのけるなり、ギリリ長脇差しを抜き、屏風に突き刺した。

ブスリ、鈍い音をたてて、脇差しが屏風を通した。

が、一瞬、黒い影はフワリ、身をひるがえすと、行燈の脇に立っていた。

「うぬ、お京、まだ冥土に行けンとみえるな。ふッふッふッ、迷ったところで、どうにもなるめえ、あっさり成仏するンだ！」

キラリ、林造の一刀が横殴りにお京の亡霊めがけて切りつけた。

バサッ、行燈の上部が切り裂かれ、その振動で灯がゆらいだ。

「ヒヒヒ……ヒ、よくも、わたしを……」

お京は、身軽な動作で林造の刃をかわしながら、嘲笑するように、右に左に、フワリ、フワリと跳躍した。

「うぬ、この化け物め！」

林造は無意味に脇差しを振り回した。お駒は、夜具にうつ伏せになると、顔を蒲団に埋めていた。

そのお駒の襟がみをそっと撫でたお京の亡霊に、

「ヒエッ！」

お駒がビククリして飛び起きた。

「ヒヒヒヒ……お前も、林造とぐるになり、あたしをこんな姿にして……」

お京の美しい顔には、どす黒い血がこびりつき、顔半分がタダレている。お駒は夢中で林造の足にしっかりと、かじりつくつと、

「あんた、は、早くお京を——」

恐怖の目をお京に向け、朱唇をワナワナとふるわせた。

呪われた男女

それから半刻、^{ほんとき}林造は脇差しを投げ出す

と、肩で荒々しい息を吐きながら、

「お駒、やっぱり夢じゃねえ、お京の奴、オレたちを呪^{のろ}っていやがる。なんだって、しぶてえ阿女^{あな}なんだ」

と、お駒に背を向け、冷や汗を拭かせていた。

「ほんとに気味が悪いっちゃんいわ、ところで、あんた。本当に殺したんだろうね」

「間違えはねえはずだ。グサリ、乳房をえぐったんだから、大の男だっておだぶつき。なにしろ野郎と違い、女ってえ奴は、蛇みてえに執念深えから、始末が悪い。が、そのうちには成仏^{じやうぶつ}するだろうよ」

「それならいいんだがね、これから毎晩こんなンじゃ、ろくろく寝るコトも出来ないからねえ」

お駒が浴衣の胸をつくろいで、チラリ、林造を睨むように見た。

「ふッふッふ、とんだ化け物騒ぎで目が冴えちゃったぜ。ところで、お駒、もう何刻^{なんどき}になるかな」

「そうね、そろそろ八ツ（午前二時）になるンじゃないのかね」

「お駒、冷えてきたぜ、風邪をひいちゃいけねえ。さ、こっちに來な」

林造がお駒の肉づきのよい体に手をかけて引き寄せた。

「あら、お前さん、幽霊が出たばかりじゃないか」

「うッふふふ、だから、あとを楽しもうってえ寸法さ。ほら、お前の肌^めがこんなに冷えてよ、どら、オレが暖めてやるぜ」

林造がお駒の体を抱きながら、夜具に身を埋めようとしたときだ、ゆらゆらゆら、行燈の灯がまたもゆらいだ。

「あれ、あんた、またお京が……」

お駒が林造の胸板に顔を伏せた。

「ケッ、また出たか。だが、もう起きねえぜ、とっくり、そこで見ているがいいぜ。ふッふッふふ、オレの腕に抱かれたコトを呼び起こすがよい、な、お京」

と、林造はニタリ笑いながら、小刻みに身を震わせているお駒の襟を割ると、ふっくらとした乳房を押え、屏風を見据えた。が、お京の影は見え行燈がフッと燃え盛った。

「ふッふッふ、亡霊でも、やはり女、恥ずかしいとみえるな。どら、寝るとするか」

林造が蚊帳をはい出して、ふッ、と行燈を吹き消した。

雨戸から月光が蒼白く漏れてきた。もう夜

明けを告げるのだろう。一番鶏の鳴き声が聞こえた。

幻影にふる白刃

翌朝、お駒と林造が目覚めたのは、日もかんと照りつける五ツ半（午前九時）を過ぎたころである。セミが、暑さを知らせるように庭木で鳴いている。

「あんた、もう一度、隅田川を見ておいでよ。でないと、また今夜、お京の死に神にとつつかれ、ろくろく寝ることもできやしないもン」

お駒は、長火鉢に向かい、煙草をくゆらせている林造を見やり、色っぽくせきたてたのである。

「うン」

「うンじゃないわよ。ね、後生だから、見てきておくれよ。ひょっとすると、あの娘は生きているンじゃないだろうね？」

お駒は、林造から銀煙管（ぎんぎんぐわん）をとり上げ、馴れた手つきで煙草を詰めかえた。

「そんな、ば、馬鹿な」

「まさかと思うけど、昨夜のコトがあるんだからね。ね、行っといでよ、でないと」

「わかったよ。じゃ、行ってくるか」

「そうしておくれよ」

お駒にせがまれた林造は、しぶしぶ座を立つと、その足で向島から浅草へと出掛けた。

林造は、隅田川に沿って歩きながら、視線を川面にそそぎながら歩いた。

（たしか、にこのへんだったと思うが）

ちょうど引き潮どき、水は少なく、黒々とした川底が見えている。林造は立ち止まり、川底を眺めた。今と違って、当時の隅田川は、泥くさいにおいはおろか、水の濁りさえみえなかった。と、林造の視線が、ある一点で停止した。赤い櫓（うし）が目に映ったからである。瞬間、林造の顔が、見る見るうちに、蒼白（そうはく）に変わった。

「けッ、また出やがったか！」

林造が長脇差（ながわきざし）の柄（え）をにぎって後ずさった。櫓は、殺害（ころ）したお京のものである。その赤い櫓が、まるで生きもののよう、いや、お京の断末魔（だんまご）の紅唇（べにくち）から鮮血（せんけつ）をたらしたように、じっと、川面から林造の顔面へ浮き上がってきたのだった。

「うぬ、迷いやがって！」

ギラリ、林造の脇差（わきざし）が鞘（さや）走（は）った。林造は狂人のように、お京の顔をめがけて、斬りつけた。

「うぬ、うぬ！」

そのたびに、お京の姿は、猫のような身軽さで、ヒラリ、ヒラリ体をかわした。

「わ、狂人だ！」

「ほんとだ、おーい、みんな来てみな！」

「うわッ、危ねえ。おい、馬鹿野郎、往来でダンピラを振り回す奴がいるけえ！」

「ハッハッハハ、みてみろ、あのヘッピリ腰を。なんでえ、ありゃあ、役者か。それにしても大根（だいこん）だぜ。ハッハッハハ、とうとうヘタバッちまやがる」

「おい、熊公、水をぶっ掛けてやりな！」

物見高いは江戸の名物。なにしろ、林造が、白刃（はくへん）、長脇差（ながわきざし）を抜いて暴れているんだから、すっかり狂人（きやうじん）あつかいにされ、見物人のなかの一人が、手桶（てぶく）を持ってくるなり、ザブッと、林造の顔面へ水をぶっ掛けた。

「う、うぬ。ぶ、無礼者！」

ハッ（ハッ）とわれにかえた林造、突然、水（みづ）をかけられ、顔に青筋（あせ）を立てて怒った。

「な、なにが、ぶ、無礼（むれい）でえ。無礼（むれい）でえのは、二本（にほん）差（さ）しの使う言葉（ことば）、手前（てまえ）な（な）かがぬかすには勿体（もった）ねえ用語（ようご）さんす」

「ハッハッハハ、そうともよ。やい（やい）気違（きちが）え、まごまごしてると、番所（ばんじょ）へ突き出すぜ！」

黒山のような人だからから、次々と笑声が湧いた。

怒ったのは林造、

「うぬ、馬鹿にしやがって。ぶ、ぶった切つてやる！」

青筋を見る見る太く隆起させるや、脇差しをピューッと振り下ろした。

「やあ、暴れたぞ。」

「おい、気違えに刃物とかいって、危ねえ、逃げるんだ！」

群衆がどっと輪を広げた。

「うぬ、逃げるか！」

林造が喚きながら、白刃をひらめかして、群衆を追い回した。

その夕刻である――。

「あんたっていう人、案外、気が弱いんだね、ホッホッホホ。赤い櫛をみたからって、それがお京の顔に見えるなんて、あんたも、どうかしてるよ」

「けッ、な、なんでえ、そういうお前だって、昨夜はオレの足に噛りつきやがって。ブルブルふるえていやがったくせに」

「ホッホホホ、そりゃあ。あたしは女、お前さんは、男だろう。そのうえ、山形林造とい

えば、ちょっとした江戸の悪党、それを、たかが櫛が幽霊にみえたからって、大道で刀を抜いて笑われるなんて、ああ、あんたも、お京の死に神に憑かれたのね」

お駒が、こういって、ふうーッと吐息をもらした。

「お駒、もうよそうぜ、その話は。それより、こんな晩は、酒で身を浄めることだ、一本つけてくんない」

と林造は、お駒に酒の用意を言いつけたので、お駒が勝手口へと立ち去った。やがて、台所から戻ったお駒は、長火鉢で酒の燗をすると、

「でもね、お京の幽霊が怖くて言うんじゃないけど、考えてみれば、私たちも、むごいことをしたもんだねえ」

酒の酌をしながら、お駒が弱音を吐いたものである。

「な、なんでえ。いまさら悔いたって始まらねえぜ、ふふふふ。お駒、お前、案外……」

「おや、臆病者と言いたいのだろう。そりゃあ、私だって、相手が死人なだから、別にどうとも思っていないんだが、でも、ゆうべのように今夜も――」

とお駒は、そっと隣室に視線を走らせた。

「ハッハッハハ、今晚は出るめえ。いくら幽霊だって、二晩もつづいちゃ、第一、相手がくたびれるてえコトよ。昔から、幽霊とは足がねえんだから、なおさらさ。ま、いいさ、お前も飲みな」

林造は、杯をほすと、お駒に手渡した。お駒が立て膝をしながら杯を受けた。チラリ、緋の長襦袢から白い肌が覗く。酉の刻をすぎただけに、涼風が、二人の汗ばんだ肌を拭うように吹きすぎる。

娘殺し三百両

さて、話は一月前にさかのぼる。

じめじめした梅雨も明け、やがて新盆を前にした七月十日のことであった。

「お駒、いい銭儲けが転がり込んだぜ。人を殺して三百両、それも相手は若え娘。野郎とちがって、女、嬰兒をひねるも同様さ。そこで、お前にも一肌ぬいで貰おうと思つてよ」

表向きは遊び人、という山形林造。こう言つて女房のお駒に、日本橋は室町の呉服商、田島屋善吉の一人娘、お京を暗殺、その刺客料として三百両の謝礼金を貰うことをしゃべりだしたのである。

「へえ。で、頼んだ人は……」

お駒が目を見張った。なにしろ三百両といえば、当時では大金であった。ましてや、林造の稼ぎといえ、博打で儲けるか、さもなくば借金の取り立てに一肌ぬぎ、先方を脅し、そのあがりて飯を食いつないでいたものである。

そんな生活をしてきただけに、お駒は、三百両という大金と聞き、思わず膝を林造のそばに押し進めた。

「それがよ、ほら、お前も知ってるだろう、田島屋とは目と鼻の先の材木問屋、白木屋惣助」

「へえ、白木屋が……白木屋が、なぜ田島屋の娘を——」

白木屋といえ、江戸でも名の通った材木商である。しかも、田島屋とは同じ日本橋室町に店を構えていた。

「ふッふッふ。なんでも、白木屋の話によると、白木屋の息子が、田島屋の娘と出来ちゃったらしいんだ。それも、女のほうは男のタネを宿して四月目らしい」

「へえ、で、なんだね。そこで、店の暖簾に傷がつくので、お前さんの手を借りて、パッサリ……」

「そ、そうなんだよ。さすがは山形屋の女

利



房、お前、いい感をしてるぜ」

林造がニンマリ笑い、渋茶をぐっと飲みほし、さらに言葉を継いだ。

「可哀想だが、殺してくれ、って頼み、その前に、どうせあの世へ行く体、お前さんが食おうと、煮ようと、そこは勝手、テヘヘ……いい娘なんだってよ。色白で、ぽってりとして、だから、お前さんが試食しようと、それは、このオレの勝手、とこうなんだ」

と林造が、ニタリ、好色な笑いを浮かべた時だ。

「ふん、すぐにそうなんだ、お前さんは。あたしというものがあひながら、よ、よくも……」

お駒の柳眉がキリキリと吊り上がり、嫉妬に顔をゆがめた。

「よ、よさねえか、お、お駒！」

襟をしめ上げられた林造、苦しうに顔を紅潮させ、お駒の手を押えた。

「バ、馬鹿な真似をしやがって。な、なんでえ、お前、嫉いてるんだな。ふッふッふふ、ありゃ、白木屋の話じゃねえか、それを、真に受けやがって」

林造は首すじを撫でながら、お駒をたしなめた。

「ふん、白木屋だか、赤木屋だかしらないけど、あたしは嫌だね。娘を殺すのに片棒かつぐなんて、あんたが頼まれたンなら、一人でおやりよ」

お駒が、おいと座を立とうとした。が、
「ハッハッハハ、そりゃ怒る気持ちはわかるぜ。でも、なにも、オレがその娘を手籠めにしたわけじゃねえンだぜ。ただ、白木屋の話を、お前にしただけじゃねえか。お駒、お前だって、そんなコトをまに受ける年じゃねえだろう」

林造は、お駒の手首を握りしめながら、弁解に苦しんだ。

が、結局、

「心配するなってコトよ。いくら室町小町かも知らねえが、相手の娘は腹ボテ、素っ裸になった姿を想像してみろよ。けッ、ヘドが出らあ、そんな不具者みてえな娘っ子より、お前のように、なにもかも知り尽くしてたほうが——」

林造が、ぐいっと、お駒の手を引いた。

よろよろっと、お駒はよろけると、林造の膝の上に崩折れるように、その豊満な尻を据えた。

「ウフフフ、ご免ね。だって、お前さんが……」

……

お駒が甘えるように、林造の手を単衣のうえから押えた。

林造の馴れた手が、お駒の胸の隆起を弱く強く押えていた。

オトリの手紙

それから三日後、ちょうど盆であった。

「もしもし、あの、あなたは、田島屋さんのお嬢さんでしたわね？」

お京が、お花の稽古からの帰途のことだった。こう言って、一人の年増から声をかけられたのである。

「は、はい……」

「そうですか、実は、お嬢さんに、ぜひお会いしたいというお方から頼まれました……」

と、年増女が、懷中から一通の書状をとり出し、お糸の目の前に差し出した。

「まあ、誰方かしら？」

お京が美しい顔を恥じらいに染めながら、書面を裏にかえた。そして、

「まあ、新二郎様から……」

お京の両眸に喜びの色が輝いた。

「そうです。新二郎様から頼まれ、お嬢さんに一目お会いになりたいとのこと、お嬢さ

ん、心配しておりますよ、お腹のお子様のことを——」

ジロリ、年増女の視線が、お京の、ふくらみをみせた腹部へとやきつくように走った。

「えッ、新二郎様が。で、いまどこに？」

お京は、女にすがりつくように、目で訴えた。

「それが、ちょっと遠いんですよ。向島におられるんですよ」

女が気の毒そうに、お京の顔を正視した。

（ふッふッふ、芝居はあせっちゃ駄目、ゆっくり、相手をのんでから）年増女が内心ほくそ笑んだ。その女は、林造の恋女房お駒だったのである。

「向島に新二郎さまが……お願いです。お連れくださいまし」

お京は、女がお駒であることを知らないだけに、ここ一カ月ばかり会っていない新二郎を思うと、恋しい男の姿を求め、お駒に哀願したのである。

「お嬢さんさえ、そのお気持ちなら、私も、陰ながら、お力添えをいたしますよ。じゃ、駕籠を呼びますから」

お駒が手を上げた。

それを待っていたのだろう、一丁の駕籠が、

お駒に近づいてきた。

「さ、お嬢さん、早くお乗りになって」

お駒は、お京を急ぎたてると、駕籠の垂れをハネのけ、お京を駕籠に押し込むように乗せた。

「じゃ、頼みますよ」

お駒が駕籠を見て、ニッと笑った。

「へえ、お引き受けしました。相棒、急ごうぜ！」

ニタリ、駕籠屋二人が、顔を見合わせて笑うと、

「エッ、ホー」

「エッ、ホー」

お京を乗せた駕籠は、日本橋をあとに、小伝馬町を抜け、浅草橋を渡り、向島へと急いだ。

一方、駕籠の中のお京は、女から手渡された書面の封を切った。はやる思いで書状を押し開いた。が、

「あッ！」

お京の紅唇から驚きの悲鳴がもれた。それもそのはず、女から受けとった書面のなかには、文字のない白紙だったのである。お京は、裏をかえして見た。が、そこにも文字は見当たらなかった。

荒縄のワナ

お京の美しい顔から、血の気が引いていった。駕籠の垂れをハネのけようとした。だが、表から紐でもゆわえたのだろう、垂れは開かなかった。お京は慌てた。

「駕籠屋さん、とめて、お降ろしてエ」

顔をゆがめて哀願、叫んでみた。が、駕籠は、お京の叫びにはかまわず、

「エッ、ホー」

「エッ、ホー」

もう暮色に包まれた隅田川縁をのぼり、向島へと矢のように疾走した。そのあとを追うように、もう一つの早駕籠が、二間ほどの間隔をおいて走って行った。お駒を乗せた駕籠である。

「ふッふッふ。お着きだな。たしか、お京さんとか言いなすったな。なにも、そんな顔をしねえでも、いいじゃねえか、うッふッふ。美しい顔をしてるじゃねえか。これじゃ、白木屋の若旦那も惚れ込むわけよ」

駕籠からお京をひきずり出した林造は、お京のみごもった腹部を見つめてニヤリ、ニヤリと薄気味の悪い笑みを浮かべながら、ジリ

ジリッと近づいていった。

「あッ、お家に帰してエ……新二郎さまは、ど、どこにいますンです」

お京が襟を押えながら、林造の淫らな視線から逃がれようと、後ずさった。

「うッふふふ、新二郎が恋しいか？ 会いたいか？ え、そんなに新二郎が好きか？

え、姉ちゃん、このオレより、その新二郎という奴の肌が恋しいか……」

林造が下卑た笑いと言葉を発しながら、ジワリ、ジワリ、とお京に近づいた。

「あッ、帰してエ」

お京は入り口めがけて走り出そうとしたか、それより早く林造の猿轡が延びていた。

「あ、ああ……」

お京は襟がみを掴まれ、のけ反った。夏物の着物が乱れ、白い透くような素足が痛々しく畳を蹴った。

「ふッふッふふ、おとなしくするンだ。どう騒いでも、誰も助けには来ない、野中の一軒家。泣け叫べ、喚んだ。ヒッヒッヒッ。そして、こう、オレの腕の中で嬉し泣きをするンだ！」

林造が背後から、お京の突き出した腹部を撫で上げた。

「ああ……ゆ、許して、お家へ……」

「ふッふッふふ、可愛い声を出すじゃねえか。おっと、やはり、誰に聞こえねえとも限らねえ、その前に——」

お駒が投げ与えた細引きをつかんだ林造は、馴れた縄さばきで、お京を高手小手に縛り上げた。

さらに、泣き叫ぶ必死のお京の口中に、三つ折りの豆絞りの手拭いが、鼻孔までふさいでいた。

「う、ううう——」

お京は恐怖と息苦しさから、首を振って抵抗した。が、両手首を背中で捻じ上げられ、しっかり縛られているだけに、自由はきかない。

「うッふふ、ふっくらとしたいいい格好だぜ。そんな姿を拝んじゃ、オレだって、新二郎の恋敵になるぜ。どれ、ボツボツ、料理するのでしょうか」

ニタリと笑った林造が、お京のふっくらとした臀部を見据えながら、にじり寄った。

「う、うううう——」

お京は、両眼を恐怖と羞恥から、カッと見開きながら、必死に身を守ろうと、畳を蹴って転げ回った。

女が女を責める

自然、お京の裾が割れ、形のよい素肌が露出した。

「お前さん、変な真似だけはおよし。それより、女の責めどころは、女の私が一番知っているよ。あたしにまかしたほうが、どうやらいらしいねえ」

林造が好色な性分を燃え上がらせ、お京の体を抱きすくめようとしたとき、こう言ってお駒が、林造とお京のあいだに、立ちふさがった。

「お駒、どうせ、殺す女、頼む、今晚一晚だけでも……」

林造がお駒に訴えた。

「ホッホッホホ、あんな！ 変な気を起こすンじゃないよ。まあ、いいから、あんなは、そこで見物しながら、酒でも飲んでたほうがいいんじゃない。酒のサカナにはいい料理だよ」

お駒は、林造をたしなめると、お京の縄尻をとり、

「新二郎さんが恋しいのかえ。こうして、可愛がられたのかえ。さ、正直に、あたしのたずねることに答えるンだよ。どう、こうし

て、新二郎と——」

お駒は、お京の胸をはだけると、ピシャピシャと、平手でお京の乳房を叩きだした。

「う、ううう……」

お京が羞恥に身をよじらせた。

「どう、嬉しいんだろう。おや、嬉しくないのかえ？ それとも——」

さらに、お駒の手が乳房をゆさぶった。

「あ、あああ、う、う、ああ——」

お京は身もだえした。裾が左右に乱れ、緋縮緬のなまめかしい長襦袢が割れ、桃色の湯文字が、あられもなく露出した。

「そうかい、どうしても言えないんだね、するようにしてやるよ。顔をお上げ、ホッホッホホ、どう、この男の目の保養に、そう、もっと赤い物を見せてお上げよ」

お駒は意地悪く、林造の顔を見て、ニヤリと笑いながら、いっそうお京の乳房をゆさぶり、さらには、ハタキで乳房をくすぐりだしたのである。お京は畳を転げ回った。林造が唇をなめ回しながら、お京の裾へと淫らな視線をやきつかせた。

「強情なお嬢さんだねえ、ホッホッホホ、返事が出来ないわけだねえ、お口に手拭いが入っていたンじゃ。どら、息苦しかったろ

う。さ、こんどは、返事出来るわけねえ？」

お駒がニヤリ笑いながら、お京の口中から手拭いをとりのぞいた。

「さ、今度は、返事が出来るだろう。おや、まだ駄目なの、しぶとい娘だねえ」

お駒は、お京の帯に手を掛けると、ぐるぐるっと、夏帯をときはじめた。バラリ、お京の着物の前が割れ、上半身の透くような白さとは逆な、桃色の湯文字が、林造の眼球に飛び込んだ。

「ヘッヘッヘ、いい眺めだぜ。お駒、かまわねえから、そら、腰の物もひんむいてやりな、どうせ嬰兒（わがこ）を生んだ体、一度、拝んでから冥土にやろうじゃねえか！」

林造が、酒に頬をほてらせながら、生ツバをゴクリとのみ込んで悦に入った。

「あ、ああ、そ、それだけは、お許しを」

お駒の手が、最後の腰の物にかかったとき、お京が五体を海老（えび）のように折り曲げ、必死に哀願した。

「ホッホッホホ。なにも恥ずかしがらなくても、恋しいお方の前では、ほら、この紐を、こう、自分の手でといたンだろうにねえ」

と、お駒が、お京の湯文字の紐に手を掛けるとき、ガタリ、雨戸が鳴った。ハッとした

お駒は、

「あんた、誰かいるンじゃない」

お京の湯文字から手を離し、林造をふり返った。

「どら、見てくるか」

林造は脇差しを手にとると、ガラリ、雨戸を開いた。が、人の気配はなく、戸外は真の闇であった。

その深夜——林造は、お駒の寝入ったところをみはからい、そっと床を這い出した。

「ふっふっふ。どうせ、あの世へ行く体、その前（まえ）に、お前（めえ）の、この体を——」

林造は、物置き小屋に忍び入ると、お京の体を求めたのである。

「あ、あッ、新二郎様……」

林造のザラザラした手が、お京の乳房から裾を割り、下股へと這い下りた。（ああ、私は、この男に……）お京の両眼に、悲涙が光った。

「な、なにも、泣くことはねえだろう。な、ねえちゃん——」

林造が、ガッとお京を抱きすくめ、覆いかぶさったと同時である。

「う、ううう——」

お京が身をのけ反らした。と、お京の朱唇

を吸おうとした林造の眼前に、タラタラッと一筋の鮮血が、お京の口中から流れ落ちた。

「あッ！」

一瞬、林造は、お京の身体から飛びのいた。お京はみずから舌を噛み切った。

「あんた、な、何をしてるのよ」

そのとき、お駒が雨戸をあけて林造を呼んだ。

「けッ、惜しいコトをしたぜ」

キラリ、七首^{あいくち}が光った。ブスリ、お京の乳房に七首が突き刺さった。

「う、うううッ」

お京の美しい顔が苦悶の表情に変わった。ドッと、ドス黒い血が、口中からほとばしった。

恋女房を斬る

「お駒、そろそろ寝ようぜ。ふッふッふッ、お京だって女、ましてや新二郎の肌を知り、みごもった娘、こんな晩は、お前のぼってりした体を、こう抱いていりゃ、お京だって、化けて出ねえさ。な、寝ようぜ」

お駒は手荒らかきひろげられたかい巻きを、じれったそうに自ら脱ぎかけ、林造の胸に引きよせられた。

「あんた、変だねえ、赤ん坊の泣き声がするよ」

お駒はじっと耳をすました。

「赤ん坊の泣き声だって、この辺で生まれた話も聞かねえ。猫じゃねえのか」

そういう林造もふと小首をかしげた。たしかに、床下あたりで、細々とすすりなく赤ん坊の泣き声。

「気、気のせいだぜ、お駒」

「寒けがするよ、お前さん」

下帯をほどいたお駒の裸身に、林造はすいついた。

「お駒、おめえ、出来たんじゃねえか」

撫でまわす林造の手が、お駒の下腹に止まった。

いつのまにかふくらんだ腹部が、妖しく夜目に白く光った。

「じょうだんは止しておくれよ」

お駒が自分の腹部に手をあてて、あっと叫んだ。たしかに生み月に近かった。

「お前さん、あたしゃあ……」

ひしと林造にしがみついたお駒が、恐怖におののきながら顔を上げた。

「うぬ、お京！」

林造は、お駒の体から飛び退くなり、さっ

と、お駒めがけて、長脇差しの鞘をはらい、肩先から乳房にかけて切り裂いていた。

「ぐえッ！」

お駒が派手な悲鳴をあげ、敷いたばかりの絹夜具に倒れて、カッと目をむいた。

「うぬ！」

さらに林造の刃が、お駒の顔を割った。

「ふッふッふッ、お駒、お駒。おッ！ お京は斬ったぜ、お駒、ど、どこへ行くんだ！」

林造が血刀をさげ、お駒にあらぬ、お京の誘いにのり、ふらふらと庭石を踏みながら、深夜の町を隅田川へと歩きだした。

「ヒッヒッヒ……よくも、私を……」

お京の蒼白い手が、林造の頬を撫でた。

「うぬ、化け物。お、お京、迷ったな！」

脇差しを振り回しながら、林造は、お京めがけて斬りつけた。その瞬間、

「あッ！」

林造は足をすべらせ、お京が投げ込まれたと同じ場所である、隅田川へと転落していった。川は満潮、どうしたわけか、それっきり、林造の姿は、川底にのまれ、二度と川面には浮かび上がってこなかった。

対岸の灯が、ゆらゆらと揺れて、涼を呼んでいた。

化粧室談義

——ピーパーからスカタロジーまで——

雨 妙 院 一 太

ピーパー族

私は町を歩いているとき、年若い女が公衆便所へはいっていくのを見ると、次の瞬間に、きまって、彼女の便所内における奇怪な格好を頭に描いてしまう。

半獣主義（ヘイ・アニマルイズム）というのを唱えた大正期の作家岩野泡鳴が、こんな意味のことを告白しているが、こんなことは、だれにでもあるのではないではないだろうか。

筆者なども幼いころ、若く美しい女性の客人が、わが家の便所へはいっていくのを見ると、あんな奇麗な人でもおしっこをするかしらと思ひ、彼女が便器にまたがった姿態を覗き見したいトキメキを覚えたことがある。いや、そうした妄想は、いまでもけっしてかわりはない。

あえて異常性欲者でなくとも、便所から一種の性的衝動を感じることは否めない事実であろう。

糞尿そのものが、色情象徴の一部をなすとは、医学的にも心理学的にも証明されており、排尿行為が性的機能と関係あることも、泌尿器のあいだに生理的現象——性器の緊張と膀胱の緊張とのあいだの著明な関係を見ることによって証明されている。

便所とSEXとは、断然切りはなすことのできない事実なのだ。

便所における犯罪もいろいろあるが、中でもいちばん多いのが窃視狂、つまり婦人トイレット覗きだ。その変わったのにこんなものがある。——

ある映画館の婦人用トイレで、一人の青年が、七時間という長時間にわたってその

内部にこもり、隣の箱にはいつて来る女の年齢、放尿時間、放尿の姿態などを、壁穴から覗いて子細に観察し、その総合的な統計をとっているところを捕えられた事件があった。

その男の言うところによると、女というものは、人前ではつつしみぶかくしているので、だれも見えてない——じつは覗かれていたわけだが——便所の内で、堪えていたすべての排泄欲をいっぺんに足すそうだとすなわち、思いきり音をたてて鼻をか

み、思いきり音をたてて放屁をする。また濃厚なベッド・シーンの後など、それ以外の排泄欲をみたす若い娘もいるという。もっともこれは、休憩時間ではなく、便所のすいている映写時間中に多い。

また、ノー・パンティーの女が意外に多

く、三十すぎくらいの和服の女などは、ほとんどがフリだったということだ。

ある警察の留置場へ、デパートの婦人便所覗きが捕まって入って来た。まだ二十がらみのなま若い男で、その手口は、婦人用トイレの一つにひそんでいて、隣に女がはいって来ると、壁をはいあがって、上部の空間——息抜きみたいにあいているところ——から、隣へくびをのばして覗きこむのだそうだが、運拙く、そのとき女にみつかって騒がたてられ、捕えられてしまったのだそうだ。

上からみおろすのじゃつまらないじゃないかとだれかがひやかしたところ、彼は、「ぼくは、女のあの格好を見るだけでも、じゅぶん満足なんだ。ことに女がションを放つときのあの突発的な音をきくと、なんともいえない、いい気もちになる」と答えた。

こうした「覗き」を積極的にしたものが、上廁中の女性へのいたずらである。

ある地方の劇場で、婦人の用便中に何者かが、汲み取り口から棒をつきだしていた。ずらすことが半年あまりつづき、そのために観客が減少して来るので、劇場側で厳

重に監視していたところ、ある夜、風のよきに音もなく、一つの黒い影が汲み取り口から忍び入ろうとした。さっそく捕えたところ、まるで十か十一くらいの子供みtainな小さなからだの男、つまり一寸法師だった。

これは、自分が不具なため、女を得られぬところから反抗感が嵩じたものだろう。

嗅覚に生きる人びと

トイレットにおいてSEXを感じる者がいる。

ある紡績会社の工場に、Sという、七十に近い老人の雑役夫がいた。会社の庶務規定による停職年限をはるかにこえているのだが、

「特殊の技術を有し、会社において必要と認めたるものはこの限りに非ず」

のただし書きによって、彼の存在価値がみとめられているのである。

その特殊の技術というのは、なんかという、便所掃除なのだ。

工場内の便所は、事務所に二カ所、工場に四カ所、女子工員寮に七カ所あって、この、十三カ所の便所の掃除が、S老人の受

持ち仕事だった。

この工場では、いままで老若男女いろいろの便所掃除夫が、いれかわりたちかわりしたが、この爺ほど仕事熱心で、すこしもきたがらないばかりか、便所に愛着を感じるもののように、終日その悪臭の中にいて、疲労を覚えないうのは、めずらしかった。

トイレの使用はその八割が女なので、「綿きれや紙くずを便器に捨てないでください」

と、張り紙があるのだが、すぐこの障害物が停滞した。

すると、S老人は、平気で便器の中に手をつっこんで、ピンク色の脱脂綿くずをつかみだし、ギュッと尿分をしぼった後、こぎれいに処分してしまう。しかも、そうした始末を終始満足そうにやるのだ。

また、ときどき、紡績用の木管（径三センチ、長さ十四センチぐらいの円筒）をトイレへもちこんで、捨てていく者がある。Sはそれをみつけると、大事そうに拾いあげて、きれいに洗っては、そっと作業場へ返しにいった。

それは、けっして工場への忠義立てでや



ノゾキはお高くつきます

るのではなく、汚物のしまつ自体に、彼は大きなよろこびを覚える。生き甲斐さえ感じるのだった。

次に、筆者がこの目で見た話であるが、

神田の明大下に小公園がある。いまは、子供の遊園地になっているが、終戦直後は荒れほうだいに荒れていて、浮浪者や浮浪児の休憩所みたいな観を呈していた。

公園の片隅に公衆便所があり、そのころ、その便所の中の物置所に、三人の浮浪者が寝起きしていた。四十がらみの中年男と十八、九の白痴らしい少年、もう一人は五十四、五の婆さんである。

ある日の夕方、筆者は神保町の古本屋をひやかしての帰途、尿意を覚えて、その便所で用をすまし、出ようとする、物置所の戸口から、

「もし、旦那！」

とよびとめられた。江戸時代の夜鷹が道行く客を呼ぶときはこんな風だったろうと思われるような、古めかしい言葉調子だった。

筆者はたちどまって、物置所の中を覗いた。と、薄暗い中のほうから、婆さんが首を出して、

「旦那、まことにあいすみませんが、そのすいかけのタバコでよご

さんすから、あとで一服すわせてくださいな」

と哀願するように言うのだ。

で、筆者はケースから別の一本をぬきだしてあたえると、婆さんは、

「まあ、中へはいってお休みなさい」

とお世辞のつもりか、そう言う。

筆者は職業意識を働かして、いわれるままに、戸口のところへしゃがんだ。婆さんは、いい話相手のつもりで、私に一席の間わず語りをはじめたが、その話によると、その婆さんは、いっしょにいる中年男と白痴少年の二人と三ツ巴となって、奇態な性関係をいとなんでいるらしく、さいきんでは、婆さんが若者のほうと仲良くしすぎるというので、中年男が嫉妬し、ついに白痴少年を物置所から追いだしてしまったというのだ。

「あたしア、その男から淋病までうつされちゃったんですよ」

と別にそれを苦にしているようでもない明るい調子で、ペラペラとしゃべる婆さん。

昔は、料理屋の女中でもしていたのではないかと思わせる、へんに色っぽいところ

があり、汗とほこりにまみれていたが、粹いぎ向きな、ととのった顔であった。

その後、あの公園は立入り禁止となり、半年あまりたってから筆者は、明大脇を歩いているとき、向こうから来るその婆さんを見かけた。まるで見違えるように小ざっぱりとした着物で、顔も手足もよごれていず、いっそう、へんな色っぽさをましていた。

スカタロ族

ひところ特異な作家として知られていた稲垣足穂の初期の作品に、便所を描いた小説が二、三ある。

そのうちの一つに『WC』というのがあるが、これは、作者の詩人的感覚で、便所の美と醜を、心にくいまでにうつくしく描いたもので、夏の陽のキリキリとまいこむ糞ツボの描写——その色や、落とし紙の陰影などが、はずむような文体でうたいあげられてあった。

そのなかに、便所の汲み取り口から忍びこんで、若い女や少年の暖かい尿をかけられて歓喜したり、それを口にうけて悦にいたる男のことが書いてあった。

これは、性的被虐狂のなかのスカタロジ（排泄物心酔）である。尿に心酔するものばかりでなく、汗唾液、耳垢みみかたなど、すべて異性（あるいは同性）の肉体からの分泌物排泄物にたいして魅力を感じ、それに感溺する。また、異性の使用した鼻紙や落とし紙などを好愛する者もある。

スカタロジの尿へのあこがれは、興味のある例がすくなくない。その一、二を挙げると、——

二十七の会社員が、ある夕、勤め先からの帰途、自宅近くの墓地のなかを通っていると、ふと、ものかげで若い女が放尿しているさまを見てしまった。

女のほうでは、見られたのに気づかないようである。彼はそっとそのさきを見ているうちに、異常なまでのけい性的興奮を覚えた。

それからというものの、彼は、町の公衆便所の前を通りかかって、女がそこへはいるのを見ると、魔につかれたようにフラフラとそのあとについて、女の隣の箱へはいってしまふようになった。

こうして彼は、女便所覗きにずいぶん冒険をあえてした。が、魅力の根源は、覗き

よりも、女の尿——女の排泄中の暖かい尿にあることに気づいた。彼はいろいろと工夫して、女の排尿を受ける容器をつくり、なおも冒険をつづけながら、思春期ごろから三十くらいまでの女の尿を容器に採集し、それを自室にもちかえって、震えるような快感とともに、それを飲んだ。

彼は、飲尿するようになってから、自慰行為にはまったく無感覚になったと告白している。

尿憧憬は男ばかりの専売とはかぎらず、女性にもまれにある。

十八歳の娘で、町の公衆便所のわきを通るときは、尿意の催す催さぬにかかわらず、はいつていく習癖があつて、あるときには、便器の中に首をつっこんで臭気をかぐこともしたというのがある。

「できえたら、男の古い尿の一瓶を手に入れ、自分の部屋にとじこもって、心ゆくまで楽しみたい」

と彼女は語っている。

変奇おトイレ

昔、と漠然といつてもわからないだろうが、足利初期時代の貴族は、今の便所のよ

うなところを樋殿とよび、その樋殿へ虎子（大用のもの）と尿筒（小便用）という便器をおき、そのなかに用をたして、そのたびごとに下女に掃除をさせていた。

虎子は「おまる」のようなもので、箱のなかへ砂など入れてあり、箱ごとひきだせるように作られていた。

主人の奥方が外出するさいは、この虎子を供の者にもたせて、尿意を催したときは、それを、木かけへ出させて、用をすました。

谷崎潤一郎のある小説の中に、高貴の女性が用便したあとを、係りの者がその虎子をうやうやしくささげもって、すてにく。虎子からは臭気ならぬ馥郁たる芳香が、係りの男の鼻をくすぐるといった情景を描いたものがあった。

こんなふうだから、そのころにもスカタロジの男女があったかもしれない。

変わった便所では、かつて江東歡樂街の赤線地帯のある店で、きんかくしの前側に、鏡がはめこまれているのを見たことがある。

「なるほど、商売柄、考えたものだわい」と筆者は感心した。

というのは、女は、だいたい、自分の秘所を見ることができない位置に、それがあつた。それをモトデにする娼婦にとって、これは、まことに不便だ。だが、このきんかくしならば、いやでも、はっきりと見えるから、洗滌のさいにも、つごうがいいし、キズができたときなど、すぐ発見できるわけだ。

自分自身のためにも、客にも、ともにいいというものである。

また、大阪に次のような奇抜な男子用の便所をつくった待合があった。

その男便器というのは、等身大の美女の立像になっていて、内部はもちろん空洞であるが、その手足は使用者の意のままに動かすことができるから、使用者の肩に手もかけられるし、抱いてもくれるし、そのほか、どんなことも自由自在。

奇妙なのはその美女人形の幽所が放尿口になっていて、使用後は、人形の左右の乳首を押すと、水または、微温湯が流れ出て、人形の幽所で洗滌ができるという仕掛けになっていた。

おそらく、人間のピグマリオンズ（偶像姦）の心理に着想したものだろう。

◀週刊新潮・文芸春秋にとりあげられた問題の書▶

宮内省に秘蔵される奇書の
一字の伏せ字なき完訳版／

医心方

房内記

乾・坤全二巻を収録

丹波 康頼・著
原 一平・訳

定価 二五〇円（送共）

本書は、中国の黄帝とその女医素女の共著で、日本では円融天皇の時代に、天皇御用の医者たちが、「日本伝統の奥義にあわせ」て天皇家用として著わしたものだ。原本は現在でも宮内庁に秘蔵されているという。閨房の秘戯、テクニク、性欲増進の秘薬の処方など、性愛に関する、あらゆる心得を教えている。

本書はその完訳、限定版であるが、「東京都千代田区神田神保町一・星文館『風奇係』」あてお申込みくださればお取次ぎします。 目録進呈

真珠とり海女奇談

梶 原 祥 三

女のツテへの期待

「ずいぶん、遠いところに来たもんだなア」
喜多四郎は、そのホテルのロビーで、海を見ながら、そう考えていた。

そこは、南の国は紀伊半島、漁師と海女の町「鳥羽市」のTホテルのことだった。

四郎は、東京の、あるちっぽけな商社会社の社員。それが、名古屋に商用で……ある会社で代金を取り立てにきて、その社長から「二、三日待ってくれ」と頼まれて、ヒマをつぶしているうちに、この鳥羽に遊びにくる気になったのだ。

それも、名古屋の元赤線地帯の中村で屋台にすわって飲んでいるとき、隣の男が、「鳥羽は凄いいよ。なにしろ、女が稼ぐからね。あそこでは、女が男を強姦するんだから」

と知っているのを聞いただけの興味。そんな荒々しい「女の情欲」にフレて見たい……それだけのことだった。だが、四郎のような都会育ちの男にとっては、やっぱり、たえようのない「興味」ではあった。

しかし、そうはいっても、四郎には、この初めての土地で、「そんな女のツテ」はなかった。

ところが、うまいことに、昨夜のことだった。やっぱりこの漁師町の屋台で、グウッと安い地酒をあおって、そのオヤジに目的を打ち明けてみたら、思わぬように話が發展したのだ。

「旦那、そんなら、「女の周旋屋」を紹介しますよ」

というのだ。そして、その翌日の今、四郎はワクワクする期待で、その周旋屋を、この

ホテルのロビーで待っているところだった。

海女の島

やがて、ボーイに案内されてきたその男、安物の背広とひとめでわかる風体だが、それでもキッチンと蝶ネクタイをしていて、この土地ではかなりイカス階級なのだろう。もう五十に近い年ごろだったが、いきなりこういう出した。

「旦那は、どんなふうの女性がいいですか」

「どんなふうって……もちろん、海女サ。海のおいしいのプンプンするような、真ッ黒で、食いつきそうなヤツがね……」

「そうはいってもね……あいにくと今は、海女上がりの身体がいいのが不足してやがってね。マサか、島へ直接お連れするわけにはいかないしね」



こういって、ニヤリと笑った。
「島? どの島か知らないが、一晩ぐらい
で帰れるなら、ぼくは、どこにでもいくよ。
ねえ、頼むよ」

こういう四郎に、その男は、

「いったい、どういう酔狂なんですかね。そ
この島の女は、体はくさいし、顔はまずい
し、まともな男は、だれも相手にしません
よ」

「いいねえ。そういうのがいいんだよ」

四郎の熱心な願いに、ついに彼は折れた。
そして、五千円を謝礼として要求した。

「最低の女」 四人

最低の女——その周旋屋が案内したその島
は、鳥羽からポンポン船で一時間、揺られた
島。その島で、ゴミゴミした道を通り抜ける
と、特有のにおいのある漁師町。その入り口
で、その男はもういっぺん、

「旦那、後悔はしませんね」

と念を押した。

そして、彼を一軒の小屋——たしかにそれ
は「家」という呼び名が不適當な建築物だっ
た——の前に立つと、若い娘が一人、中から
出てきた。

高く張った顎、太い眉、ぐりぐりの目玉、
むき出した歯、体から異様な臭気が発散して
いる。女は、周旋屋の説明を聞くと、急に嬉
しそうに笑った。それがまた、なんとも無気
味な笑顔である。

急に四郎は後悔したが、しかしもう遅い。
女の手は、ぐいと力いっぱい、四郎を引き寄
せたので、彼は転がるように、小屋の中へ入
った。周旋屋は逃げるように去って行って、
あとは彼一人である。中には同じような娘が

三人。

四人の女は、珍しそうに、四郎の体にさわったり、顎をなでたりする。

「おい、なにをするんだ」

思わず、彼はこう怒鳴ってみたが、娘たちは、全然聞こえないのか、あるいは通じないのか、こんどは、四郎の洋服を脱がして、身体を撫で回したり、頬ずりするだけ。そのくせ、それ以上の行動はとらないのである。

「ようし、そっちがその気なら……」

覚悟をきめた四郎は、四人のなかで、どうやら申しだと思われる女の手を握り、ぐいと引き寄せると、乳房をにぎってみた。

すると、意外にも、周旋屋の話ですっかり承知していると思う女たちが、一せいに金切り声でいきりたった。四郎は、それも、女たちの羞恥と違って、乳房を掴んだその女の上にのしかかろうとすると、後ろの女に、いきなり、棒で後頭部をガツンと殴りつけられた。クラクラッと目まいがして、かれの意識はかすんでしまった。

気がついてみると、彼は、部屋の真ん中の柱にグルグル巻きに縛られている。まったく意外な成り行きである。これでは、まるで約束が違う。

「おい、どうしたんだ。これでは約束が違うじゃねえか」

こう怒鳴り散らす四郎を取り囲みながら、女たちは返事もしない。

「こんなことをすると、警察を呼ぶぞ……」

こう彼がいうと、女の一人が、また棒をもち出して、彼の目の前でピシッと鳴らす。この太い腕でやられたら、彼のヒ弱な頭の骨など、いっぺんにくだけてしまうだろう。

こう思ったら四郎は、たちまちコワクなつて、思わず黙り込んでしまった。

「開門」の役目

そして夜中になった。静かだ、あいかわらず物音ひとつしない。しかし、何か、浜辺中の人々が、ただ一つのことを待っている、いらだつような気配は、ひしひしと迫ってくる。

すると、いきなりボーッとホラ貝らしい音が聞こえてきた。

娘たちは、パッと立ち上がり、その場に何もかも脱ぎ捨てた。真ッ裸になると、四郎の綱を解き、彼も真ッ裸にして、荒々しく三人でかついだ。四郎には、もう、なんの抵抗をする気力もなかった。なるように任せる以外

に仕方がない。

娘たちは彼をかついだまま浜辺に出た。そして、一隻の船に四郎も乗せると、沖に向かって漕ぎ出して行った。

やっと落ち着きを取り戻した四郎が、まわりを見ると、だいたいどの船も女が三、四人と男が一人……つまり、海にもぐる海女と、その生命綱を預かる男たちなのである。つまり彼は、この船の、その男の役をおおせつかったのである。

「ええい、ままよ」

そう思うと、彼も気が楽になった。

沖に出てからは、四郎は、鵜飼いの宗匠そうしやうのように、四本の綱を持たされ、娘たちから合図があると、それを、力いっぱい引っぱり上げた。

娘たちは、息が長く、三分ぐらひは、じゅうぶん潜る。そして、そのたびに、必ず貝を二つか三つ岩からはがして持ってくる。みるみる、船の前のほうに貝が山と積まれた。

だいぶ貯ったところ、娘たちは皆、一たん船上がり、ほかの船の目をさけて、小さな岩の陰にかくれた。そして娘たちは、いきなり、裸の四郎にしがみついた。彼の体を無理に欲情させ、おのれの秘所を貫けという。

四郎がためらいながらも、言われたとおり
にしようとして、はじめて、三人とも完全な
処女であることに気がついた。

今となって、なぜ、それを、急に行なえ
と、彼女らが命令するのか、四郎には、理解
が出来なかったが、こうなれば許されている
うちにそうしたほうがいい。彼は、娘たちの
求めるままに、四人を順々に犯していった。
だが、娘たちは、不思議なことに、その最
初の動作で、女の門が開かれると、もうそれ
以上は、何も求めなかった。

そして、すぐうるさそうに彼の体を放し、
船ばたで、海水で、血に汚れた部分を洗っ
た。そして元気が回復すると、また海の中へ
潜って行った。

四郎には、完全なお預けである。四人の女
を順々に抱きながら、ついに、一回の満足も
ない。

そのうち、娘たちは、長時間の潜水でさす
がに体が冷えこんできたらしく、今度は四郎
に、その体を抱けと命令した。しかし、それ
は、日にさらされて暖まった彼の体で、すっ
ぽりと包んで、女の体の冷えを除くだけで、
それ以上の行動に及ぼうとすると、ほかの娘
が後ろから、櫓を振り上げておどす。だから

彼は、満たされぬ欲情に苦しみながら、冷た
く凍った女の体を、次々に、ただ暖めるだけ
であった。

真珠を隠す方法

夕方、あたりが暗くなるころには、貝は、
船いっばいに積みこまれた。そして、あたり
が、お互いによく見えなくなると、女の一人
が見張りに立ち、ほかの女が、船ばたに身を
かくして、ひそかに貝の殻を剥き出した。そ
れは、ここいらでは、法律で厳禁されている
行為である。貝を採った海女が、雇い主の許
可なく、中身をあげてはいけないのである。
だが、一人の娘は、せっせと貝殻をあけ
る。そのあいだ、もう一人の娘は、水音をわ
ざと派手に立てて、潜ったり浮かび上がった
りして、四人が交互に潜水しているように見
せかけていた。

貝殻をあけた娘は、貝の肉を指でつぶし、
真珠を探った。玉の出て来ない貝は、ナマの
まま食べてしまい、殻は海のなかに捨て、幾
つかのなかから、時おり、満月に光って、キ
ラリとした真珠の粒が出てくると、大切そう
に、船の底に、それを並べた。

作業は交替で行なわれた。いつのまにか、

貝の山の半分は剥かれて、女たちの食事にな
り、取り出された二十個近い真珠が、きれい
に並べられた。

娘たちは、その秘密の作業を止めると、だ
いぶ少なくなった貝をとり始めた。

作業中止の二十分前、娘たちは、船に上が
った。そして、お互いに、丁寧に見比べなが
ら、二十個以上の真珠の粒を分けると、四郎
にとてつもないことを命令した。彼は、その
とき、はじめて、自分が連れて来られた理由
を知った。

女の一人が、真珠を指で持ち、おのれの秘
所に当てがいながら、四郎の体で、それを中
へ押しこめというのである。そのため、彼女
らは、さきほど、わざわざ、処女の身を破ら
せたのである。

四郎は、女に命ぜられるまま、一つずつ、
その粒を押し込み、一人に五個以上の玉を、
彼女らの体のなかに納めた。

そして同時に、月明かりで、詳細に彼女ら
のその部分の観察も行なった。

四人の女は、ほとんど秘所いっばいに溢れ
るほどの真珠の挿入がすむと、あとは、それ
こそ何食わぬ顔で、船を漕ぎ、浜辺へ戻って
行った。

少年の臀肉切り・野口男三郎

新海 米太郎

臀肉をえぐられた少年の死体

明治三十五年三月二十八日午前零時四十五分ごろ、東京麴町区下二番町五十九番地、中島新吉（四二）さんが、麴町署に、

「子供が、だれかに連れられました」

と届け出たことから、いまなお、明治の特異犯罪と人々の語り草となっている野口男三郎の臀肉切り取り事件は発展する。

同署の当日の宿直員富内警部は、直ちに松本刑事を引き連れて現場に急行、中島さん方の隣家、車宿業藤井為二郎さん（五〇）らとともに捜査に従事したところ、同町二十九番地、差配人遠藤警方の勝手口と浴室とのあいだの、約三尺四方の掃き溜めのかたわらで、犬がしきりにほえ狂っていた。不審に思って覗いてみると、一人の少年が無残な格好で殺され、放置されていた。そこで、同警部は、本

署に報告、枝島署長らに上申した。

これにより、同署長は、非番当直の別なく非常呼集を行ない、これを指揮して犯人捜査に当たるとともに、非常線を張りめぐらす一方、検事立ち会いのうえ、被害者の死体を検視した。その結果、少年の左咽喉部に深さ七分、幅五分の突き傷が一カ所あるほか、眉間に皮下負傷一カ所と、左右臀部各一カ所が深くえぐり取られていた。しかし、そのえぐり取られた臀肉は、どこへ持ち去ったか、ついに発見されなかった。死因は、眉間の皮下負傷や鼻孔に出血が見られることから、犯人は、被害者の少年を、大地に強く押しつけて窒息死せしめたものと思われた。

最初、同町三十五番地、高利貸しの安藤庄次郎さん方窓下で凶行を開始し、それから十五、六丁へだてた前記遠藤さん方の小路に引きずり込み、鋭利な刃物で少年の咽喉部を一ト突きし、臀肉を切り取って逃走したものだと思われた。



凶行当日は、ちょうど三番町の二七不動の縁日で、夜店なども出て賑わっていたので、宵の口に、こんな無残なことが行なわれたとは思えず、凶行時間は、ようやく人足のおとろえた同夜九時三十分過ぎと推定された。

また、被害者は、前記新吉さんの長男惣助君(一一)とわかった。被害者宅は、新吉さんのほか、妻きくさん(三一)、同人の母くめさん(六〇)、長女しずちゃん(六ツ)の五人暮らしで、新吉さんは、京橋区西紺屋町の秀英舎へ日給五十銭で勤める印刷工で、家内は巻きタバコの内職をしていた。

被害者惣助君は、四谷区信濃町の小学校に通学していて性質は温良、さる二十四日に、尋常科四年生を優等で卒業し、休日なども巻きタバコの手内職をたすけるなどして、近所でも評判のよい少年だった。

当日、惣助君は、母きくさんのいいつけで、八時四十分ごろ、砂糖を一銭五厘買いに出かけ、そのまま消息を断ったものだが、発見されたとき、砂糖を買った釣り銭五厘をしっかりと握って倒れていたという。

父親の新吉さんが同署に届け出るに及んだのは、九時を過ぎても帰らない惣助君を案じて、いつも砂糖を買いつけている麴町六丁目の、遠州屋こと田中作造さん方に問い合わせたところ、先刻すでに帰ったとのこと、心配しながら帰ってくる途中、俗に亀沢横町という、前記安藤さん方前に差しかかったさい、惣助君が、いつもはいていた山キリ台の書生下駄の片方が転がっており、さらにそこから七、八間離れた三十二番地、魚商々魚長々和田儀平さん方と河合さん方との中間に、もう一方の下駄が飛んでいるのを発見したから

であった。

同事件は、犯人逮捕の端緒となるべき証拠は何一つなく、惣助君の父親新吉さんが、事件当日の夜、勤務先の秀英舎からの帰途、砂糖の包みが落ちていた自宅付近で、鳥打ち帽子にネズミの二重回しを着た、怪しい男に会った。そのとき男は、なにかうめくような子供を前に抱えているようで、

「いいかい、しっかりしろ」

と喋っているのを確かに聞いたという。このとき新吉さんも、その男の同伴の子供が腹痛でも起こしたのだろうくらいに思っ、そのまま自宅に帰ったという。

これだけでは、とうてい捜査の手掛かりになるはずがなかったが、それでも同署では、間もなく木佐木直志（二三）という鹿児島県生まれの男を容疑者として挙げ、否認のまま起訴した。

木佐木は、京橋署の書記を拝命したこともあるが、すでに詐欺で重禁固三カ月の前科があり、男色のクセがあつて、少年を追い回すというので、その男色の変態者が、肛門を切り取ったものとみて嫌疑をかけたのだった。

だが、木佐木は犯人ではなかった。完全にアリバイが成立したからであった。

そのため木佐木は、警察のオモワクを裏切つて、やがて予審免訴となり、また捜査はアリ出しに戻った。

代々木よもぎ山の変死体

同三十八年五月十一日といえば、おりからバルチック艦隊が日本

近海に姿を現わし、その三十四艦からなる艦隊が日本を威圧しはじめたときでもあるが、ちょうどこの日の夜、麴町下六番町六番地の野口寧齋氏の邸内の南にあるシイの木の植え込みあたりで闇にうごめく怪しい人影があつた。その人影は、同家の家人が寝静まったのを見定めると、静かに寧齋氏の病間につながる隣室の茶の間の窓下に忍び寄つた。

しかも、その曲者は、一尺余の日本刀を携えているほか、懷中に毒薬ストリキニーネを持っていたのである。

その夜、寧齋氏は、実弟の文学士が久しぶりに上京してきたので、夕食をともし、遅くまで快談し、いつになく元気で眠りについていたが、翌朝、母堂が発見したときには、上半身を斜めにフトンから乗り出し、苦悶の舌を覗かせて、こと切れていた。

医師の診断の結果、死因は脳溢血とあつたが、死因に疑いあるとして、同年六月九日、帝大の片山国嘉博士の執刀で、死体解剖が行なわれた。

それによると、脳溢血でないことは明らかで、死体前胸部の左右には、手のひら大の組織内溢血が歴然と認められ、外部の力が加わつたことをはっきり証明していた。

寧齋氏は、三年来、絶対外出せず、人にもむろん会っていないので、他人の恨みを買うようなことはなく、まして手足の自由を失っている者に、どうして毒薬まで用意して自殺が図れるだろうか。しかし、現にストリキニーネが枕元に置いてあつたのだから、いかんともしがたい。そのため、弟の文学士は、死因を深く怪しんだが、表沙汰をはばかることばかりなので、脳溢血として青山墓地に埋葬した。

つづいて同月の二十五日早朝、東京豊多摩郡代々幡村字佐々木九十五番地先の草原、通称よもぎ山といわれるところで、徳太寺侯邸のすぐ近くの栗の木の下に、年齢二十三、四歳の男の死体が転がっているのが発見された。この死体は、見たところ、格別の創傷もなく、首に荒縄が巻きつけられてあったが、その先のほうが切れ、その上の栗の木の枝にも縄が巻きつけてあった。

そこで、ちょっと見たところ、栗の木で縊死し、縄が切れて落ちた、とみられた。

加えて、この男は、所持品もないし、身許もわからないまま、行路病者ということになって役所に引き渡し、近くの寺の墓地に土葬にした。

ところが、寧斎氏方からあまり遠くない麴町四丁目八番地に、小西屋という薬種屋があり、その長男都築富五郎さん（二三）が、同月二十四日午後、家を出たまま帰らないというので、市内各署に捜索願いが出されていた。

富五郎さんは、脳を患ったことがあり、人から、少し足りないといわれていた。

そんな関係で、まさかとは思ったが、新宿署では、年齢などが酷似していることから、小西さん方に通知し、父親立ち会いのもとに墓を掘って死体をみせたところ、まごうかたなき富五郎さんであることがわかった。

富五郎さんは、家を出るとき、

「金儲けがある」

といって、家人のとめるのも聞かず、銀行から三百五十円を引き出し、それを持って家を出たといわれるが、その金は持っていないか

った。

しかも、その問題の金儲けはというと、ある者がひそかに戦地から持ち帰った敵の分捕り品の金の延べ棒で、それが安く買えるとのことだったという。

富五郎さんにこの話を持ち込んだのは、同町下六番町の魚屋、和田儀平さん方の二階に下宿している野口男三郎であることがわかった。

直ちに男三郎は逮捕され、取り調べを受けたが、

「確かに富五郎さんとその日、日比谷を散歩しようと約束してあったので、二人で午後二時ごろまで遊んだ。ただそれだけで、午後二時ごろ別れた。そのあとのことは知らない。もちろん、金の延べ棒の儲け話など全然知りません」

男三郎は、少しもよどむところなく申し立てた。この間、男三郎軍の下宿先、和田さん方に当たってみると、

「その夜、遅く帰ってきて、陸軍通訳官としてすぐ出征するので、軍刀を買ってきた」

といって真新しい軍刀を見せたというので、係官が

「よく軍刀を買う金があったな」

というと、

「陸軍から下がった支度金だ。買ったのは軍刀ばかりではない、軍服もすでに注文して手付け金が払ってある。自分は外国語学校露語科の卒業で、こんど陸軍通訳官に採用されたのだ」という。

こういわれるてみると、別に怪しいところもないようだが、そのとき男三郎が持っていた金の二百七十円、に軍刀を買い、洋服屋に手渡した金を合計すると、ちょうど富五郎さんが失った三百五十円

に相当する。

そこで、念のため陸軍に通訊官採用の事実を照介したところ、全然根も葉もないつくりごとだとわかり、合わせて外国語学校にも、そんな卒業生はいないことがはっきりした。

ここにおいて、取り調べも一段と峻烈^{しゅんれつ}を極めたが、男三郎はガンとして口を割ろうとしなかった。だが、通訊官に採用もされないのに、なぜ、そうした偽りをするのか、と理づめで問われるに及んで、憤然として涙を流し、自分の不幸と野口家の事情とをこもこも陳述した。

だが、ついに隠しきれず、少年殺しが自白され、寧齋殺しが自供されたが、富五郎殺しの強盗殺人だけは否認のまま、検事局に送られた。

才女を口説き関係する

それより先、同三十年の春、麴町紀尾井町に住む理学博士石川千代松さん方から、当時、飯田橋にあった私立城北中学に通学する美少年があった。寧齋氏方もその近所にあったので、家人とも知り合いになり、のち、寧齋氏宅が麴町下二番町に引き移ってから、この少年は、寧齋氏方に出入りしていた。

ある日の朝のこと、その少年が、楠公の紋所のついた提灯を持って寧齋氏方を訪れ、

「学校に行くのに、家を出るとき提灯を持って出るのですが、提灯を持って学校に行くと友達がいたずらしてこわしてしまうので、ご迷惑でも、お宅に置かしていただけないでしょうか」

というので、

「それはかまいませんが、乗り物というわけにはいかないのですか」

こうたずねると、少年は明快に答えた。

「この辺までくると明るくなるのです。親が汗を流した金で勉強させて貰っているのですから、乗り物など絶対に使いません」

その心がけの尋常さに、まず寧齋氏の母堂が惚れ込んでしまった。少年は、毎朝、判で押したように、きまった時刻に提灯を預けに寄り、夕方、きまった時刻にそれを持って帰る。その真面目な純真さに、寧齋氏の妹の美しいそえが心をひかれ、少年と家人とのあいだに次第に暖かいものが交流していった。

そうして親しくなるにつれ、

「今日はおやつがありますよ。よろしかったら召し上がってください」

とか、シャツのボタンが取れているから、つけてあげましょう、とかいったことが繰り返され、一方、男手のない寧齋氏方では、薪を割ってくれとか、塵箱^{ちりばこ}を動かしてくれ、あるいはちょっとした用事を頼んだりした。そして少年は、そのお礼に、帳面を買って貰ったり、おやつをご馳走になったりして、両者の交渉はますます濃くなっていった。

そんなわけで、両者話し合いのうえ、やがて、少年は寧齋氏方に同居して、そこから通学することになった。

そのころになると、そえと少年は、深い恋に落ち、肉体関係まで結ぶ仲になっていた。この少年が、武林男三郎、のちの野口男三郎
三郎（一）だった。

男三郎が通っていた城北中学校は、陸軍士官学校に入る予備校的な学校であったが、男三郎が卒業する以前につぶれてしまったので、男三郎は、やむをえず物理学校に転じ、その後、さらに外国語学校に移った。

しかし、そえとの甘い恋に溺れた男三郎は、不勉強がたたって成績も香しくなく、つづけて二度落第したため、とうとう外国語学校を退学になってしまった。

そこで男三郎は、仕方なしに、ひそかに二松学舎に籍を置いて通学し、寧斎氏方には、つづいて外国語学校に通学しているように装っていたのである。

そのころ、寧斎氏は、不幸にも悪疾に患い、次第に重くなって、起居の自由さえ失い、一切外出せず、他人と面接することを極度にきらって、一室に閉じこもったままだった。これを家人は、ロイマチスといていたが、男三郎は、いろいろおかしい点があるのに気づいていた。

同三十五年二月のある日、男三郎は、二松学舎で論語の講義を聞いていた。

「伯牛病アリ、子之ヲ訪イ、窓ヨリソノ手ヲ執リ、曰ク、止ミナシ、命ナルカナ。斯ノ人ニシテ斯の病アリ……」

そして講師は嘆じて、

「野口寧斎マタ然ル乎」といった。

そのとき男三郎は、これを聞いて思わず鉛筆を取り落とした。

寧斎氏は、このとき三十三歳、一家を成していたし、才色兼備の噂高いその妹そえは二十七歳だった。それが、ともに独身でいること自体不審だった。

そんなわけで男三郎は、学校から帰ると、急に大阪の実家（男三郎は赤穂義士の武林唯一氏の子孫と称する大阪市西区新町南通三丁目四十三番地武林祐橋の三男）に用事ができたと偽り、野口家の郷里長崎県諫早町に駆けつけて、その事実を調査したところ、彼の推察の間違いないことがわかった。

寧斎氏の父野口常共氏は、諫早の藩医の家に生まれ、早くからその俊秀をもって瞩目せられた。維新のさい、藩の決議をもって中央に推薦せられ、太政官に出仕し、権少書記官に任ぜられたし、巖谷一六氏の親友だった。松陽と号し、河野鉄兜門下の高足で、当時、森春濤と並び称せられた漢詩の大家であった。三十八歳で難病を發し、官を辞して上野の温泉に病を養っていたが、同十四年五月七日、没した。

その子に一太郎（寧斎）、そえ、それからちに帝大の文学士の末弟の三人の子供があった。三人の子供は、父が難病で死んだその運命の前に、互いに独身を誓い、人生の春を寂しく麴町に住んでいたのだ。

それなのに、そえだけがその誓いが守り切れず、二十三歳にして男三郎と契って破戒の子となったのだった。

海上で人肉のスープをつくる

男三郎は、大いに驚いて、諫早から寧斎氏方に帰ってきた。それでも、そえに対する男三郎の執着はあまりにも熱烈で、悪疾などもののかずでなかった。

男三郎は、狂気のように毎日、図書館に通い、医書を捜して、難

病の治療方法はないものか、と読破した。だが、それによって得られたものは、現代医学からほど遠い、人肉が一番効験があるという俗説だけだった。

寧齋氏方からほど近い麴町三番町に、二七不動といって、二の日と七の日に限って縁日が立つ不動尊があった。同三十五年三月十二日も縁日で、露店がぎっしり立ち並び、昼間から、人出で賑わっていた。

その夜、男三郎は、ぶらりと縁日に出かけ、早咲きの桜の一鉢を買ってきて寧齋氏におくった。そ、えは泣いて感謝し、寧齋氏もよほどうれしかったとみえ、かたわらの本箱から漢籍を一冊取り出し、本のなかの話をした。

「昔、支那で、さる高德の学者が難病に罹かった。四方から教えを乞いに集まってきていたたくさんの方門弟は、たちまち散じ去ったが、一人の年若な門弟だけは、感心に居残って、介抱に手をつくした。

神明これに感応して、ある夜、夢に告げ給うには、南方三千里外靈薬あり、これを取るただ至誠のみ、と。そこで門弟は、九死に一生を冒して海に浮かび、南の国に至って靈薬を持ち帰った。これ、なんと、一塊の人肉。門弟これを師に勧めたところ、たちまち効験あって平癒した」

こう語り終えて、寧齋氏は太く溜め息を洩らし、

「子弟ノ間ステニスノ如シ」

といって、男三郎の顔をみた。

男三郎は、その夜、眠れなかつた。そ、えを捨てるべきか、人を殺すべきか、煩悶しているうち、夜が明けた。

だが、その揚句の果てが、少年惣助君殺しの臀肉切り取り事件と

なったのである。

男三郎は、その犯行の翌日、京橋木挽町河岸から、釣りを装って舟を出し、一人で沖に漕ぎ出して、舟中で肉をコンロで煮詰めて一合ぐらいのスープに作った。肉は海中に捨て、スープは瓶に入れて持ち帰った。

その途中、赤坂一ツ木の鳥屋で、本物のニワトリのスープ一合を買求め、人肉のスープとニワトリのスープを半々に混ぜ、ニワトリのスープを買ってきたといって、家への土産にした。また、男三郎は、五香という香料も少し入れたといっていた。

このスープは、確かに寧齋氏も飲んだ。そのためか、寧齋氏の病気は幾分よくなったようだった。

それから二カ月ばかりというものは、男三郎は、少年の夢に悩まされた。

少年が寧齋氏方の門を入ってくるところや、黙って枕元にすわっているところを夢にみて、とても、落ち着いて勉強するところの騒ぎでなく、学校を転々としたのは、そのためだと、のちになって男三郎は述懐している。

以上は、男三郎の少年殺しにまつわる、警察や予審における自白であるが、その後、男三郎は、予審の途中から、これまでの自白を翻えした。

しかし、そ、えは、最後まで、公判廷においてすら、男三郎がニワトリのスープを持ち帰ったことを否認せず、そのスープを寧齋氏も、そ、えも飲んだことを認めた。

少年の死因は、扼殺であり、ほかに外傷はなかった。目をえぐり取り、臀肉を切り取ったのは、死後のことで、ただ頭の下に刃物の

ちょっとした傷があった。

これは生前、もしくは死の直後の傷と思われたが、ナンとしても不可解な傷だった。

男三郎の自由によれば、少年の鼻口を強く前から自分の胸に押し当てて動かさず、呼吸を止めて窒息死させ、着衣をまくって鋭利な刃物で贅肉を切り取りにかかった。そのとき、少年が呻き声を発したような気がしたので、思わずナイフを持ったままの手で少年の口を押えようとした。そのさい、ナイフの先がアゴにさわったかも知れない、といていた。

少年の父親の新吉さんが通りかかったおりの情景が、もしその男が男三郎だとすれば、それと照らし合わせて、じゅうぶん信用できる自由である。

ウソで固めた行動

このような男三郎は、またインチキのカタマリであった。外国語学校は、とうの昔に退学されていたが、寧斎氏方には、引きつづいて通学しているように装っていた。それにも限度というものがあつた。年限がくれば卒業したといわざるを得ないし、卒業したといえれば卒業証書を見せなければならない。やむなく男三郎は、外国語学校の卒業証書を偽造して、これを寧斎氏方の家人に、まことしやかに披露した。

卒業したとなると次は就職である。ニセの卒業生に、外国語学校卒業者にふさわしい就職口などあるはずがない。そこで男三郎は、一計を案じ、これまで学校に行っていたため延期されていた徴兵検

査を受けたら甲種合格になった、と寧斎氏方の家人に告げ、一年志願兵に行くことになった。

こうして男三郎は、同三十六年十二月、寧斎氏方から、姿を消し、十カ月帰らなかった。もとより、男三郎はすでに徴兵検査を終え、不合格になっていたのである。

男三郎は、東京から姿をくらますと、間もなく神奈川県三浦郡三崎町字六合の向ヶ崎というところの有力者、三輪卓爾氏方に、参謀本部通訳官武者小路某と名乗って颯爽と姿を見せた。おりから、日露の風雲は急をきわめているときでもあり、

「秘密の要務を帯びて内々派遣された者だが、しばらく滞在させてもらいたい。また、このことは、いついかなるときでも秘密を守ってもらいたい」

と頼んだ。三輪氏方でも、これにはいやとはいえず、離れを提供し、賓客の待遇をもって無料で滞在させた。この武者小路と名乗る男三郎のところには、ときどき東京から華族の武者小路、まなは武者小路そえとした郵便がきた。

三輪家では、そうした郵便、本人の態度、話柄などから、一点の疑いも抱かず、長女操さんを近づけて奉仕させていたところ、操さんは、いつしか男三郎に誘惑されて関係を結んでしまった。

卓爾氏は、中風で数年来寝たきりで、家事一切は妻のツネさんが切り回していたわけだが、男三郎は、不倫にも、ツネさんとも関係を結び、はては、ツネさんを東京に連れ出して、旅館を泊まり歩いて、数日、家に帰らないこともあった。

その間、日露開戦となり、男三郎は軍務ますます重大と触れ込んで、ツネさんを連れ出すのだった。



あるとき男三郎は、ある者が戦地から持ち帰った分捕り品の金の延べ棒を持っているから安く世話してやる、とツネさんをそそのかして銀行から大金を引き出させ、ツネさんを伴って東京に行こうとした。このときばかりは、身体が自由がきかない三輪氏も、大いに怒って、ツネさんを連れ戻させ、武者小路こと男三郎の滞在を断わって追っ払った。同三十七年十月ごろのことである。

三輪氏方を追っ払われた男三郎は、その足ですぐ寧斎氏方に現われた。十カ月が経過して除隊になったというわけである。男三郎が姿を消したとき、すでに受胎していたそえは、それから間もなく女の子を分娩し、君子ちゃんと名づけた。男三郎は、寧斎氏方に同居して、そえさんを愛撫する一方、ツネさんをもたびたび呼び出して、旅館などで逢い引きをつづけていた。

軍装を整えるための殺人

寧斎氏は、身体こそ不自由であったが、自分の身、家族の生活を律することはすこぶる謹厳で、洞察の目も鋭かった。だから、男三郎のインチキを逸早く看破せずにはおかなかった。

なかでも、自分の目の前で、一人しかいない妹が妊娠し、君子という子供を生むようふしだらなことをやったこともだが、これが因で、その相手の男を自分の戸籍に入籍する羽目になったことを、どんなに残念に思ったかわからなかった。

だが、これに気づいたときはすでに遅かった。まして、それから注意して男三郎をよく見ていると、その行動は不審に満ちていることを知ったが、いかんともしようがなかった。そんなわけで、寧斎

氏のその後の態度は、自然、男三郎につらく、もしできたら男三郎を追いついて、そ、え、さんからも、一家からも遠ざけてしまいたい、といった方向に気を配っていたから、男三郎のほうでも、ときには腹を立て、ときどき衝突することもあった。

ある夜、ツネさんが使いをよこして男三郎を旅館に呼び出して逢い引きに誘ったとき、寧齋氏は、「お前みたいなやつは、断固として許すわけにはいかない。とっとと出ていけ」と宣言した。

ことがことだけに、このときばかりは、母堂も取りなしようがなく、男三郎と寧齋氏は、対立したまま、男三郎は寧齋氏方を出てしまった。

男三郎は、寧齋氏の家を出てしまってから、しまったと思った。その後、男三郎は何度となく、寧齋氏に謝罪し、復帰を懇願したが、寧齋氏はガンとして承知しないばかりか、家人に厳命して、男三郎に会うことを禁じるとともに、男三郎が寧齋氏方に入出入りすることをも禁じ、親戚にもはかって、男三郎を離縁し、籍をぬく方策を進めた。

男三郎は気が気でなかった。なんとかそ、え、さんに会い、その気持ちを確かめて、それに対処しようとし、そのため男三郎は、寧齋氏方のすぐ近くの下六番町の魚屋、和田さん方の二階に寄宿し、そ、え、さんの外出をうかがって連絡を取ろうとした。しかし、そ、え、さんは外出を禁じられているのか、一度も外に出てこなかった。

そこで今度は、野口家に入出入りしている髪結いの女を買収して手紙の仲介を頼み、それによって、そ、え、さんが変心していいことを

知って非常によるこんだ。

とはいえ、それもつかの間、間もなく、このことを寧齋氏が知って、それ以後、髪結いまで、寧齋氏方に入出入りするのを止められてしまった。

そんなことで、男三郎の実父も、大阪からわざわざ上京して謝罪したこともあったが、寧齋氏はてんで取り合おうとしなかった。こうしたことが原因となって寧齋氏殺しを惹き起こさせたのである。だが、その結果は、案に相違して、男三郎には少しも良くなかった。

寧齋氏方の親戚は、男三郎が葬式に列することを拒み、ひいてはこれを機会に、離縁の手続きをしようという意見に傾いていったのだ。

男三郎は、それというのも、自分が就職していないので、親戚から信用されていないのだと思い、それから一刻も早く立派に就職したということを見せてやる必要があると考えた。といって、外国語学校卒業にふさわしいような就職口は、いかにあがいても望みがないので、例によって、インチキでいくことにきめ、陸軍の通訳官に採用され、近く戦地に派遣されると吹聴した、親戚などがこれを信用したか否かは別として、男三郎は一生懸命であった。

それを裏付け、立派な姿を見せるためには、どうしても軍服を着て、軍刀を吊っているところをみせなくてはならない。それには、まず金である。軍刀、軍服など一式整えるには、二、三百円の金が必要だった。それをつくるため、男三郎は、第三の凶悪犯罪、強盗殺人を計画した。それが、代々木よもぎ山の変死体富五郎さん殺しである。

富五郎さん殺しについては、事件が予審になってから、神奈川県横須賀署の三崎分署長白石信尚氏から、同三十七年九月まで、三崎六合の三輪氏方に滞在し、卓爾氏の妻や娘を誘惑した男が野口男三郎に相違ない、という報告書が警視庁に提出された。ここで注意すべきは、このとき、すでに金の延べ棒の話が出ていることである。これには、さすがの男三郎も抗弁の余地なく、富三郎さん殺しをあっさり自白するに至った。

ああ世は夢かまぼろしか

公判になると、男三郎は、どうした心境の変化か、急に富五郎さん殺しを認め、少年殺しと寧斎殺しを否認した。それによると、

「警視庁がスパイを使って檻房かんぼうのなかにまぎれ込ませ、その口車に乗って、少年殺しと寧斎殺しを自白させられたが、これは、まったく身におぼえのない濡れ衣だ」というのである。

この少し前に、日比谷焼打ち事件の公判があり、警犬問題といって、警視庁がスパイすなわち犬いぬを使って古沢不二雄らをたぶらかして自白させたというので、やかましい問題となり、警視庁廃止論まで出て、河野広中、小川平吉、桜井熊太郎、大竹貫一などという人が無罪の判決を受けた。

男三郎は、その弁護を花井卓蔵、小川平吉などに頼み、スパイを使って自白強要したというので、警視庁はまたもや、その捜査方法をめぐって、さんさんに油をしぼられた。

このときは、一旦起訴されて、未決監に下ったものを、ふたたび警視庁の留置場に移して取り調べたことを、これは法規にない不法な処置だとし、そのさい、歌代佐平太という偽名の男を男三郎と同房させ、それが自白を誘導させたというのだった。

これは当然、非難的となり、公判廷で男三郎が自白した富五郎さん殺しだけ有罪と認められ、死刑の判決い渡しがあり、少年殺し、寧斎殺し、はともに無罪となった。

スパイの役を行なった歌川佐平太は、本名を大築尚一といい、陸軍中将大築尚志氏の一子で、ときの帝大総長山川健次郎氏や満州軍総司令官大山巖夫人の甥に当たる者だった。

大築氏は、ある軍の機密書類紛失の嫌疑で入監していたものだが、これをきっかけに、知名の人々の名が出ることで、いっそう世間の注目を集めた。

スパイを使ったことに対して、当の責任者である兼子弘刑事は、捜査の必要から大築を同房させたことを、公判廷で証言した。男三郎も、大築のスパイ事件により、警視庁の旧式捜査法改革に捨て石として一役買ったわけである。

話は違うが、男三郎は、女に対して不思議な魅力を持っていたようである。親戚でもない、なんの関係もない家に近寄り、そして同居し、娘と関係を持ち、次いで娘の母とも関係するなど、まことに巧妙な手口を使っている。大阪の又木家、三崎の三輪家、東京の野口家など、みな、これである。

又木家と男三郎との関係は、男三郎が私立桃山英学校に在学していたときに、同級生で、男三郎より年下に又木という少年があった。男三郎は、学校の行き帰りに、わざわざ半里もの道を遠回りし

て、親切ごかしにその少年を家まで送っていった。こうして次第に家人の信用を深め、ついには同居するようになった。同居すると、少年の姉とまず関係を結び、次いで母親とも関係を持つようになった。

そのうち姉の縁談が持ち上がったに及び、男三郎がいては何かと邪魔になるので、又木家では、男三郎を出そうとしたが、出ようとしないうばかりか、脅迫がましいことをするので、やむなく、親戚に当たる石川千代松さん方に、又木家の費用で下宿させ、学費を送って、東京の学校に入れてやるという約束で、やっと追い出したようなわけだった。

三輪家に、はじめ入り込むときは、これと少し異なっているが、なんの交渉もない家に同居し、娘と関係し、娘に縁談が始まって母親と関係を結ぶ、その成り行きは、又木家の場合とまったく同じである。

野口家での母堂との関係は明らかでないが、関係のあったことを疑うに足る文書が、家宅捜査のとき出てきている。そ、え、さんから男三郎に宛てた手紙に、それらしいことが書いてあった。

また、母堂の弟は、高橋元吉郎といって、歩兵大尉であったが、その人から寧斎氏に宛てた手紙に、母堂にとって拭うべからざる行為があるが、ただ、寧斎氏と自分の胸のうちだけに秘めておくべきである、と書いたものである。

ともかく、男三郎の生活は、すべて偽りにみち、表裏があった。大杉栄の自叙伝のなかにも、男三郎と一時、獄をともにし、運動のときなど顔を合わせたが、獄中の男三郎は、表裏があり、獄内の評判は決していいものではなかった、と書いている。

男三郎の弁護に当たった花井卓蔵氏が、

「百偽中に一真を探らん」

として探ることができず、

「わからない」

と告白し、

「空前絶後の疑獄」

と書いたゆえんも、ここにある。

いずれにしても、男三郎が犯した罪の原因は、美人で聞こえた寧斎氏の妹、そ、え、さん恋しさのためであったが、当時、獄中にある男三郎をうたったという、『男三郎の歌』というのが大流行した。

ああ世は夢かまぼろしか

獄屋にひとり思い寝の

夢よりさめて見渡せば

あたり静かに夜は更けて

月影淡く窓にさす

見飽かぬ月のさす影は

置く露しげき青山に

静かに眠る兄君の

そのおくつきを照らすらん

ああ夢なりき夢なりき

兄君許し給いてよ

妻よ我が子よ許してよ

とにかく、恋ゆえとはいえ、こんな変態的な犯罰はその後ない。

読者

サロン

投稿自由



いるのがたのしい。

(目黒・由夫)

▼前略、貴誌の計画について小生は、京都のSS生が七月号の読者サロンに書いておられるように、女学生や、ハイティーンのものに興味を非常にひかれますので、ぜひ特集をしていただきたい。あまりむごいものより、多少ロマンチックな感じのほうで貴誌の風格を高め、読者も広範囲に獲得するものと信じます。

モデルも、ういういしく、制服の乙女の特集もよいと思います。東京一女性氏も言っておられたように、心理的に着衣のほろがいつそう強く激しいものを感じさせます。テーマも、BG、看護婦、セーラー服の女学生、バスガイド、花嫁などのフォト、絵を熱望します。江馬美久氏の絵がよくフニイキを伝えて

▼女性の縛られたフォトは、風奇にも類似誌にも数多く見受けられますが、鼻責めのフォトの少ないのには、小生、風奇を入手するたびに残念でなりません。

とくに風奇には皆無といってよいほどです。なぜ、写真部で撮影してくださらないのでしょうか。鼻責めフォトの撮影は、あまり困難ではないと思います。絵画でもよいのです。ドキッとするような鼻責めフォトを切望します。(秋田・横平)

▼私は禪マニアの二十三歳の青年です。東京のある印刷工場に勤めておりますが、禪をはじめから二年、六尺をしめています。最近では、銭湯でさえ禪をす

る人を見受けません。私はそんななかで、ゆうゆうとします。

まして朝など、起きてからグンと一番禪を締めかえたときの気持ちには、まさにモリモリと一日の闘志が湧いて来ます。御誌でも、禪美のフォトを載せてくださいませんか。

全国の禪ファンの方々、読者サロンを通じて、文通しましょう。(29号・吉村)

▼七月号の予告欄に、近く秘蔵版が発売されるとのことでしたが、御誌のことゆえ、さぞ素晴らしい内容をもった秘蔵版だと、今から期待しています。もし企画に入れてくださるようでしたら、かつて風俗草紙でみられたような、一流画家による責め絵をとりあげてください。(神戸・山岸)

▼先日発禁になったマルキ・ド・サドの「悪徳の栄え」の中で、われわれが待望の本格的サディズムの姿を興味深く読むことができましたが、いかがでしょう。貴誌の江馬美久氏によって、血みどろな殺し場を再現していただけませんか。二、三ひろい書きしてみましたので、ご参考

までに。

①「この焼きごてには一本一本、この妊婦たちの一人一人の有罪宣告文が彫り込まれてある。わしは彼女たちに目かくしをつけて自分でこの焼きごての一本を選ばせてやろうと思う」鞭打によりて流産すべし。飲み物によりて流産すべし。足に踏まれて流産すべし。腹を割きて子供を抜き取るべし。

②二十歳から二十五歳までの十二人の裸の娘が、料理を運んで来て、生きたテーブルの上に載せました。皿は銀で出来ていて、たいそう熱く、テーブルを形作っている女たちの尻や乳房をじりじり焦がすので、海のさざ波に似た、たいそうおもしろい狂的な動きが、彼女たちの肉体を細かく震わせるのでした。③彼は剃刀を手にして、犠牲者の乳房を切りとり、あたしたちの前に放り出すのでした。やがてフェルジナンドが次の部屋に行こうと言いました。その部屋には、素晴らしく精巧に出来た機械が据えてあって、今度はこれを用いて、孕み女たち

に風変わりな拷問を加えて楽しもうというのです。まず残っていた二人の女をつかまえると、上下平行に置かれた二枚の鉄板に、それぞれ縛りつけて、腹と腹とがちょうど向き合うようにしました。鉄板と鉄板のあいだは十フィートばかりです。「さあ、面白くなるぞ」と王さまがいうので、あたくしたちは機械のまわりを取り囲みました。フェルジナンドの声がかかると、バネ仕掛けで、二枚の鉄板のうち一枚は上にのぼり、一枚は下におりはじめました。こうして五、六分もすると、今度は二枚が猛烈な勢いでぶつかり合ったものですから、二人の女の体は、腹の中の赤ん坊もろとも赤ちゃんに押し潰されて、またたくまに粉みじんになってしまいました。

以上が、私の希望する絵ですが、江馬美久先生に、ぜひよろしくおねがい致します。

(横浜・砂治)

▼七月号入手致しました。毎号の折込みカラー写真をいつもののしみにしています。今度の落花図絵のモデルの表情は絶品

ともいえるスバラシイものでした。別に、がんにがらめに縛ったものでないのに、モデル嬢の被虐と恍惚とした表情はぐっとイカします。縛られて笑っているモデルのなかにも、こうして苦痛に悶える真のモデル嬢を発見したことは、大変うれしいことです。できれば、モデル嬢の名を載せていただませんか。激励や注文をしたいのです。

(別府・M生)

▼はじめてお便りを差しあげます。私は二十二歳、千葉市内の某病院に看護婦として勤務いたしておりますが、三、四年ほど前からK誌を愛読し、ことに切腹プレイに興味をもっております。

日曜日の非番のときなどは私の友だちと二人で部屋に閉じ込めて、おたがいにプレイを行ないます。昨日の日曜日は、私がお家騒動に巻き込まれた忠臣側の腰元、お友だちは奸臣側のお局といったふうに、私が目の上のこぶにされて、ちよっとした失敗を責め立てられてお局の部屋で切腹させられるのです。切腹といっても、武士のように自らお腹を切るのではなく、う

しろ手でくぐられ正坐させられたうえ、ひざを縛り、お局によって乳房と腹部をあらわにかきひろげられて、背後から短刀で突き立てられて切られるのです。くやしいとは思いますが、殉ずる悲壮な覚悟、私はお局をふりかえって、きつとにらみつけます。

「おうらみ申します」というと、お局は眉をひそめて、グイと私の左下腹を刺し、力を入れて右に切り開いてゆきます。たとえ女の身とはいえ、理不尽なお局、私は苦痛にもたえながら必死にこらえ、切っ先をみつめます。

「強情な、これでもかッ」真一文字に切り開かれた腹部にも、崩れることなく目を見開く私に、お局は業を煮やして、やにわに引き抜いた短刀を右の乳房の下に深々と突き刺します。

さすがの私も、止どめの一突きで、どつとうつぶせに倒れてしまします。こうして私たちはプレイを楽しんでいます。貴誌でも、切腹の写真や絵などを掲載して、少しでも私たちの夢をかなえてください。

(流山・房子)
▼読者サロンが七月号から出来て、われわれファンにも共通の広場が出来たわけですが、全国のファンの方々と、意見を交換したり、文通してみたいと思います。それで、ある程度投稿者の住所氏名を誌上に載せていただかせようか。まじめなグループを育てたいと思います。

(和歌山・河川)

☆読者サロンを通じて全国のファンの皆さんと文通を希望する、同様のお手紙がたくさん編集部に来ておりますが、雑誌の性質上、また読者の方々にごめいわくのかからないことを前提として、現在では住所氏名は誌上に発表しないことになっております。しかし、姓名在社とした場合は、お手紙を先方に回送することもあります。かつて、この種の文通によって、ファンの皆様にごめいわくのかかった例も他誌にあり、当社としまして、その点を考えての処置です。すから、当分、現在のままで、読者サロンをつづけてゆきたいと思えますから、どうぞ、ご了承ください。

(編集部)

『風俗奇譚』の旧号の残部が僅少になりました。お早くお求めください。

創刊・臨時特集号 (売切れ)
艶妖特集号 (二〇〇円)

多色刷写真口絵多数
特集・サディズムの種々相
死体に処女を捧げた娘の話
現代女性の変態心理
柔肌を切り裂く男の愛情
回教残酷譚
女の黒髪に埋もれて死にたい
犬によって快楽を求める女他

悦虐特集四月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア口絵豊富
特集・鞭打の心理と実相
焼け火箸の快楽死
人間と蛇との交情
女の死体に憑かれた男
地獄尼僧院
ピストルを持ったサディスト
変態名画館——ほか

春の臨時増刊号 (二五〇円)

(妖異猟奇艶笑特選25編)
特写グラビア精巧写真口絵
変態性欲考
猫の怨霊
若い女の生胆をとる老婆
会員三百人の男色クラブ
魔の十三号室
吸血鬼譚——ほか

耽美法悦特集五月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア多数
特集・同性愛の種類と実際
マゾッホの被虐待契約書
女の切腹とその心理
女の肉を食べた男
性的イレズミ考
マゾヒストの美酒
ベルトの魅惑——ほか

嗜虐陶酔特集六月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア16頁ほか
特集・フェチズム(淫物症)
マゾヒストの手紙から
浣腸に魅入られた女
マゾ妻「二代目矢作ヨネ」
八十七個の洗濯バサミ
レスポスの日
変態見世物——ほか

画報・風俗奇譚① (一八〇円)

妖美凄絶の迫真緊縛写真百数十葉に加えて変態名画大絵巻
土居啓子無残画帳
小田利美責め絵アルバム
世界怪奇無残譚
変態猟奇名画集
残酷なる女たち
東西快楽的入浴風景

夏の臨時増刊・薫風特別号 (一八〇円)

多色刷特写真口絵・無残石燈
グラビア・荒縄と岩、首つりとくすぐりをはじめ百数十葉におよぶ凄絶緊縛写真は愛好家待望のコレクション
特集・世界怪奇残酷秘話
十代の悪の女王
白肌責め絵図
肉体壁面を彫る男
男性チョン切り事件史
尼僧強姦魔・大米竜雲
マツチの火で毛を焼いて
サド男マゾ女の無理心中
写真物語責め写真家とモデル
絵物語・無法狼、娘しぼり
そのほか変態性欲犯罪実録集

怨羞無残特集七月号 (二四〇円)

多色口絵II落花図絵・女のプリズムほか
グラビアII恋慕受縛・姐上の白魚・吊られる女ほか数十葉
特集・食人症
サディズムの極「食人症」
食人国物語
人肉料理を食べた人びと
ソドム族の告白記
白肌を這う毛虫
若い女を硫酸で溶かす
変態残酷物語

画報・風俗奇譚② (一八〇円)

第1グラビア・鴨居づりほか
第2グラビア・美囚六態ほか
第3グラビア・犬になれほか
以上百数十葉の圧倒的緊縛特写満載
多色口絵・池畔の愉悅
写真口絵・陶酔する女体八景
マゾヒスティック絵画館
アブノーマル秘画展
写真物語・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
惨憺目を覆う殺人現場
人間ステッキ
死の砂漠行
愛欲に狂う氷原ほか

風俗奇譚・八月号

定価 一四〇円

昭和三十五年七月二十日印刷
昭和三十五年八月一日発行

編集発行人 高倉一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一六七

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二九一八番